

上 2N92

78-3

78-3

基督教史

文學士藤谷深勵著

東京 博文館藏版

明治
42 3 18
東京

自序

二千年の昔、猶太國に發生したる基督教が、二千年後の我が帝國現今の精神界を裨益するや否やは頗る疑はしきことに屬す。然れども基督教の思想が我が國の精神界に於て、現に隱然勢力を有することは否定すべからざる事實なり。故に我が國に群集せる各種の思想を打つて一丸となし、渾然たる一大新思想を形成し、以て我が國民將來の精神界を指導せんとする者は皆、基督教の思想を閑却する能はず。必ず探つて以て一大要素となす。加之、泰西諸國に於ては基督教の思想は直接に、間接に倫理思想に影響を及ぼせること大なるを以て、泰西の倫理思想を悟了せんとする者は基督教の大體に通ぜざる可からず。故に苟くも泰西の倫理思想

に通ぜんとする者、又は我が國將來の精神界を指導せんとする者は、基督教を公平に玩味せざる可からず。而して公平に基督教を玩味するには、先づ其の發生發達に關する歴史的觀察に據らざる可からず。

思ふに基督教は其の發達の初期に當りては、善男善女皆之れを直覺的に信仰して、毫も之れを討究せざりき。然るに人文の進歩するや、彼れ等は遂に直覺的信仰を以て満足するを得ず、科學哲學の思想と相容れざる宗教は信仰せられざるに至る。是に於てか當時の哲學的思想に基づきて基督教を合理的に解釋し、宗教上幾多の斷片的獨斷説を統一して、系統的に組織せんとする者生じたり。神學者是れなり。彼れ等は異教徒に對して、基督教を辯護し、基督教の流布を助けたりと雖も、基督教の眞意は之れが爲めに害はれ

たり。何となれば、基督教は哲學的神學に非らず、聖書は論理的哲學書に非らざればなり。殊に神學は基督教を合理的に解釋したるを以て基督教の特色たる實踐的活力を喪失せしめたり。予は基督教の神學的解釋が此くの如く謬れることを思ふ毎に、其の歴史的觀察の必要なることを思はずんばあらず。

本書はジョン・ハースト氏の著「基督教會小史」(John Hurst: Short History of Christian Church) ジェニング氏の著「教會史綱要」(Jenning: Manual of Church History) 等を參考して、基督教發生以來、二千年間に亘れる基督教殊に教會の歴史的變遷を叙述せる者なり。即ち筆を西曆紀元第一世紀に起し、第十九世紀に至るまで、一千九百年間に起れる、基督教界に於ける、主なる現象を逐一叙述せる者なり。紙數に限りあれば、其の述ぶる所甚だ精緻ならずと雖も、聊かも理論を交へず、極め

て公平に事實を陳述することに努めたるを以て、彼の神學的研究の缺陷を補ひ、又一般基督教の研究者に公平なる資料を供し、以て我が精神界に貢獻することもあるべし。尙本書の内容に關しては文學士後藤朝太郎氏の助言を得たる點少なからず。末筆ながら茲に明記して謝意を表す。

明治四十二年一月

著 者 識

基督教史目次

緒言	羅馬	セント、ピーター	一
セント、ポール	ネロ皇帝の虐殺	教義	
三教職	プレスビター	儀式	
洗禮	安息日	奇蹟	
社會と基督教	ゼルサレム没落	エピオナイツ	
ナザリオン	猶太派	ドミシアン帝の迫害	
第二章	第二世紀に於ける基督教		三三
ツレージャン殘害	イグナシウス	ヘドリアン皇帝	
アリスチデス	十二使徒	グノスチック派	
基督教反對の聲	過激黨	基督教の勝利	
第三章	第三世紀に於ける基督教		三一

セザールの法律	クレメシス	三位一體論
ヘリオガバルス帝	オリゼン	デメトリウス
グレゴリ、サマツルガス	デシアン帝の虐殺	ヴァレリアンの暴虐
基督教の隆興	シプリアン	ノヴァシアン
ボルフィリ	マニ教の勃興	マニ教
第四章 第四世紀に於ける基督教	 四四
デオクレシアン帝	コンスタンチン帝の庇護	ドナツス派の分裂
アリウス	基督教と國家	ジュリアン帝と異教徒
四世紀の布教	ウルフィラス	禪宗的風俗
第五章 第五世紀に於ける基督教	 五三
法王の權勢	チストリアン教	教長
羅馬の僧正	コンスタンチノブル	西部歐羅巴の基督教
第六章 第六世紀に於ける基督教	 六一
ジラスチニアン帝	教會の擴張	救世主の性質

宗教の墮落	教會と國家	ベチダクトとモナスチック派
コロンバン	グレゴリ一世の執政	オトガスチン使命
アングロ、サキソン信者	イースター祭の争	英國教會の組織
六世紀の宗教學者	降誕に就いての教義	アサナシウスの教理
第七章 第七世紀に於ける基督教	 七七
モハント教と基督教	モノセリズムの争	ヘラクリウス
タイプスの令	第六回宗教會議	クイニセキスト會議
モノセリズムの會議		
第八章 第八世紀に於ける基督教	 八五
偶像禮拜論	第七回宗教會議	フランクフォルト會議
シヤールマン帝	當時の學者	教會と國家
巡禮旅行	祈禱の言葉	日曜日の意義
第九章 第九世紀に於ける基督教	 九五
レオ五世と偶像禮拜者	セオドール	法王ジョージン七世

西歐の基督教	アルフレッド大王	丁抹
瑞典	諾威	露西亞
ブルガリア	モラヴィア	ポーランド
ウエンド	匈牙利	フィンランド
第十章 第十世紀に於ける基督教 ……………二一〇		
宗教の衰運	法王の衰微	獨身者の制肘
オード及びダグスタン	平和安寧	學術界
ジャバート	ノミナリズム派	レアリズム派
ソクラテス派	フルバート	アンセルム
東西基督教國分裂	ミカエル	レオ九世
東西の不和		
第十一章 第十一世紀に於ける基督教 ……………二二三		
カーデナル	帝王と宗教	ヘンリとグレゴリの争
ヘンリのアルプス越	ヘンリの成功	第一十字軍

モハメツド教徒、指揮者	ピーター	十字軍の表裡
第十二章 第十二世紀に於ける基督教 ……………二三四		
羅馬の王權と法王權	ウオームスの會	ラテンの宗教會議
伊太利の勃興	アーノールド	アーノールドの歸國
ハドリアン四世	アーノールドの影響	ベルナード第二十字軍
第三十字軍	大學の建立	パリス
オクスフォード	ケンブリッヂ	
第十三章 第十三世紀に於ける基督教 ……………二四九		
インノセント三世	第四十字軍	大憲章
インノセントの活動	ポニフェース	基督教の發展
ルブルクイス	マルコ、ボロ、	プロシア
レイモンド、ジユリー		
第十四章 第十四世紀に於ける基督教 ……………二五九		

ポニフノース	クレメント	法王ジョンとルイ十四世
ニコラスとルイ	法王権不振	ウルバン六世
欧州諸王	ウイタリフ	ウイタリフの感化
功蹟	ローランドの徒	ポヒミア人の運動
ポヒミアの宗教改革	神秘派の運動	リスニアの改宗
土耳其	支那	
第十五章	第十五世紀に於ける基督教 ……………一七五	
ビザの會議	ラヂスラウス會	コンスタンスの會議
ジョン法王排斥	フスの末路	マルチン五世
欧州の教會狀態	基督教發達	サキソン人
フマニヅム學派	ラテン復舊	フマニヅムと宗教
文學界	ロイヒリン	エラスムス
トーマスモア		
第十六章	第十六世紀に於ける基督教 ……………一九二	

宗教改革の氣運	改革の二特質	時代の聲
改革の先覺者	マルチン、ルツテル	他の改革派
新辭語	聖書翻譯	スピレス會議
プロテスタント	ジングル	カルヴァン派
ツレントの會議	英國の宗教改革	エリザベス
ブラウン派	スコットランド宗教改革	佛蘭西宗教改革
其他宗教改革	改革の結果	
第十七章	第十七世紀に於ける基督教 ……………二二二	
カルヴァン派の自由意志	グロシウス	三十年戦争の影響
カルヴァン派の勝利	ゼームス一世の世	英國の基督教
露西亞の希臘語		
第十八章	第十八世紀に於ける基督教 ……………二二三	
ゼスウイト派の争	ピアス七世	フランシスザヴィエと日本
ブラジル布教	メキシコ布教	クレメント十三世

ボヒミア、丁抹の布教	マリア、テレサの政策	反動的カソリック派
佛蘭西革命の原因	基督教の緩和	ボナパルト
ルーテル派の模様	獨逸哲學派	レッシング
英國教會の黄金時代	女王アーン	アントニー、コリンズ
ルソー	ユーム	メンヂェスト派
エヴァンゼル派	日曜學校	アメリカ僧正任命
對法王策		

第十九章 第十九世紀に於ける基督教……………二三七

ピアス七世	ナポレオン、ボナパルト	ピアスの入獄
チャールズ十世	レオナ二世	ヴァチカン會議
マック、オールの活動	伊太利及西班牙	獨逸
瑞西	和蘭陀	スカンデナヴィア
英國の文學と宗教	ロイドバイロン	セリ
ウォールト、ウォース	アーンノールド	歐洲以外の基督教

基督教史目次終

プロテスタント	アメリカ印度人布教	印度の布教
支那の布教	ビルマ地方	日本の基督教
朝鮮	西部亞細亞	シリア及びゼルサレム
土耳其	亞非利加地方	メソヂスト
プレスビテリアン	リビングストーン	コンゴ自由國
大洋諸島	基督教化の結果	摘要

基督教史

文學士 藤谷 深勵 著

第一章 第一世紀に於ける基督教

緒言

基督教の歴史は佛教の歴史と同じく其の由來するところ頗る遠し。其の最初の起源に關しても此れが一々宗教學上の見地に基づき史的事實を拉し來たりて充分なる考證を遂げ盡すが如きことは頗る困難なる研究に屬す。されば本書に基督教の歴史を觀察せんとするに當つても成る可くは難を避け解し易き點を取捨斟酌して茲に敘述せんとす。基督教の最初の現象として吾人の説かんとするところは先づかのセント・ピーター(S^t. Peter)及びセント・ポール(S^t. Paul)の晩年のところより筆を起こして、次いでネロ(Nero)皇帝の虐殺のことに及び、かくて又當時基督教の教義が如何に發展しつゝありしか引いては當時の教職は

如何なる模様なりしか、教會の儀式は如何。又教會と社會との關係は如何にありしかの問題より、又當時奇蹟の現象が如何に考へられ居たりしかの問題を通覽し、次いで、かの聖地として傳へられたるエルサレム(Jerusalem)の町の没落に至る迄の此れ等の大體の模様を説き述べて、以つて此の章を結ばんとす。記すところ簡單なりと雖も、今左に此等諸點に關して順次その要を摘まんで其の觀察を試みんとす。

羅馬

世界的生命を有する我が基督教が最初西方諸國に向つて其の發展の道を取りしことは基督教發達史上蔽ふ可からざる事實なりとす。殊に其の福音の傳道が羅馬帝國に於いて最も顯著なる現象を現はせし點は、これ吾人の大いに注目す可き現象なりとす。而して此の羅馬に於いて基督教の光りが現はるゝに至りし由來に就いて考ふるに、こは一つに全く使徒セント・ポール(Saint Paul)の功績に歸着せしめざる可からざるなり。げにや基督教即ち Christianity の當時の活動力なるものは總べて舉げて、ポールが身の兩肩に懸り居たりしと云ふも過言に非ざるなり。而してこの羅馬の地たる其の地理上の位置が基督教の教

理を更に西方諸地方に或は北方諸國に傳播せしむるに就いて頗る好位置に在りしや論なし。此の舞臺にポールは現はれ出で、其の畢生の力を振ひ盡して末は圖らずも非命の災に殞るゝに至りたりと雖も、而かも之を宗教上より見る時は天晴れ其の終りを全くせしものと云ふべきが如し。否、ポールがその死に殉じて反つて其の道の教理は一層高まり、彼れの事業は死後益効果を表はすに至りしものに似たり。ポールが傳道上の功蹟に就いて述ぶ可きもの多々ありと雖も、先づ時代の上よりセント・ピーター(Saint Peter)に就いて豫め略言するところなかる可からず。

セント・ピーターは基督教史の上に於いて最も早く現はれ、久しくパレスティン(Palestine)の地に在りて活動せし使徒なり。後彼れはエルサレム(Jerusalem)に來たり、茲にポールと協力して種々心を碎き猶太に於ける宗教上の儀式をば總べて之を基督教の式に改めしめんことに勉めたり。しかのみならず、ポールは猶太教が制肘せる總べての羈絆を打破し、猶太及びゼンデルの民をして悉く基督教化せしめたり。かくてポールは小亞細亞を経てユーフラチス(Euphrates)

セント、ピ
ター

の河畔バビロン(Babylon)のあたりまで傳道福音の旅行を試み常に東方猶太の民衆に接して傍ら基督教の教へを艸せり。かくピーターの東方に在りて活動し居たりし際ポールは西の方羅馬に於いて同じ道につとめ居たり。ピーターがゼルサレム及びバビロンの地方に於いて傳道に従事し居たりしことは争ふ可からざる事實なり。然るにコリンスのディオニシアス(Dionysius)が記録によればピーターが羅馬に在りし事蹟の記事あり。されどこは未だ歴史上果して信を置く價值ありや否やは全く不明のことに屬す。素とよりピーターが羅馬に居たりしことの確證は未だ充分發見されずと雖も、全然之を否認することは出来ざるに似たり。何となればピーターは紀元六十七年ネロ(Nero)皇帝の時十字架の磔の刑にて殺されたりと云ふ事實あればなり。

次ぎには前に紹介し置きたるポールに就いて記るさんに、ポールは其の性格の嚴正にして、其の天才の非凡なるまたその學殖の深遠にして活動の神秘的なることなど一つとして當時の使徒中迥かに群を抜きたるものなり。されば敵異端の徒に對するも、能く其の教化の功績を收め得て、かれが首尾よくかの三

セント、ポール

大傳道の旅行を成し了へ得たる如きも決して偶然に非ざるなり。即ち、その三大傳道旅行とは、

第一回(紀元四十四年出立)サイプラス(Cyprus)小亞細亞地方、

第二回(紀元四十八年出立)シリア(Syria)小亞細亞地方、

第三回(紀元五十二年出立)ガラシア(Galatia)小亞細亞地方、

への旅行となす。ポールは此の三回の旅行を了へてゼルサレムの聖地に歸る途中端なくも羅馬人の手にかゝり囚はれて、羅馬の都に護送され、茲に二ヶ年間囹圄の身とはなりぬ。紀元六十一年許されて獄を出づるを得たれども、傳道に熱心せるポールはいかで之が爲めに天職を怠る如きことあらんや。獄を出づるよりも早く、ポールは又第四回の傳道旅行にと出掛けたり。即ち、

第四回(紀元六十一年出立)フリート(Creta)小亞細亞地方、

是に於いて彼れは再び囚はれて羅馬に護送せられ、かく迄宗教上の活動を重ねしかれば、紀元六十六年遂にネロ皇帝の怒りに觸れ、斷頭臺にかけらるゝ身とはなれり。

以上ピーター及びポールは第一世紀に於ける基督教活動に就いて特筆すべき使徒なりとなす。其の他 John の如き James the Elder の如き又ユーセビウス (Eusebius) フィリップ (Philip) などの如くあまたの使徒續いて諸地方に現はれ來たり、基督教福音傳道の爲め其の道につかへ、其の説くところは多く記録に書きとめられ、以て聖書の重要な部分に形成せらるゝに至れり。殊にポールが傳道旅行と及び其の一旦囚はれて羅馬に到りし以後獄中にて艸せし教への文書とは共に基督教の教理と眞理を含めるものなり。こは爾來今に至るも永久不朽神聖なるバイブル Bible の重要部分を占め基督教の經典としてあがめらるゝに至りしもの即ちこれなり。

一世紀に於ける基督教發展史上最も注意す可きは以上にも述べたる如く、チロ皇帝より蒙りたる基督教の迫害なりとす。一方に於いて基督教の勢力は、決河の勢を以つて發展せんとしつゝあるに反し、羅馬チロ皇帝は極力之が撲滅につとめたり。最初チロ皇帝は炮烙の刑を以つて之が教徒を殺戮せんとせり。時に紀元六十四年なり。其の後皇帝の死に至るまで教徒に對する殘忍酷薄の

チロ皇帝の虐殺

態度は毫も變ることなかりき。而して苟もチロ皇帝の犠牲となりしものは孰れも恐ろしき殘酷の觀念を以つて聯想せられざるものあらざる程なりき。其の一旦犠牲となりしものは必ず十字架の磔にあひ、屍骸は或は放擲せられて野獸の弄ぶところにまかせられ、或は松脂を塗り、松明にくすべなどして之れを街上に曝らす。其の慘狀眼もあてられざる程にして、邪險無殘の極をきはめ居たり。

チロ皇帝以後基督教の歴史は多く迫害の歴史を以つて蔽はれ、コンスタンチン (Constantine) 帝の時代に至るまで其の狀態はあまり變らざりき。吾人はかく迄に政治的壓迫を蒙りつゝありし基督教が此の狀態の下に於いて如何なる方面に發展することを得たるか、又如何なる教職を發達せしめ得たるか。其の奇蹟及びその社會上の關係は如何に在りしかの點に就いて左に少しく詳細に觀察を下さんと欲するものなり。

一 基督教の教義

新約全書に據るも見らるゝ如く、基督教の偉大なる教義原則が使徒時代に於

教義

いてかの猶太の改宗者の爲め、又アレキサンドリア (Alexandria) の哲學者の爲めに種々の影響を蒙りしことは争はれざる事實なるが、茲に又第三の影響を與へたるものあり。羅馬の政治的組織より蒙りたる影響即ちこれなり。我が基督教は此の影響によりて、其の統一の上に又成立の上に一種特別の色を帯ぶるに至れり。テロよりコンスタンチン帝に至る迄の數世紀の時代にわたりて基督教が一種特別の性質を具有するに至りしは全く此れが爲めなり。讀者その心して此の時代の基督教を観察せられ度し。假令神の力 (Divine Power) そのものは神聖にして光りある可き筈のものなるも神に代りて其の之を振り舞ふ當事者だちの爲めに少なからず朦朧たらしめられたる觀あるが如き又察せらる可きに似たり。實に基督教發達の方向と及び基督教の眞髓たる可き教理とは多く此の使徒時代 (Apostolic times) てふ基督教の最初成立し始めたる時代に於いて既に胚胎せるものなり。而してその發達に關しては殆んど常に社會全般の要求するところ及び人類全體の福利安寧と齟齬矛盾することなどなきやう同じ歩調を保つて進みつゝあるに似たり。されど基督教の教理よりすれば其の發

達が如何にあり、其の眞髓が如何に見られやうとも、吾れ吾れ人類の心裡に常に生じ來たれる弱點そのものについて先づ考察せられざる可からざるなり。凡そいつの時代に在りても、苟も世界のうちに基督教國として存立するものに、一つの罪惡なく、つゆ一點の汚れだに宿せぬ潔白なる王國としては全然なしと云ふも過言に非ざる程なり。苟もその國たみの一旦神の靈光に照さるゝや無量の心中何等かの雲りを感じ來たりて之を悔ひざるものはあらざるなり。其の之を感じざる如きは未だ神の靈光に浴せざるに依るのみ。世界一般の状態はかくも汚れに充ち滿ちたり。然りと雖も基督教の教理は神の靈光と神の力とによりて其の發達を永遠に期し時代の差別國土の差等などなく一様に心靈上の弱點に對し、社會上の弱點に對し又智的の欠乏に對してよく、其の靈光を得せしめんことにのみ勉めてやまざるなり。

二、教會と教職

基督教の教職には早き時代より三段の有名なる教職を發達せしめたり。三段の教職は第二世紀の中葉に至るまでは未だ各地到る處に之を見る能はざり

三教職

しも。新約全書の記るすところによりて略之を察することを得べきが如し。即ち。

α アポスツル (Apostle) …… 聖差又は使徒

β エピスコパート (Episcopate) …… 牧師監

γ ビショップ (Bishop) …… 僧正

是れなり。このうち聖差即ちアポスツルは耶蘇基督の使僧たりしものにして教職中最も早く現れたるもの、ポールの如き其の聖差の一人なり。次ぎのエピスコパートは教會牧師の上に立つ教職にして、事實上は以前のアポスツルの位置に相當す可きものなり。更らに第三のビショップ即ち僧正に就いて考ふるに、これも事實上はアポスツルの教職と異なるなし唯その時代に於いておくるゝの差あるのみ。即ち古くは聖差 (Apostle) と稱せしものを後の時代に至りて僧正 (Bishop) と呼び代へるに至りしまでに過ぎざるなり。英國に於いては牧師監と僧正とはその歴史的因襲の結果役目の上の差別が甚しくなりたるが如き傾向あるもその素とを詮づれば左までやかましき差等のありしものに非ざるな

プレスビター

り。又牧師監と僧正とは共に孰れも會堂の長即ちプレスビター (Presbyter) の名に適用せらるゝことあり。現に新約全書に於いても牧師監 (Episcopus) を以つて會堂長そのもの、如くに用ひられたるところ多し。されどこは恐らく原語のプレスビター (Presbyter) なる言葉の原義が「年長者」又は「古參」の意を有し猶太にて之を僧侶一般に適用せられ居るを以つて茲にも尙同様に用ひしものなるべし。こは唯一例に過ぎざれども我が基督教の教職の名にして猶太教のそれに類同を求め以つて猶太組織 (Jewish system) の幾分を採用するに至りしもの往々にしてこれあるが如し。

儀式

次ぎに當時の教會のつとめが如何なるものなりしかに就いて觀察せんに、其の主なるものは大抵舊約全書、使徒聖差の手書、福音書によりても察するを得べし。即ち教職に在るものは説教と講義によつて聞き手の心をして専ら神の深き心靈に觸れしめんことにつとめ、或は又讚美歌により若しくは音楽によりなどして信徒を教化せんことにつとむ。デヴィッド (David) の讚美歌と、豫言者の美調とは殊にそのうち最も恰好のものなり。讚美歌の外に又祈禱を行ひ、祈禱

を丁へて一同アーメン(願ひの如くあらせ玉への義を唱ふ。つとめの後に又神に晚餐をさぐ。紀元二世紀の半葉迄は又愛の御馳走のしるしにとて欠伸の式を付け添へ居たりしことありしも、後には其の濫用甚しきを以つて、遂にこれのみは廢せらるゝことゝなれり。祈禱の後には又互に慈愛の接吻をなし次いで贈物施しの讀み揚げあり。これその祈禱に次ぐつとめの一般なり。

尙古代に於ける教會堂の儀式の主なるものに就いて述べんに、そはバプテスマ(Baptisma)と稱する洗禮式を以つて最も著明なるものとなす。基督教に於いては古くその使徒時代の當初より既におきまりの如く神の名によりて此の儀式を行ふ。その唱ふる言葉は即ち、

“In the name of the Father, Son, and Holy Ghost”

と云ふ形式なり。洗禮の儀式に就いて從來種々の議論あり諸説紛々たりと雖も、然れども、使徒の時代に引きつゝいて既に此の儀式あり、靈光ある神の前にて水中に浸し洗ふ習ひなることは基督教國全體を通じて變りなき風俗なるが如し。其の後十二使徒の教へ(Teaching of the twelve apostles)によりてその形式は確定

洗禮

せらるゝに至りしもさすがに洗禮の素との儀式は多少くづれて、その充分に洗禮の行はれがたき場合などは、單に水を注ぎかけ又は水を打ち撒らすのみにて事を濟ませる如き有様とはなれり。やがては會堂の儀式が束縛を脱して多くは自由となり、又素と使徒時代の潤達なる形式も大抵は恢復せらるゝに至れり。畢竟するに當時の此の傾向は基督教本來の精神に最もよく一致し、且つ又教義の儀式にも最もよく適合したるものなりと云ふを得べし。

安息日

洗禮に次いで云ふ可きは安息日(Sabbath)のことなり。安息日は七日目毎におかれたる休息日にして、始め猶太教徒の基督教に改宗せし信者が守り居たりし風習なり。一週の第一日なる日曜日は素と神Yahwehの再誕の記念日として定められたる日なり。此の日を安息日として漸次一般に認めらるゝに至り、素との意味に於ける七日目の休日は茲に全く守られざるに至れり。猶太の改宗者新基督教徒は流石にかれ等が舊來より慣れ來たれる祭禮儀式をば容易に之を棄てもせず、否棄てざるのみか、反つて崇重なる態度を以つて之につかへんとするの傾向ありたり。然れども遂にはその舊來の祭禮儀を打ちすて、唯そのうち

の二つ、即ち、

α イースターの祭(Easter)

β ペンテコーストの祭(Pentecost)

のみを傳ふるに至れり。蓋しこの二大祭典は後世基督教の歴史上に最も重要な二大儀式にして即ち神の再誕と神靈の降誕を祝ひ、永久記憶さるべきものとなりしものなり。

三、奇蹟

基督教成立の當時に於いては奇蹟に關して眞實ならぬ偽の奇蹟の如きものはなかりしも二世紀に至りてジャヌチン(Justin)、三世紀に至つてオーリゼン(Origen)などが目撃せしものを記るせるところによりて見るに、當時人爲又は怪神の力を以つてするも到底癒する能はざりし病ひ煩ひ、氣狂ひなどの不思議にも根治され居たることありとの傳説あり。されどこれ等は皆當時の心理學によりても又沃怪談によりても相當に説明し得らるゝものなるべしと雖も、オーガスチン(Augustine)などの云ふところに依れば、以上の不思議話しは皆時代に於

奇蹟

社會と基督教

いて比較的おくれたるものゝ如く而して眞の使徒時代の奇蹟は當時既に消えて全くその跡を絶ち居たりしものに非ざるかと云へり。其の後の奇蹟に就いて尙かれが云々するところを見るに後世の信者を欺ける多くの奇蹟は主としてその後に至りて始めて生ぜし偽の奇蹟に外ならざるものなりと比定せり。一概に奇蹟(ミラクル)と云ふと雖も吾人はそのうちを大いに區別して考へざるべからず。即ち後世の偽の奇蹟と神聖なる聖書に見ゆる眞の奇蹟とは全然同一視すべからざるものなり。何となれば、吾人が今茲に奇蹟と稱するものは唯單に基督教の最初の説教者即ち使徒に於いてのみ初めて認めらるべきものにして決して使徒時代以後となりては此れが又と再現するが如き性質のものに非ざればなり。

四、基督教と社會との關係

猶太教の信徒漸く増加してうちに熱心なる信者を生せんとするに際して、一方に基督教の趨勢も亦勃興の機運に向へり。而して後者基督教は異端猶太教徒の爲めに迫害を蒙りしこと幾度なるを知らず。殊に基督教がその教義に於

いて社會の上流、智者などをば主たる相手とせずして、専ら貧者、賤民、無智、奴隸の徒を教化の相手となせしかば、これが爲め端なくも異端社會の上流、識者、學者たちより憤怒を買ふに至れり。羅馬の町に於いてその教義の主張せらるゝや、忽ちにして、羅馬在來の宗教に抵觸せり。羅馬は羅馬の國教と其の國土の神を認むるのみ。羅馬の天地に未だ知られてもなき外來の新神々は唯ひたすらにシセロ (Cicero) の怒りを招くのみなりき。若し新奇なる神を信じ之に禮拜を捧ぐる如きものある時は刑罰、甚しきは死刑を以つて之を罰するジュリアス (Julius) の裁判官さへありたりと云ふ。

かく基督教は羅馬に對しては、新奇の宗教たり、素とより國教に非ざれば、尊王を以て教義ともせず、専ら普及的にして活動的進取的なり。その羅馬に容れられざる故ありと云ふべし。當時基督教はその羅馬の町に一つの寺院だも有せず、立像をも有せず、且つ何等の供へ物をも有せざりしと云ふ又實に故ありと云ふべきなり。されば基督教は最早や羅馬に於いて外見的設備を求むることをやめ、専ら吾人人類の良心と心情そのものとに訴へんとてその方面に腐心せり。

ゼレンサレム没落

この故に基督教は羅馬の上下に曲解せられ羅馬人の思想にてその最も惡める異端邪教の階級に見下げらるゝに至れり。かくの如く一世紀に於ける基督教は一方に於いて猶太より攻撃を蒙りたる上に又羅馬の迫害を再三蒙り實に見る目も慘憺たる模様なりしなり。

吾人は後章に於て古代基督教の制度及び内外の關係について順次其の大要を観察せんとするにあたり、吾人は豫め先づ其の迫害の歴史に就いてその摘要を述べ置く必要あり。

一世紀に於ける基督教史を通覽するに二三の注目すべきことあり。即ち紀元七十年タイツス (Titus) の時ゼレンサレムに於いて神の宣告を實行したることあり。これが爲め暴君フロルス (Florus) は基督教に對して反亂を引き起こせり。シリアの君主がガルス (Gallus) 極力之が鎮定につとめたりと雖も遂に利あらず。戦は六ヶ年間にわたりて續きたり。結局聖地ゼレンサレムに於ける基督教徒は僧正シメオン (Symeon) に従ひて同地を引き揚げシヨルダン (Jordan) の東方ペルラ (Pella) の地に遮難するの止むを得ざるに至りぬ。以後六世紀に至る迄基督教徒

の殖民地は此のペルラの地に残りたりき。されどエビオナイツ (Ebionites) 及びナザリーンヌ (Nazarenes) 二宗派のものは早くも二世紀前に免れて外地へ移住せり。

エビオナイツ
とナザリーンヌ

爰にエビオナイツ (Ebionites) 派と云ふはこは素とヒブリユウ語のエビオニーム (Ebyonim) 即ち『貧民』の義を有する言葉より出でし名稱にして、最初は猶太人の基督信者たりしものにつけたる綽名なりしなり。ナザリーンヌ (Nazarenes) の名稱も亦同じ綽名に過ぎざるなり。されど此のエビオナイツも又ナザリーンヌも共に基督正教派 (Orthodox Christians) の信徒が嘲弄的に呼びなせし名稱なることは争はれざるなり。即ちエビオナイツの方は基督信者にして而かも猶太教化したるものを云ひ、その福音のうちに於いても唯猶太教の發達をのみ認めんとするものなり。即ち此の派のものは基督を以つてジョーン・パプタイスト (John the Baptist) によりて初めて救世主 (Messiahship) と定められたるものとなし、その基督を以つて即ち神國ゼルサレムの地を恢復せしものとなせるなり。ナザリーンヌ (Nazarenes) は前者と全く別派なり。此の派のものはシリア (Syria) の

ア (Baran) の地に在りて極力パリサイ派 (Pharisaical school) の宗旨に反対しいたくその同胞の不信なるものを悲しめり。かれ等は又セントポール (St Paul) の使命のうちにイサイア (Isaiah) の豫言の實行せられたるを見たり。尙基督の降誕についてはセント・マツシユネー (St. Matthew) の考へに一致してヒブリユウの福音を襲用し且つ基督の神聖なる教義をも認めたり。かれ等は又モーゼス (Moses) の誠をよく守り居たりしと雖も、ゼンテイル基督信者の如きは殆んど之を眼中に置かざりき。

猶太宗派

シリア及びゼルサレムの地方は既にかくの如き模様なりし際パレスティン (Palestine) の地には又一種新しき教義の起らんとする氣運を有したり。一世紀に現れたる異端主導者の多きがうち次に挙げたる二人はその特に注意すべきものなり。即ち、

一、ドシセウス (Dositheus)

二、シモン・マーグス (Simon Magus)

これなり。此の兩人は殆んど狂氣の如くになりてサマリタン派 (Samaritan) の宗

旨を唱へたるものゝ如し。前者ドシセウスの名は左まで高からざるも後者シモンの名は無稽矛盾の談柄に富みたるにて著し。されば後世に於いてもシモン(Simon)は神話の主人公として屢用ゐられ、聖書にも Act VIII の部に現れたり。シモンの物語りに連關して弟子メナンドー(Menander)は亦神話の上によく知られ、グノステイックのエオン(Gnostic Aeon)の化身と云へるもの即ちこれなり。

ドミシアン帝の迫害

一世紀の末葉紀元八十一年羅馬のドミシアン(Domitian)の爲め基督教徒は又少なからぬ迫害を蒙りたり。此のドミシアンなる帝王は性質偏狭羅馬の人士が其の無神教を誹謗し、猶太派の風習を罵じりたりとて數多の誹謗者を放逐せりと傳へらる。ドミシアンの従弟フレツィアス、クレメンヌ(Flavius Clemens)及びエシリアス、グラブロー(Achilius Gubro)の如きも其の基督教徒なる故を以つて罪せられたり。げにやドミシアスは基督教徒及猶太教徒に對して法令を布きたりと云はる。事實の如何は兎もかくも事情は左もあるべかりしことなり。

又テルツリアン(Tertullian)の物語りによるにセント・ジョーン(Sr. Johns)は當時ラテン門(Porta Latina)の前面に於いて沸き立ち返る油の煮え釜より辛くもその

危険を免れ得たりしことありと云ふ。こは一般の信せる如くたとひ虚構のこととなりとするも、かのイリチウス(Trenacus)の記録に見えたる如く使徒のジョーンが其の刑罰にかけられしことが宛かも丁度此のドミシアン帝(Domitian)の當時なりしことは信すべきに似たり。又かのヘゲシプス(Hegesippus)の記るせるところに依りて見るにドミシアン帝は基督の親戚にて且つデヴィット(David)の子孫なる二人の基督教徒を囚へ之を拘留したることありと云ふ。蓋し帝は信者の希望が天國に在りしことを知らず之を曲解し居たりしを以つてなり。さればにや此の二人素と何等の罪なく唯一個の賤しき民に過ぎざりしことをさるとるに至るや、帝は遂に之を放免するの止むなきに至りたりと云ふ。

此の珍事ありし以來ドミシアン帝の基督教徒に對する態度いくらか變りしものゝ如く、帝の暴虐は茲に終りを告げたり。即ち信者にして刑に在るもの多く許されて返さるゝに至れり。信徒漸く蘇生の思ひをなす日は來れりと云ふべし。次いで紀元九十六年ネルヴァ(Nerva)皇帝はドミシアン帝のあとを承けて現れたり。かれは先帝の政策を變更して専ら基督教徒を寛容せんことにつと

めたり。かくて此の時代に於ける一般の對基督教の非難は一時中絶して先づ基督教は安きに就かんとするの氣運に向へり。

第二章 第二世紀に於ける基督教

一世紀の末葉漸く安きに就かんとせし基督教の氣運は二世紀に入るよりも早く又もや逆境に立たざるを得ざる運命に際會したり。即ち基督教に對するツレージャン(Trajan)の法規の布かれて大いに基督教徒をなやませしこと即ちこれなり。紀元百十年ポントス(Pontus)市長プリニー(Pliny)は法律により基督教の發展を妨害し宗教上の詭辯を弄して盛に教職に在るものを惱ましめたり。罪なく汚れなき日曜日の集會は譯もなく束縛せられ神聖なる晚餐の會亦拘束せらるゝに至りぬ。プリニーは又基督教徒が禁酒を主張して神前にみきを供ふることをすら絶對に拒みたるを憤り遂に之を以つて融通の利かぬ頑陋者として死刑に致せりと云ふ。ツレージャン(Trajan)が後に發布せし詔勅亦此の間の消息を窺ふる足るものあり。假令其の處刑上に於いては進んで死刑をなす

ツレージャンの殘虐とプリニーの法規

シメオン、ヘゲシプス、クレメンヌス、パピアス、イグナチウス、

ことを禁じたるものに似たりと雖もその帝の基督教に對する方針が那邊にありしかは充分察するに難からざるなり。

ヘゲシプス(Hegesippus)の記録によればエルサレム(Jerusalem)の僧正シメオン(Symon)は高齢の身を以つて朝夕布教につとめ居たりしに圖らずも此の時死刑臺にかけられたるの事實あり。又羅馬の僧正クレメンヌス、ロマヌス(Clemens Romanus)は布教の故を以つてツレージャン、ユージェビウス(Frigian Eusebius)帝の三年遂に死刑に處せられたり。蓋しクレメンヌス(Clemens Romanus)はかの使徒セント・ポール(St. Paul)の同僚として取り違へられ圖らずも此の禍にかゝりしものなり。是れ或はかれクレメンヌスがコリンスの信者(Corinthians)に宛て、送りし信書經文の中に或は基督經典として目せられたることありしには非ざるか。アレキサンドリアの經典(Codex alexandrinus)及び聖書に見えたる文言亦茲に併せ考ふ可きものなり。其の説き方と言ひ、その教義と云ひ實に吾人をして使徒のそれをまのあたり見るが如く感せしむるものあるが如し。

後の希臘の聖書(Greek Epistle)及びその他の經典は古代に於いて既にクレメン

スの作なるが如くにかれに歸して辯難攻撃せられたり。又セントジョン(St. John)の門徒アンチオク(Antioch)の僧正たるイグナシウスはこれ又布教の如くを以つてツレージャン其の人によりて有罪を宣告せられ果ては野にかばねを曝して野獸の弄ぶところにまかせられたり、此のイグナシウスは實に基督教古代史上忘るゝ可からざる僧正にしてかれがアンチオク(Antioch)より羅馬に到る途中に艸せし信書經文の如き當時基督教確立上に頗る與つて力ありしものなり。こは後一時偽善者の筆によりてその改竄せられ補足せられたる個所頗る多かりしと雖も遂には又後の考證家によりて根本的に校正せられ、爲めにイグナシウスの十五通の信者は結局七通となり最後に三通にと精選せらるゝに至れり。

ツレージャン(Trajan)の御世には又ヒエラポリス(Hierapolis)の僧正パピウス(Papian)あり。パピウスは基督千年説(Millennium)を信仰して耶穌は千年間此の世に在らせらるゝとの教義を布教し居たり。かれはジョン(John)の門弟にあらされどもジョンの教へ(Revelation ch. XX)を傳へたり。その千年説の教へ

ヘドリアン
帝と基督教

クワドラス
とアリスチデ

の如きは信徒頗る多くコリンス人及びモンタニ人のみならず尚ジャスタンイリチアスその他正教派のものによりて大いに信せられたりし教理なり。

紀元百十七年ヘドリアン帝(Hadrian)の立つに及んで基督教は舊來の如く迫害を蒙むることは頗る減じたる傾向を現はせり。蓋し帝は基督教に對し寧ろ一種の信念を扼き勉めてその信徒を保護せんとしたる程なりき。されど流石に其の宗教に關する法規に觸るゝの所爲あるものは刑罰にあひたり。

ヘドリアン帝の時代に於いて尙多少注意すべきは希臘アゼニス(Athenes)に於いてクワドラス(Quadratus)及びアリスチデス(Aristides)の二人の宗教學者を生み出せしことこれなり。かれ等は倫理學者にして且つ哲學者なり。「謝罪」Apologies を書いて名あり。

降つて紀元一三二年パレスティン(Palestine)の地に於いてバーユチバ(Bar-Cochba)なる者現はれたり。自らヤコブ(Jacob)より出でたる「星の子」と號してゼルサレム(Jerusalem)を回復しヘドリアンがジニビーター寺院の建立に反對して多く猶太の教徒をその旗下に叫合したり、其の叫合に應し來たらざるものは之を

バーナバスと
十二使徒

虐げあらゆる迫害を基督教徒の上に加へたり。又キオプラトン派のセルヌス(Celsus)も基督教を辯難攻撃して耶蘇の降誕に關する奇蹟並びに福音を罵倒せり。

當時基督教の重要な記録として現はれたるものに就いて考ふるに、其の最も著明なるものは紀元一〇〇年より一四〇年の間に現れたるものにして、バルナバスの經典(Epistle of Barnabas)及び十二使徒の教へ即ち之なり。前者はシナイッス(Sinaitus)の經典に見え基督教の道德的教訓を物語り風に説けるもの、後者はブリエンニオス(Bryennios)の説き明かせしものにして、當時盛に行はれたる洗禮に關しても興味ある物語あり。蓋しこは洗禮と浸禮との交互行はれたりし當時の模様を知る上には最も古く且つ信頼するに足るべき材料なりとす。

紀元二世紀の前半は又グノスチック(Gnostic)派の最も全盛を極めたる時代として記憶さるべき時代なり。されば今簡單に此の派に就いて少しく述ぶるところあらんとす。

グノスチック
派

グノスチック派は最初蛇の崇拜者としてのオフィアイト(Offites)の組の埃及に

立てられたるに歸因す。後基督教の形式を採用し且つ東方諸國の神學の智識を多く加味するに至れり。基督教に對してはその異教徒にむかつて耶蘇の眞理を説き知らしめ、基督の教を鼓吹するに在りたり。パシリデス(Basilides)及びヘラクレオン(Heracleon)の如き全福音者を講義してその道を廣めんことに孜孜としてつとめ居たり。グノスチック派は又僧正をもち立て使徒の教へを高むることにも與つて力ありしものなり。然れども此の氣運にまかせて、基督教が徒らにグノスチック派の爲めにその影響を受くることもあるに至らば基督教は反つて危険なる運命に至るや疑ひを容れず。僧正等早くも之を看破し、團體を形成して陰然グノスチック派に對抗せり。これが端しなくも羅馬に於いて兩派の間に敵意をさしはさむの緒とはなれり。

羅馬の學者及び希臘の識者たちは一方に基督教を攻撃して他方には盛に新教グノスチック派の勿體さを稱呼し來たり。

今史家タシッス(Tacitus)の言ふところを見るに彼れは基督は新宗教の開祖にしてバイレイトに處刑せられ、かれの教理は甚しき迷心の集め物の如く、その信

基督教反對の
聲

徒は人類界に害あるとも益なきものなりと迄極言せり。

又アントニムス(Antoninus)は云ふ、吾人の精靈の三は何時悪魔の誘ふところありて、肉身と離れざる可からずと又ジュヅナルは基督敎徒を以て天の飾り物に過ぎずとなし、ルシアン(Lucian)は基督敎を以て他の宗教と同様に無用視して痛く之を冒倒し且つ基督を以て一個の魔法使ひの如くに見なし、ジョナー(Jonah)がガリレアの海(Sea of Galilee)を涉みしことを以つて滑稽視し、甚しきはジョーンが新ゼルサレムの記述を以つて嘲笑の種子となせしが如きその一例なり。

總じて羅馬の學者は口を極めて孰れも基督敎を以つて憐む可き賤しき迷心に過ぎずと迄侮辱せり。タシツスが基督敎を評して、

『有害なる迷心』(Eximabilis superstitio)

と云へる、また以つて當時の思潮を汲むに足らんか。

基督敎辯難の聲高きうちにもわけてその毒舌を放つものはセルヌス(Celsus)ポルフィリ(Porphyrus)及びヒエロクレム(Hierocles)なりとす。セルヌスは二世紀の中葉に現はれたる人にして超然的神を信じ精靈の不滅なることを主張せり。

過激派

蓋しこはかれがプラトーン(Plato)の哲學より得たる見解なり。されど後之を基督敎に試みて考察するに至り、その哲學の眞理と基督敎上の敎理とは互に相容れず。是に於いてかれは聖書舊約全書を攻撃せり。然れどもかれは後に、至りてその攻撃が耶蘇基督の人格及び經歷の弱點を打てるのみなることに思ひ至れりと云ふ。

當時基督敎に對する非難は如何なる點にありしかについて考ふるにその大要は次ぎの如き理由によるものとせり。即ち、

- 一、聖書のうちに矛盾せる事實の多きこと。
- 二、社會存立の上に基督敎徒なるものゝ必要を認めざること。
- 三、基督敎理の哲學的にして荒誕無稽なること。
- 四、基督が人道を要求するに又同時に神が之を要求すると云ふこと。
- 五、基督信徒の道德修まらざること。

此れ等の問題が遂に基礎となりて一般の敵意を買ふに至りしものなり。されど以上の件々は果して事實如何なりしか。吾人はむしろ當時の異敎徒の悖

徳なるに引きかへ信者の人格頗る美しかりしことを信せんと欲するものなり。實際名狀す可からざる汚行放逸は當時イリュエーシニアン(Eusebian)に接せし異教徒の方に在りしや疑ひを容れず。あれやこれやの總べての攻撃難は當時テルツリアン(Tertullian)があつて之を一文に綴り以つて天下の異教徒が辯難の材料に供へられたり。

基督教の勝利

異教徒學者がかく迄非難の聲を高め來りし所以は新基督教の勃興を妨止せんとするの底意に由るものにして、かれ等が筆を取るも敢て基督教徒の信念如何を妨害せんとするには非ざるなり。かれ等は未だその信念を破懷せしめんとする程迄に無智なるものにはあらざりしなり。然れどもその異教徒の攻撃とそれに対する基督教徒の防禦とは此の度の如くしかく劇烈を極めたることあらざりき。かゝる攻撃にも係らず基督教側の地歩頗る悔る可からざるものあり、折角くの大計畫も全く失敗に了り、異教徒の内部は瓦解に瓦解を重ねるに至りき。

第三章 第三世紀に於ける基督教

セヴェルスの法律

第二世紀に於ける基督教は異教 *Paganism* の爲めに劇烈なる反抗を加へられしが次ぎに第三世紀に入りては如何と云ふに、世紀の改まると同時に又もや虐殺慘狀の種子は蒔かれたり。

試みに見よ、紀元二〇二年セヴェルス(*Severus*)の法律の布かるゝや羅馬の民にして基督教又は猶太教の信者たることは固く嚴禁せられたり。

然れども宗教上の信念は到底法律を以つて嚴禁すること能はず、基督教の信者又漸く多からんとす。是に於て恐るべき虐殺は今更らの如く繰り返され、セヴェルス位を去つて次ぎのカラカルラ(*Caracalla*)立つに至つて益其の慘狀の度は高められたり。殊にアレキサンドリア(*Alexandria*)の地に於いては教徒を或は炮烙の刑に處し或は肌の皮を剥ぎ、又はにえ湯の内に投げ落して之をしいたぐ等の刑罰ありたり。

此の悲劇の演せられたりし當時エルサレムの地に居たりしアレキサンドリ

クレメンヌ

アンクレンメンヌ(Clemens Alexandrinus)は他の學者同僚と共に、かのグノスチック派(Gnostic)と基督教との間の和解をはからんことに苦心し居たり。而して、グノシスの教義が決して基督教の教義、聖書の精神と氷炭相容れざる如きものに非ざること、を明かにしたり。

三位一體論

三世紀に入りて吾人が始めて新たに遭遇する現象にして最も注意すべきものは三位一體(Trinity)に關する紛々たる議論の發端なり。例へばセオドツス(Theodotus)は當時基督を以つて精靈の影響によりて降誕せしものなりとなせども又之には異説あり。或は基督は天帝即ち天の父と名は異なれども實は同一なりと云ふ説あり。又ベリルス(Beryllus)の如きは神の子即ち基督耶蘇は天父の靈肉をつけて此の世に現はれたる化身に外ならずと云へり。

三位一體説に關してその道の造詣最も深きサベルリウス(Sabellius)は紀元二五七年次ぎの如き説をなせり。即ち神即ち天帝の本體は三位の區別ある姿を有せり而して此の三位は自ら一體をなす。蓋しその三位一體なるものは太陽の三性質即ち物質と形と及び放射の三性によりて始めて説かるべき神秘的の

ものなりと云へり。

サベルリウスの此の説はやがてアレキサンドリアのディオニシアヌス(Dionysius)によつて駁せられたり。蓋しディオニシアヌスの説は神の子基督と天帝とを以つて同一體のものに見なすは非なりとせるものなり。尙サベルリウスの説は紀元二六三年羅馬の僧正達ちによりてもいたく攻撃せられたることありき。されどアンチオク(Antioch)の僧正サモサタ(Samosata)などはサベルリウス派の説を持ち、基督の降誕を以て飽く迄神の力を實現し振舞はしむ可く此の世に降されしものなりと説き此の見解は頗る有力なるものなりとせられたり。且つそれが爲めサモサタ(Samosata)の名は基督教史上に傳へらるゝに至れり。

次に基督教の氣運に就いて觀るにヘリオガバルス(Heliogabalus)帝の代に至り帝は素と太陽崇拜者なるが、基督教の清廉高尚なるを認め種々教會に保護を與へたれば基督教爲めに無事平穩なることを得たり。羅馬の國立教會堂には耶蘇基督の立像がアポロニウス(Apollonius)及びオルフェウス(Orpheus)の立像と共に並列せられその福音の言葉としては、

ヘリ、オガバル
ス帝

Gospel maxim:—

“As ye would that men should do to you, do you to them”

即ち「汝の欲するところ之を人に施せ」との金言が教會の壁に或は紀念碑に刻み付けられたり。次に立ちたるアレキサンダー・セヴェルス (Alexander Severus) の時の模様は如何と云ふに、帝に就いて傳へられたる逸話によりて考ふに、嘗て一日羅馬の基督信者が會堂内の一教職にとて、一人の料理人を選定せしにその料理人には犯せる罪ありとて議論一時おさまらざりし折しも帝の信念、信仰は忽ち舉げてかれを教職につかじめたることありしと云ふ。以つて帝の信仰の一斑を窺ふに足るべし。

三世紀に於いて基督教史上最も有名なる學者は誰れとなすかと云ふに、先づオリゼン (Origen) (紀元二五三年死去) に指を屈せざるべからず。オリゼンは父レオニダス (Leonidas) クレメンヌ (Clement) 及び哲學者のアンモニウス、サツカス (Ammonius Saccas) などに就いて大いに學ぶところありたり。かれが學殖は主として此の三氏に出發點を有せり。加ふるに彼れが晩年に於ける堅忍不拔の勉強は遂にかれを

オリゼン

して『金剛石』 (Adamantine) との稱號を一般のものよりかち得せしむるに至れり。オリゼンは素とアレキサンドリアの學派に屬し弱年の身を以て紀元二〇三年父クレメンヌのあとを襲ひたるものなり。オリゼンは當時の哲學者として、又宗教家として、造詣深く、その深き智しきと厚き同情とは能くグノステック派の教徒及び古來異端に沈醉せるの徒を救助改宗せしむることを得たり。

デメトリウス

アレキサンドリアの僧正デメトリウス (Demetrius) は猜忌心よりオリゼンをいなく惡みオリゼンが會堂長 (Presbyter) に任せられんとせし時の如きも牧師監に説きすゝめてその教職を奪はしむ可きことを云へり。しかのみならず、デメトリウスはオリゼンをパレスチン (Palestine) の地に退かしめ且つ埃及の僧正連に勧誘してオリゼンは異端なり、速かに破門すべきものなりとの事を以てせり。されど基督教會は斯くオリゼンを助けて、全羅馬はデメトリウスに反對したり。さてオリゼンの教理は如何なるものなるかと云ふに根本に於いてかれは人間の精靈を以つて先天的に存在するものなりとし、而して、主耶穌の精靈は既に神の靈光のうちに存せしものなりとなし、且つ吾人の肉體は本來に於いて氣化

するものなりと説けり。

オリゼンに就いて尙史上注意すべきことあり。オリゼンは基督教布及の爲め素とヘブリエウ語(Hebrew)を以つて書かれたる聖書をば希臘人にもわからせる爲め希臘語(Greek)に翻譯せしなり。されど彼れの信念厚き骨折りは反つて彼れの爲め不人望を招くの種となりたりき。三世紀の初め基督教徒虐殺の行はれたりし當時はオリゼン(Oriens)はセザレア(Caesarea)に在りしがデシウス(Deius)の信徒攻撃の時には遂にかれオリゼンも亦其の災にかゝり囚はれて獄に投せられその上散々に苦しめられたりき。されどかれは獄にありても基督を懐ふの念はつゆ減せず。會堂にあてて獎勵の手紙をさへ送り居たりと云ふ。獄中の苦しみは遂にかれが死を早めて紀元二五四年と云ふに逝きぬ。

顧みればオリゼンが宗教上の貢獻は頗る多く、聖書の註釋評釋説教その他宗教上の論文などかれの生涯は實に多忙なるものなりき。而して始終かれが説くところの教理は一つにアレキサンドリアン派(Alexandrian School)の比喩的方法によりて説かれ居たり。

グレゴリ、サマツルガス

デシアン帝の虐殺

オリゼンの説教によりて改宗せしものあまたある内グレゴリ、サマツルガス(Gregory Thaumaturgus)なる僧正あり。かれはオリゼンを褒めたゞへ教會の有りがたきを説き且つ教義をひろむるにつとめ居たりき。されどかれがつとめて奇蹟を説かんとしたるは一つには自己の名譽心に驅られてなせしものゝ如し。

オリゼンの現はれたりし當時羅馬及び阿非利加の諸地方に燃ゆるが如き宗教上の一大問題は起れり。即ち異教徒の浸禮は眞の價值を附すべきものなりや否やの問題即ちこれなり。カーセージ(Carthage)に於ける學派はかゝる浸禮を以つて何等の價值なしと決定し了りたるにも係らず羅馬に於いては甲賛乙駁諸説紛々たるもありたり。此の問題は次ぎの四世紀に至り、アールヌ(Arles)の會議に於いて漸く結着を見るを得たり。即ち曰く三位一體(Trinity)の名に於いて水を以れて洗禮するは眞の價值あるものなりとすとのこと即ちこれなり。

一方にかく洗禮に關する研究あるに反し、他方に於いては又もや基督教徒虐待の風潮は現れたり。かのデシウス(Deius)の如き羅馬在來の神々を信仰して前代の基督教擁護の執政に對し之をにくむこと甚しく、一時やはらめられ居た

ザレリアン
帝の暴虐

りし感情の大勢をば再び刺戟して百方基督教撲滅の企劃を案出し、勅令は布かれたり。而して總べての牧民の士は羅馬の神々に對し不敬不信なるものをば一々搜索すべく命せられたり。蓋し國神を信せざるの徒は即ち耶穌を信仰せるの徒なりと直ちに判斷せられたるもの、如し。やがてかれらの運命は災を蒙むる運命に導かるものなり。かくの如き状態なりしかば僧正の位置の如きは其の當路にあたれること、て攻撃の矢を先づ第一に受くること、なれり。

僧正の攻撃虐待は三世紀の中葉ガルルス(Gallus)の時にまで及びたり。されどガルルスの死と共に一時其の悲境は脱せられたり。其後數年を出でざるにザレリアン帝は立ちぬ。帝は迷心に深きかのマクリアヌス(Macrianus)と云へる政治家に鼓吹せられ、其の影響の結果は遂に又基督教虐待の現象として現るに至れり。

第一紀元二五七年、教會の集會はすべて嚴禁せられ、牧師達も流刑に處せられたり。

第二紀元二五八年、僧正(Bishop)牧師監(Presbyter)の如き教職にあるものは容赦

ガリエヌス帝
と基督教の隆興

なく一々死刑に宣告せられ、富者貴族の信徒は罰金に處せられ、尤もそのうち特に目され居たるものは僧正などと同様に死を宣告せられたり。

かくて既に羅馬の大僧正ステーション(Stephen)の如きは宣告せられ死につき、次ぎのシクスス(Sixus)の如きも既に四名の僧侶と共に死地に致されたり。

單に羅馬に於いてのみならず、阿非利加方面、カーセイジ(Carthage)に於いてもかの有名なるシプリアン(Cyprian)の斷頭臺にかけられたる慘狀を見るに至りたり。

時移り世かはるにつれて吾人は基督教に對する世態の亦一變するに至りたるを見るなり。暴虐なるザレリアン帝は其の後端なくも波斯人の毒手にかゝりて殞れたり。是に於いてその子ガリエヌス(Gallienus)そのあとを襲ふて位につきぬ。ガリエヌスは先帝と異なり國神に對しては極めて冷淡なり。紀元二五九年ガリエヌスの發布せし勅令によりて見るも帝は國土の平和安寧秩序を全からしめんが爲めには基督教徒を助くるに在り、教徒の活動は即ち國の平和を保つ道なりとの見解を有せしものに似たり。されば基督教徒は會堂を

充分に利用することを得て、無事之が發展の道を講ずることを得たり。かくて基督教隆興、基督教萬歳の氣運に向へり。オーレリアン(Orelian)又此の大勢を助けやがて三世紀の後半は教會、會堂、教職すべて平和のうちに神の教を普及し神の靈光をいと明らかに浴することを得たり。

三世紀後半の始めに於いて現れたる主なる宗教上の出來事は僧正シブリアン(Cyprian)及びノーヴァツス(Novatus)との間に生じたる牧師就職に關する争ひなり。此の争ひは宗教外部に原因を有するに非ずして、その歸因は基督教内部のうちまもめなり。此の就職上の争ひによりて、西部の基督教は獨立して猶太基督教より分離せんとし、而して羅馬はその西部基督教の中心點(Metropolitan See)とはなれり。かくて羅馬に於いては使徒セント、ピーターの傳説など深く信仰せられ、シブリアン(Cyprian)の人格によりて、その信念は一層深めらるゝに至れり。シブリアンが宗教史上の貢獻は以上の外八十一通に達せる經文十四の論文などあり。何れも皆實際を主として異教、洗禮、ノヴァシアンとの論争のことなどを説けるものなり。

ノヴァシアン

ノヴァシアン(Novatian)は前に述べたるノーヴァツス(Novatus)と同時代のものなれども混同すべからず。ノヴァシアンは羅馬に在りて、次ぎの如き説を主張せし人なり。曰く、神に對して犯せる罪は永久此の世に在りて消ゆ能はざるものなりと。ノヴァシアンはさきのノーヴァツスに教唆せられ伊太利の僧正共をして自分を法王反對者(Anti-pope)の位置に選ばしめたり。之に對してシブリアン(Cyprian)はコルネリウス(Cornelius)に助力を與へ他の有力なる僧正亦之に應援し而してノヴァシアンは獨り破門さるゝの身となりぬ。

ボルフィリ

紀元二七〇年フェニシア(Phoenicia)のボルフィリ(Porphiry)は基督教に對して反駁書を弑せり。かれの説くところはプラトーンの哲理と多神教の教理とを混融したる説なり、されどボルフィリは國神を信じ國教を我が宗教となせり。尙かれはセント、ピーターの教へ及びセント、ボールの教理との間に存する教義の上の相違を誇大視しては強ひて其の非を求め、且つダニエル(Daniel)の書に現れたる豫言的思想を甚しく攻撃せんことにつとめたり。かれは又『神諭の哲學』なる論文を草して神諭に對する返應を説き以つて基督教豫言者が唯一の武

マニ教の勃興

器にそなへしめたり。

されど當時最も著大なりし宗教上の勃興はマニ教(Mandaeism)の現はれたること即ちこれなり。マニ教は基督教と及び波斯印度地方の宗教とを混淆せし宗教にして、波斯人マニ(Mani)一名マチス(Mansur)に依りて開かれたるものなり。マニは紀元二百四十年に生れ長ずるに及んで此の一大宗教を開き、其目的とするところは基督教及びゾロアスター(Zoroaster)の教理を以つてかの佛陀の聞きし佛教のそれと相調和せしめんとするに在りたり。かれはマニ教の教理に於いて光りの國と暗黒の國とを兩方相對せしめ、光りの國を以つてイオン(Ion)なる女神の支配に屬するものとなし人類の最初は即ち此の女神の生み出せしものなりとのことを云へり。尙この教理の説くところによれば、その最初の人間は水金火木土の五行と共に暗みの國に對して戦ふ可く遣はされたるもの也、且つ生命ある精神によりて常に活動を助けられて奮闘す。されどこの精靈の一部は既に暗みの國の影響を受けて幾多曇れるものなきに非ず。その未だ曇りを帯びず最も清く最も美しき部分は即ち日月星辰に於いて顯はれたり。次

ぎに清きものは即ち此の世界なり。此の世界に降誕せし神の子基督と及びその聖靈(Holy Spirit)とは即ち天帝(Supreme)の發現せしものに外ならずと説けるものなり。

マニ教

かくの如き教理を鼓吹せるマニ(Mani)自身は如何と云ふにかれは自ら以つて『精靈』(Paracletos = the Holy Ghost)なりと號し聖書に見えたる使徒の行ひを銜へり。

マニの歴史はその教理の不明瞭なるが如く不明の點多しと雖も、かれは紀元二七〇年マギ(Magi)王の爲めに朝廷より放逐せられ諸地方に布教の旅をなせしものゝ如し。トルキスタン(Turkestan)印度は固より支那にまでも到り、紀元二七二年ホルミスマス(Hormisdas)即位の當時漸く波斯に歸國して圖らずも少なからぬ歓迎を受けたり。然れども平穩の時期は久しからず、ヴァラナス(Varnes)王の位に登るや王はマギ(Magi)の先例にならひ、マニを虐げんことにつとめたり。

マニは乃ち異端を以て目せられ紀元二七七年生きたがら肌の皮を剝かれ且つその皮は再び物を詰めて、擬人人形の象につくられてジョンデシヤプール(Djondishapur)の都門に高く曝されたり。マニの生涯はかくの如き悲惨なる最後

を以て終りぬ。その門弟又頗る多くオーディートル(Audior)派とパーフェクト(Perfect)派との二派にわかれ居たり。かくてマニ教は埃及方面に向つてその發展の進路を求め居たりき。

紀元二九六年ディオクレシアン(Diocletian)は埃及に於けるマニ教の信徒に對し殘忍なる法令を布きたり。當時埃及の宗徒ヒエラサイト(Hierasite)などは皆マニの教理を以つて猶太教のそれよりも更に道理なき教へなりと呼べり。蓋しマニ教の教理に於いては「酒」と「肉」と「婚姻」との三者を以つて全然嚴禁したればなり。又以つて當時の思潮宗教思想が那邊に在りしかを察するに足らんか。

第四章 第四世紀に於ける基督教

四世紀に入りて現はれたるシーザーガレリウス(Cesar Galerius)の虐殺は基督教史上特に注意すべきものゝ一つなり。當時羅馬の帝はディオクレシアン(Diocletian)帝なりしを以つて普通は此のデオクレシアン帝の虐殺と云ふ名にて知られたり。

デオクレシアン帝の虐殺

紀元三〇三年第一回の勅令は發布せられたり。此れによりて基督教徒は市民としての選舉投票權を剝奪せられ、且つ數多の教會堂は破壊せられ、聖書さへ破棄せらるゝに至れり。ニコメデア(Nicomedia)の宮殿の災の如きも二度ながら基督教徒の仕わざなるが如くに曲解せられて遂には更らに過かに殘忍なる勅令は發布せられたり。最初僧侶を殘らず囚へて獄に繋ぎ、次いで信徒に及び基督教徒の獄をつくりなして酷薄に酷薄を以つてし末は之を死刑に致す。その苦しめかた大體かくの如し。その虐殺は到る處暴逆を以て充たされ到底筆紙の盡すべきところにあらざるなり。唯ゴール(Gaul)の地コンスタンシウス(Constantinus)の配下のみその例外なりき。デオクレシアン(Diocletian)の共謀者マキシミアン(Maximian)及びシーザーマキシミン(Cesar Maximin)は基督教をにくむことガレリウスの時の如く、烈しく政治上の變動の内には常にその激情現はれ居たり。ニコメデア(Nicomedia)の僧正その他多くの僧正僧侶が或は焼かれ或はくすべられ或は腕脚の抜き取られたるなど豈偶然の現象ならんや。

コンスタンチン帝の基督教

四世紀の初にかくの如き状態なりし基督教はガレリウスが重態の病ひに冒

され、その病勢頗る危篤に傾きし際突然ガレリウスは勅令を發布して信徒の集合を寛容し、且つ我が身の爲めに祈禱を擧げしめたりと云ふ珍談あり。時に紀元三一一年なりき。

マキシムス帝 (Maximus) 自殺の後をうけてコンスタンチン帝 (Constantine) 立つ。時に紀元三二四年なり。帝は基督教徒に同情を寄せ即位の當時より會堂を整理せしめ、壞れたるを再建し、嘗つて遠流されし僧侶を招還し大いに慰撫するところありたり。帝に就いて傳説の語るところに依るに、初め帝が基督教に深く歸依するに至りしは「此の勝利者に依りて」との銘を標榜して天の一方に現はれたる妖怪に感じたるに依るなりと。されどこは唯の傳説たるに過ぎず。事實は、帝の明敏なる頭腦が基督教の眞理を悟り得たるによると、又ホシウス (Hosius) の影響とに依るものなるが如し。されどかれの宗教は未だ其の妻、フォースタ (Fausta) 及び其子のクリスプス (Crispus) の殺戮を防止し得るまでには至らざりぬ。

ドナツス派と
其の分裂

コンスタンチン帝 (Constantine) 後四世紀の前半に於いて見るべきものはドナツ

ト派 (Donat) 内部の分裂なりとす。こは宗教的生活上の問題より起りて僧侶の修養のことに及び末は羅馬の國家と基督教との關係と云ふ重大なる問題となりしものなり。宗教の爲めに死に就く精神は當時殺伐の時代には狂氣 (Monomania) に外ならずと見られ、多くの基督信者が進んで死に就くは即ち過去のあらゆる罪惡を償ひ得る方法なるが如く思考し居たりたり。されば殉死者の遺骨が神聖視せられ、其の死せし土地が神々しく感せられ居たりたる如き故ありと云ふ可きなり。

ヌミヂア (Numidia) の僧正ドナツス (Donatus) は紀元三一一年北部阿非利加カルセーシ (CARTHAGE) の地に現はれ、シシリア (Sicily) が選ばれて僧正たるに關して固く抗議を申込めり。蓋しシシリアンは虐殺の當時聖書をあたらず否認辯難せしフェリックス (Felix) によりて清められたる如き人物なりと云ふ理由によるなり。これが端なくも北部阿非利加全教會の論題となり一方ならぬ争闘を引き起すに至りぬ。佛蘭西アーレス (Arles) の教會の如きはドナツス派の仕うちをいなく攻撃したりしもドナツスは又他方に於いて熱誠なる助力を有したりき。

コンスタンチン帝の如きもドナツスに何等の心を寄せざるのみか大いにその派を難せしも然れどもかれを虐殺することは出来ざりき。然らばドナツス派に應援を與へしものは誰れとかなす。曰はく、ジュリアン(Julian)その人なり。ジュリアンはは彼れ等を庇護すべく多大の力を振ひ全阿非利加の教會堂をかれに與へたり。爲めにドナツス派のものは二十餘年の久しき間無事平穩を保つを得てその間に會堂を再建し、又社會の改造につとめ、偉大なる傳道教會組織を建設し、かくてニセア(Nicea)の宗教は彼れ等自ら代表者たるの概ありき。

ドナツスの死後派は分れて極端派と穩健派の二派にわかれしもいつしか共に衆望を失ひ果て遂に見るかげもなくなりたり。

ドナツスに次いで基督教史上に現れたるはアリウス(Arius)なり。アリウスはアレキサンドリアの僧正にして、而かも同地の教會よりいたく非難を蒙りし人なり。此れが爲めアレキサンドリアには宗教上の争ひを生じ爲めに紀元三二五年コンスタンチン帝(Constantine)を煩はしニセア(Nicea)の教會會議を開き三百八十名の僧正を招集して、帝親らその主宰の椅子を占めたり。決議の結果ア

アリウス

リウス(Arius)は罪せられ其の同僚僧正は流刑に處せられたり。されど紀元三三〇年帝はその妹コンスタンシア(Constantina)のすゝむるところによりて、アリウス(Arius)を招還し之に教職を與へんとせり。之に反對せしアサナシウス(Atanasius)は反つてゴール(Gaul)の地に流さるゝに至れり、アリウス勝ち誇りてコンスタンチノーブル(Constantinople)に入らんとせし頃毒手にかゝりて突然瘞れたり。かれは歿したり。されど、非難の聲はやまざりき。

紀元三三七年コンスタンチン帝(Constantine)死す。而して宗教上の争ひは尙依然として繼續せり。東羅馬のヴァレンス帝(Valens)はアリウス派の影響をうけて、いたく正教派のもの及び半アリウス派に屬するものなどを虐殺せり。かくて三百七八十年代の頃までアリウス派の勢力は頗るめでたかりしがその後基督教文化の中心點に於ては漸次衰運に向へり。されど西方諸部族の新たに改宗せしもの、間に其の後久しくアリウス派は傳へられたり。その西方諸部族とは、歐羅巴の史上に有名なるものにして、即ち、

1. ゴツ族(Goths)

基督教と國家

- 二、スエヴィ族(Suevi)
 - 三、ヴァンダル族(Vandals)
 - 四、ブルガチアン族(Burgundians)
- 即ちこれなり。

グアレンス帝が心を基督教に依せられて以來基督教内部は頗るその模様を改むるに至れり。即ち僧侶(Presbyter)の職權は殆んど僧正(Bishop)の之れに接近し來り、且つ民主的性質を有せる基督教の特色は漸次專制的の色を帯ぶるに至れり。蓋しこは國家が宗教上の官能に迄嘴を容るゝに至りしに因れるなり。コンスタンチン帝の如きは國家と宗教との中和をはからんことにつとめ居たり。又ペパシ(Papae)の如き野心勃勃たるものに在りては紀元三六六年に於ける争鬭の如く血を流してまでも勝を得んことにつとめ居りき。かくて基督教の意氣獨り揚りて羅馬帝國爲めに其の膝下に跪くが如き關係となるに至るや身教職に在るの僧正僧侶たちは頻りに俗人化するの傾向を現はさんとするに至れり。而して吾人は茲に僧正が種々の現世の俗社會に於ける高位高官を求

ジュリアンの異教徒庇護

めんとするものあるを見るに至る又偶然ならんや。

基督教徒漸く頭を擡げんとせし當時異教徒も亦漸く宗教的活動を新たにせんとす。即ち先きにドナツス派を助けし有名なるジュリアンは當時王族の嫉みを避けんとてアゼンヌに退き居たりしが、かれは又異教徒猶太人にいたく同情を有せり。猶太人は猶太教の復舊寺院の再建をなすべく勧められしも遂に不可思議なる火災その他奇異の現象の爲めに妨げられたり。蓋しこれ等の妨害は基督教徒の仕わざならんと云へり。いかゞ。

四世紀の末葉に現れたる帝をセオドシウス一世(Theodosius I)なりとす。苛酷なる法律を設けて異教徒を苦しめたるにて有名なる帝なり。

布教上より四世紀を見るに四世紀に於ける布教は歴史上注目すべきものゝ如し。即ち紀元三二〇年グレゴリ(Gregory the Illuminator)は教會をアルメニア(Armenia)に作りチリダナス(Tridates)その他の貴族を改宗せしめたり。又紀元三五〇年にはフルメンシウス(Frumentius)は埃及よりエシオピア(Ethiopia)の首府オーキマス(Auxuma)に福音の傳道をなし、アリアン、ウルフイラス(Arian Uphilas)

四世紀の布教

ウルフイラス

禪宗的風習

はゴス(Goths)の地に入りて翻譯せし聖書を傳へ、マルチン(Martin)の如きは旅行家の僧正として名高かきまでに各地に布教傳道に従へり。

四世紀の基督教は一方にかくの如く布教の盛なりし際なるにも係らず他方に於いては仙人的獨居の思想盛に行はれ居たり。仙人又は尼女が強ひて己れに打ち克ちて精神的生活をなすの風潮なり。こは始め阿非利加に起りたるものにして、仙人ポール(二二八年生、三四一死)が寂漠たる砂原の中に物語りの生活を送りたるに歸因せるものなり。尙ナイル(Nile)の島上に之を行ひたる彼パチヨミウス(Pachomius)あり。此の島には尙數千の世捨人集まり來たり。尼女などもまた多し。この様宛かも東洋に於ける禪坊主の座禪をくむものに似たるものなるべし。

かくの如き座禪的風習はやがて引いては僧正僧侶の間に化石的習慣を成さしむるに至れり。即ち斷食の風。死の祈りなど即ちこれなり。されどかゝる習癖を得るを可とするが如きことはアルメニアのアエリウス(Aerius)などによりていたく攻撃せられ居たり。

法王の權勢

第五章 第五世紀に於ける基督教

五世紀に入りて初めの七十五ケ年間は全くゴス人(Goths)ヴァンダル人(Vandals)ハン人(Huns)其他オストロゴス人(Ostrogoths)などの帝國に侵入するもの絶へざりき。而して此の間に於ける羅馬の執政は帝王の手に在りと云はんよりはむしろ法王の手に在りたり。インノセント王の時と云ひ、レオ大帝の時と云ひ事情は凡べて法皇の執權勢力伸長に好都合なりしものに似たり。公民權は異教者にうつり、黒衣の手に歸し、官權甚だ揚がらざる時に際し、法王獨立の權勢は飛ぶ鳥も落つるが如き有様なりき。

かくの如く五世紀の基督教は前代と異なり大いに政治的色を帶ぶるに至りしが尙此の時代には文學上の方面に於いても頗る見るべきものあり。

- 一、オロシウス(Orosius)の史論
- 二、プロスパー(Prosper)の對オーガスチン論
- 三、ヴィジリウス(Vigilius)の對話

キリストリアン

四、セオドール (Theodore) のオリゼン反駁論
五、ヘーシル (Basil) の聖書論

の如きその主なるものなり。さだれ特に此の時代に於いて注意すべきものは、基督の人格及び性質に關する當時の世論なりとす。シリア人キストリウス (Nestorius) の如き基督の人格について一つの區劃を立て神 (Divinity) と人道 (Humanity) との二者の結合せしものなりとせり。キストリウス派のもの此の説を攻究せるに際しシリル (Cyril) などの一派は埃及の僧正と共に之に反對を唱へたり。やがてキストリウスの説と教理とは波斯地方に擴がり、フェロゼス王 (Pherozes) の如きは遂に正敎派の僧侶を放逐するに至りたり。更らにキストリアン教理はアッシリア (Assyria) シリア (Syria) 埃及及びアラビア (Arabia) を通じてひろがれり。信徒は皆シリ語を以てその禮拜を述べ油を以てて浸禮を行ひ以つてキストリウスを崇がめしめたり。

キストリア派の活動ありて耶蘇基督の性質について論争あり。爲めに五世紀の中葉ユーチケス (Eutyches) とフレーヴィアン (Flavian) とは互に過激なる辯

難を試み遂にはセオドシウ帝 (Theodosius) エンヘスス (Ephesus) の地に會議を開くに至れり。盜賊會議 (Robber Council) の名を以つて基督敎史上に知られたる會議は即ちこれなり。この會議によりてフレーヴィアン (Flavian) はいたく攻撃を蒙りたり。然れどもレオ法王 (Pope Leo) のフレグイアンに對する助言は動かす可からざる眞理の確定として認められ基督の性質については結局次ぎの如きことと決せられたり。即ち基督の人格は One Person なり。されど其の性質は分たんとするも分つ可からず、變せんとするも變ず可からず、混同せんとするも混す可からざる二個の性質の存するものありとのこと即ちこれなり。つまり神及び神の子としての兩性質の全く二重に且つその程よく合して以つてその人格を形成せるものとなせるなり。

紀元四八二年宗敎的平和を標榜してコンスタンチノーブル (Constantinople) の教長ヘノチオン (Eunuchion) は現れたり。ピーター、モングス (Peter mongus) 及びピーター、フェロ (Peter Fello) の如きその平和に聲援を與へたるもの多かりしも世俗の人望は寧ろゼサルム (Jerusalem) の新僧正の方に歸せしもの、如し。尙アカ

教長

シアス(Acains)及びフェリックス(Felix II)との兩派の間の破門軌轢のことより羅馬とコンスタンチノープル(Constantinople)に於ける僧正の關係のことなど此の五世紀の末葉に於いて種々注目すべき現象あり。今茲にはそのうち羅馬及びコンスタンチノープルに關するものに就いて少しく述ぶべし。

吾人は今茲に羅馬及びコンスタンチノープルの僧正のことを述ぶるに先立ちまづ之に密接の關係を有する教長(Patriarch)の職のことに就いて一言し置かざるべからず。教長は基督教に於いて其の職位はかの大僧正のそれよりも更らに一層上位にあるものなり。大僧正の方は當時羅馬、アンチオーク(Antioch)、ゼルサレム(Jerusalem)、アレキサンドリア(Alexandria)及びエフェズス(Ephesus)及びコリンス(Corinth)等の地に置かれたるものなるが、これ等の大僧正は更らに之を主なる四個の教長の下に統轄することとなりしものゝ如し。即ち、

一、羅馬(Rome)

二、アレキサンドリア(Alexandria)

三、アンチオーク(Antioch)

四、コンスタンチノープル(Constantinople)

此の分けかたは是れ羅馬帝國の大帝コンスタンチン(Constantine)が政治上の區劃に擬して四分せしに依るものにして他意あるに非ざるなり。而して此等教長の職にあるものは彼大僧正及び僧正の任免黜陟を掌どり、又全教長所屬の寺院僧侶たちを招き集め以つて寺院教會に關する總べての事項を支配し、時としては國の内外を問はず裁判上の諸事件に迄も其の職權を有し居たり。

僧正及び教長に關する大要は以上の如し、今羅馬の僧正に就いて少しく窺ふに、元來羅馬に於ける多くの教會は其の保守的なる點を以つてその特色となすものゝ如し。既にも屢述べたる如く、羅馬には多くの異端邪教蔓延せんとして而かもそのうちに復舊的の基督教は確固として其の地歩を保てり。殊にゼルサレム(Jerusalem)の没落後最古の教會、使徒時代の模様は全く羅馬の天地に於いて見ることが得たり。其の信念の美しさは今更述べ立てるまでもなければどもポール(Paul)の言をかりて云へば「世界到るところに其の物語りあり」Spoken of throughout the whole world)充分に認められ居たりしものなり。其の教理に熱心な

羅馬の僧正

コンスタンチ
ノーブル

るが爲め且つは又其の教義の潔白なるが爲め弱者を憐み貧者に施しをなすが如き點に於いては世界中羅馬の基督信者の如く恩情あたくはあらざりき。又羅馬に於けるポール(Paul)の殿堂及びこれにピーター(Peter)が滞在の印象は深く羅馬の社會人心を刺激して之を神聖視せしめ古代の使徒を聯想せしむる上に少なからざる効力を有したり。

コンスタンチノーブルは當時新羅馬(New Rome)と呼ばれ居たり。コンスタンチン帝がビザンチウム(Byzantium)の町をスレーヌ(Thrace)の都となせし時帝都の中央集権は一も二もなく基督教の爲めに頗る好望のものなりしが如く教會の活動亦見るべきものありたり。されど帝の退去と共にその様はいつしか變じて宮殿は徒らに隠謀革命の群の巢窟となるに至れり。後世の土耳其人(Turkey)が隠險に隠險を重ねたる計謀をめぐらし腐敗に腐敗を重ねたる振り舞ひをなすが如き皆このコンスタンチン帝(Constantine)後帝室のうちに割據して非行汚行を専らとせしもの其の流れに外ならざるなり。實に四世紀に於けるコンスタンチノーブルは宮殿の騷亂貴族の軋轢を以つてその歴史をうづめたり。而

西部歐羅巴に
於ける基督教
の普及

して此の現象は東部基督教の上に少なからぬ影響を與へ東方の教會爲めに動搖を蒙りたり。西の方羅馬方面に於いて基督教の根據漸く安きにつかんとするに反し東の方コンスタンチノーブルに於いては事態かくの如き現象を呈し居たるは基督教史上特に注意すべきものなりとす。

吾人は羅馬及びコンスタンチノーブルに於いてかくの如き情勢を見る、次に歐洲西北部の方面に於ける基督教は如何にありしか。今左にこれについて少しく述ぶるところあらんとす。

歐洲西部に於ける基督教の普及は前世紀の中葉以來ウルフィラス(Ulfilas)其の他の僧正布教師に依つて頗る顯著なる効果を見るに至れり。而してその布教の根據が確立せられたるは實に此の五世紀の末葉なりとなすべきが如し。今その僧正及び地點を擧ぐればその主なるもの次ぎの如し。

- 僧正ハルラヂウス(Bishop Palladius)……………アイルランド(Ireland)
- 宣教師デヴィッド(David)……………アイルランド(Ireland)
- 宣教師ケドック(Cadoc)……………ウェールズ(Wales)

宣教師シルダス(Gildas) ウエールズ(Wales)
僧正レミジウス(Remigius) ライムス(Rheims)

此れ等布教師の布教の結果は西北諸地方の豪族諸部族を基督教化することを得たり。殊にブルガンデイ(Burgundy)の王族ナルベリック(Chilperic)の如きはよく正教派(Orthodox)に歸依し其の女クロチルダ(Clothilda)妻クロウヴィス(Clovis)の如き基督教諸派のうち何れに依らんかとして流石に研究せしものもありと云ふ。遂にクロウヴィス(Clovis)はフランク(Frank)の兵士三千のもの共とともに僧正レミジウス(Remigius)によりてライムスの地にて洗禮を受けたる信者となりたり。時に紀元四九六年なり。當時基督教國に於いて正教派(Orthodox)の主宰者たりしものは此のクロウヴィス(Clovis)その人を除いて外にあらざりしは殊に注意すべき現象なりしと云ふべし。實にクロウヴィスは教會の爲め寺院の爲めには没す可からざる貢献をなしたり而して其のかれが宗教上に關する政策は常にレミジウス(Remigius)の顧問によつて方針を立てられたり。レミジウスは既に七十二年前より此の地にありて布教に就事し彼れがその教職に就き

ジャスチニアン帝の教會擴張

たるはその二十二歳の時なりき。かくてレミジウスは第一回のフランクの宗教會議をオーリーランス(Orleans)の地に召集したり。時に紀元五一一年にしてかれが死は宛かもこの年なりき。

第六章 第六世紀に於ける基督教

六世紀に於ける基督教の歴史上其の最も著明にして且つ最も偉大なる名の聞へたるは次に掲ぐる二大帝王なりとす

- 一 ジャスチニアン帝(Emperor Justinian 527—565)
- 二 グレゴリ(一世)法王(Pope Gregory I, 590—604)

即ちこれなり。

ジャスチニアン帝の將帥ベリサリウス(Belisarius)及びナルセス(Narses)によりてゴス王国(Gothic Kingdom)は征服せられ、その後ナルセスは大僧正(Eusebius)として伊太利を統一するに至れり。然れども其の後伊太利の北部は紀元五六八年アルピオン(Albion)によりて勝ち取られ、パヴィア(Pavia)の地にロンバルド王国

(Lombard Kingdom)を建つるに至れり。其の後殆んど二百年間は、大僧正(Exarch)と及び此のロンバルド王とが代々伊太利の地を二分して之を支配し居たり。伊太利の當時の形勢かくの如き際、シヤスチニアン帝(Justinian)はカルセドンの宗教會議(Council of Chalcedon)に君臨して、盛に基督教の活動を促し居たり。又實際その活動には頗る見るべきものありたり。かれは先づセント、ソフィア(St. Sophia)の教會堂を初め、大小二十五の會堂をかれの都コンスタンチノブルに建立し、極力ネオ、プラトーン派(Neo-Platonists)のものをアゼンヌの町(Athens)より放逐し、勉めて異端邪教徒を社會の下層に置きたり。かくの如くして尙基督教の教理と教義には勅令によりて明かに確かめられたり。

シヤスチニアン帝は宗教上殆んど神の如き威信を有し、其の新たに發布せられたるかれが詔勅の如きは、よく僧正と牧師との關係を調定し、僧侶一般の行爲についても又之を規定して、且つその上就職の形式並びに方法に至るまで悉く宗教上の大體は之を制定し了へたり。帝は又三世紀以來屢々あらはれたるオリゼン派(Origenism)の非難を以つて基督教の教國一般の上に之を強ひ、而して紀元

救世主の性質

五三七年、ツイジリウス法王(Pope Vigilius)をして帝の隸屬者たらしめたり。然れども法王と帝との間柄は其の後常に面白からず。かれがコンスタンチノブルに於ける七ヶ年の滞在の間も、宗教會議の模様をいたく難じて多大の屈辱を蒙るに至りぬ。紀元五五四年遂にかれは帝の幕下に在ることを屑とせず退いて、自己の教職にのみ據ることとはなしぬ。

次に前世紀に於いて現れたるかの基督の性質について先づその神秘的なる點に就いての議論いかんと云ふに、こは此の六世紀に於いても再び又現はれたり。ハリカーナス(Halicarnassus)のジュリアン(Julian)の如きは救世主(The Saviour)基督の肉體を以つて腐敗す可からざる(incorruptible)もの即ち詳言すれば基督の死、苦、願の三者は決して吾れわれのそれの如く到達し得べき人間の性質より發現せるものに非ざるなりとの見解を有せり。ジュリアンの此の見解は獨斷なりとしてアレキサンドリア(Alexandria)の學者などよりはいたく否認せられたり。然れども此の説は高齡なる帝が敬意を充分に引くことを得たり。尙アルメニアの教會(Armenian Church)の如きも紀元五九六年牧師ソヴァイン(Thovin)の時この

宗教の墮落

説を容れて爾來之を襲用し來たり。
 次ぎに觀察の眼を道德上並びに宗教上の立ち場に置いて此の六世紀と古代の使徒時代(Apostolic age)とを比較對照するに頗るその間著しき差異の存するものあるを見るべし。西方基督教國に於いては其の教理が一見甚だ標準を下げてその蠻的部落に適合せるものに似たり。時としては最も汚れたる罪惡と雖も金錢を以て之を償ひ消すことを得べく、又牧師を仲裁者の位置に立て、之が許しを神に願ふことをも得べしとなす。而して僧正大僧正の集會中心點殊にアレキサンドリア(Alexandria)の地に於いては一新教理の行はるゝに至るに先立ち必ずまづ多少の血を見ざるものあらざるはなし。蓋しこれその宗教上の運命なるが如し。法王ヴィジリウス(Vigilius)の教理のそれの如く始めは多大の攻撃と屈辱を蒙りたるも其の屈辱を凌ぎ得て然る後始めてその教義は世に行はるゝに至る蓋し自然の數なるが如し。さればかの牧師僧侶の名譽尊嚴が往々にして思慮もなき俗界の人々の爲めに屢々毀損され又不法なる法律の爲めに汚さるゝが如きことありともこは寧ろその命數なりとして見るべきものな

教會と國家との關係

らん。
 嘗つて紀元四二〇年ホノリウス(Honorius)が教職に在るもの、婚姻を嚴禁したるが如き、又ジャステニアン(Justinian)がかゝるもの、間に生れたる子供を以つて法律上正當なる子供と認めずとなしたるが如きこれなり。かくの如くして自然の趨勢は反つて隱密の間に淫猥合姦の風をかもして面目なき一種の婚姻の事實を見るに至れり。今や僧侶の精神的威信は全く地を拂ひ法王ヴィジリウスは其の名譽を失ひぬ。
 かくの如き情勢を茲に見ると雖も中世紀に於ける教會の組織は全くこの六世紀に於いて其の基礎を固め得たるものと云ふことを得べし。牧師はその軍隊職務によりて財産の保安につとめ、僧正は專制的權能を以つて一般僧侶の上に臨む。尙僧正は道德的制裁を一般の上に加ふことを得べく或は執政官たり、時としては又裁判官たり。而かも尙且つ教會と國民との間に種々の調和と特權の規定を定め得べし。かのジャステニアン(Justinian)の法律の如きは寺院生活の尊重すべきを示して以つて既婚者小兒、奴隸をして之に近づかしめんこ

とを期待せしものゝ如し。殊に注意すべきは西部基督教國の組織が全然ヌルシア(Nursia)のベネチクト(Benedict)の盡力によりて改革されしこともこの六世紀に於いてありし事實なること即ちこれなり。

西部基督教國に有名なる此のベネチクトは初めスピアコ(Spiceo)に身を起し紀元五二九年カシノ山(Monte Cassino)にうつれり。ベネチクトは茲に其の有名なる『日課の規則』を帥しモナスト派(Monachism)の將來の組織をまですべて茲に計企せり。かくてかれが一ケ年間修養の後ベネチクト派の僧侶は來たつてこゝに慈善の爲めに貧者の爲めに、又従順ならん爲めにとて心より誓ひて祈りとをさゞげその祈禱の時間、義務の時間、食事の方法などすべて細かくわかれたる實に整然たり。而して日は手仕事に關係ある業務の如きは七時間のうちに巧みに割り合はせられたり。かくの如く總べて日常のことを規則にあはし行ひ行くことを規定としたる結果此の派のものには當時の科學的農業學者 (Scientific agriculturists) として名高くなりしもの少なしとせず。

ベネチクトの規則に加ふるに更らにカシオドルス(Cassiodorus)の勉學の規則

ベネチクトの
モナスト派
改革

の加へられたるあり、爲めに、ベネチクトの寺院堂宇は總べてこの爲め學問の中心否學者落魄者に向つての好個の遮難所たるが如き姿とはなれり。而して此のベネチクト派の學者中には吾人の見るところを以つてするも上代文學の珍らしき斷片をそのまゝ引用せられたるが如きものあり、且つその條の見えたるなど實にゆかしきものあり。

次に歐洲西北端方面に於いて之を見るに、アイルランド(Ireland)の宣教師コロンバ(Columba)の事業は又之と頗る類似せるものあるが如し。モイ(Moy)に於けるかれが邸宅の如きは爾來學問の大中心點となり、後コロンバよりうつりてコロンバヌス(Columbanus)となり更らに繼承してバシゴル(Bangor)の僧侶某となれり。後セオドール二世(Theodore II)之を放逐して瑞西伊太利に追ひ其の後教會はボビオ(Hobio)の地にうつさるゝに至れり。後バンゴルの後繼者ガム(Gall)は瑞西に在りてコロンバヌス(Columbanus)の事業を完成す。而してコロンバヌスの『規則』は先のコロンバ(Columba)のものとは大いに違ひ頗る煩繁にして且つ冷酷なるところ多く、稍もすれば之が違犯者を罰せんとするものを生せしめん

コロンバとコ
ロンバヌス

とするものゝ如し。されど其の仕組み精巧を極め其の確立日を追ふて通俗一般に適し易くされればベネチクト組織のそれに相互同化し行かんとしつゝあるものゝ如し。

以上はすべてジャスチニアン帝(Emperor Justinian)の御代に關係するものなり。次ぎには六世紀の後半の主要部を支配せるグレゴリー一世(Gregory I)の御代に關して述ぶるところあらんとす。

グレゴリー一世(Gregory I)は最初シシリア(Sicily)の寺院の建設者として又羅馬に於けるセント・アンドリュウ(Saint Andrew)家の頭として、其の名知られたり。紀元五七八年グレゴリはコンスタンチノールブル(Constantinople)に法王の使節として差し遣はされたり。同地に於いてグレゴリはオーリゼン(Oriens)派のユーチ、ウス(Eutychius)に對して、基督の蘇生に就いて頗る穩健、確實なる見解を唱導せり。されど紀元五九〇年の頃かれは一方ならぬ攻撃を蒙りたり。グレゴリの主張することこそはその議論の該博にしてその學才の非凡なることを示し且つその言ふところ充分の責任を以つて痛論せり。然れどもかれは神學者と云はん

バスグレゴリ
一世と其の政
治

よりは寧ろ一國の主宰者實地の支配者たりき。而かもかれグレゴリが書き殘こせしものには頗る浩漭なるものあり、そのうち宗教的のもの教訓的のもの亦少なからずと云ふ。

グレゴリー一世はその數多の牧師(Vicars)を任命せんとする場合には羅馬の教會を更らに擴張してゴール(Gaul)スペイン(Spain)及び阿非利加方面の教會をも之に加へ出來得る限り多方面の出席者を求めて、以つて人選を公論に依つて決せんことにつとめ居たり。グレゴリは單に基督敎に對して心を用ひ居たるのみならず、實際かれは六世紀に於ける信者の好模範たるものなりき。尙かれは敎理の爲め敎師の獨身主義を要求して僧侶の離婚に對してジャスチニアン帝がなせし批推をば全く認めざらんとせり。グレゴリは又いたく逝きし人々の屍を齎きまつることをつとめしも後世に成りし奇蹟(Miracles)の如きは之を信せんとせざりき。グレゴリの信仰せしものは、死人を清むるの靈火なり、靈火に對してかれは之を神聖なるものとなせしものゝ如し。蓋しかれが考へにては肉體の死を以つて單なる形態上の變化に過ぎずとの説(Transubstantiation theory)を

豫想し體と魂との如きも其の根本は同一のものにして、靈火は即ち此の體と魂とを清めんとするものなりとの見解なりしなり。基督教に熱心なるグレゴリは異教徒の文學をいたく惡み居たり。又故ありと云ふべし。

グレゴリの經歷に就いて尙云ふべきは、かれがオーガスチン(Augustine)を使ひとして今の英國の地に遣はせしこと即ちこれなり。オーガスチン(Augustine)は歐羅巴大陸を出で、英吉利の地に渡り同地に福音傳道に就事せり。かれが布教は豫想の外非常の成效を博せり。蓋しそは同地ケント(Kent)州のエセルバート王(King Ethelbert)がかの基督教に熱心なるフランク國(Frank)の王チャリバート(Charibert)が娘と婚姻を結びしことに依るものなり。オーガスチン(Augustine)はケント州に到りそのエセルバート王(Ethelbert)に會つて、之を説き遂に王の洗禮を見るに至り其の部下一萬有餘の民も亦悉く信者のうちに加はれり。時に紀元五九七年なり。かの有名なるカンタベリ(Canterbury)の教會は實に此の時にその基礎を固め得たるものにして實にオーガスチンとカンタベリの教會とは忘る可からざる關係を有するものなりと言ふべし。

オーガスチンの使命とアンブロジウスの信者

グレゴリー一世(Gregory I)の使命を帯びて英國の地に遣はされたるものは以上オーガスチン(Augustine)の外に尙二三の使節傳道師あり。曰はくメルリツス(Mellius) ジャスツス(Justus)及びパウリヌス(Paulinus)の三人即ちこれなり。三人は英國エッセックス(Essex)及びノーザムブリアン(Northumbria)に布教することしばしなりしがよく傳道の實を擧げ得たり。されどオーガスチンの成效とは到底同日の論に非ざりき。オーガスチンは初めグレゴリ法王の代表者として黒染めの法衣にて英國に渡り英國の地に於いて舊來の基督教奇風を脱したる信徒の一新社會を組織せんことにつとめたり。それかあらぬか土地の學者僧正などはいたく不平を鳴らせり。蓋し學者僧侶は其の舊習の許容せられざるを不満とするよりも寧ろオーガスチン(Augustine)の仕振りのあまりなるに慊焉たりしを以つてなり。オーガスチンの渡英ありてより在來の僧正はすべて羅馬イースター(Easter)の祭を行はざる可からざること及び一旦洗禮を受けしものをば更らに羅馬風に倣つて之を確認せざる可からざること。その他反叛常ならざるアングロ人(Angles)をば強ひて改宗せしむるにつとめざる可からざること

イースター祭に就いての争

と等の事柄の新たに起りたるを以つてなり。此のうちイースターの祭祀のことに就いて當時端なくも議論を醸し基督教徒派とサクソン(Saxon)の異教徒との間に少なからぬ争闘を演じぬ。羅馬はカンタベリ(Canterbury)よりケルト(Celtic)はヒイ(Hii)及びリンデスファーン(Lindisfarne)より其の人を出しぬ。ホルマン(Cornan)アイデン(Aidan)及びファイナン(Finan)をケルト派中最も有名なる宣教師となす。争闘の原因はオスウィー(Oswy)王の宮殿内部にイースター祭を行ふ可きや否やに就いて起りしものゝ如し。オスウィー王(King Oswy)は英王なるだけに土地在來の群神を信仰せるも女王エンフレダ(Eanfleda)はエセルブルガ(Ethelwerga)の娘にして羅馬の舊習を守りたり。サクソン人と基督教徒の兩者が争闘は蓋しこゝに兆せるものなるが如し。

イースター(Easter)祭に關する争ひに次いで英國の基督教史上に現れたる著しき現象は英國教會の組織(Subsequent organisation of the English Church)のことこれなり。こは初めカンタベリの教長セオドール(Archbishop Theodore)が、ンブターチー(Hephrarchy)僧正領のあまりに諸地方に散在せるを自領のそれと相錯せしめん

英國教會の組織

とせしに依るものなり。セオドールは夙にカンタベリ教職の適任者として、アフリカの僧侶ハドリアン(Hadrian)が法王ヴィタリアン(Vitalian)に推選せしものなり。されど法王が任命の支配は多くノーザンブリア(Northumbria)及びケント(Kent)の諸王に依りて制肘せられたるものあるが如く、ハドリアンは遂に自ら陳言して敢へて法王の威信に依頼することを屑しとせざりき。而して紀元六六七年かれはセオドール(Theodore)に従ひてカンタベリ(Canterbury)に趣きぬ。後四年を経てセオドールはハートフォード(Hartford)の寺院に入り、大いに用ひられて、全英國教會に對する教誡を制定し、僧正領の發展について大いなる計畫を編み又全英國の領域をば十六個處の教會の下に配せんとせしその企圖など悉くかれが立案は取り用ゐられたり。かくてセオドールが基督教史上に於ける事蹟は教會と都市との間に宗教上の制定をなしたること及び僧侶に對する都市の關係を明かにせしこと即ちこれなり、かれが英國教會に對する熱誠は種々文學上の方面よりして教會を感激せしめぬ。その結果は爾後頗る注目すべき現象を現はすに至れり。カンタベリ(Canterbury)の學校及び圖書館は當時このセオドール

(Theodore)の建設にかゝるものにして、古ヘブライク方面より來たれる聖書(Scriptures)の希臘譯其の他多くの宗教書籍類は此のキャンタベリ圖書館のうちに藏せられたり。

六世紀に於いては基督教史上特に云ふ可き程の學者は少なし。その記録の残れるもの亦多しとなさず。當時宗教的活動をなせしものは大抵上來述べ置きたりと雖も尙その漏れを擧ぐれば次ぎの如きものあり。即ち、

一、フルゼンシウス(Fulgentius)——(紀元五三七)

二、ツールスのグレゴリ(Gregory of Tours)——(紀元五七三)

三、アイシドール(Isidore)

このうちフルゼンシウスはルスプ(Ruspé)の僧正にしてペラジアン(Pelagian)及びアリアン(Arians)の徒を攻撃せる著述あり。ツールスのグレゴリはフランス國(Franks)の歴史家にして又セントマルチン(Saint Martin)の奇蹟を信仰せし人なり。アイシドールも亦歴史家にして、且つ語學者なり、偽りの教理を書きたるはこのアイシドールなりとのことより彼れが名は此の點に於いて寧ろ有名なり。

六世紀の宗教學者

降誕について
の教義

尙此の世紀の末つかた教義の上に現はれたる現象について見るに、ニシーン(Nicene)及びコンスタンチノーブル(Constantinople)の教會の教へが更らに一つの公衆的批准を加へたること即ちこれなり。蓋しこは普通にフィリクエ(Filioque)なる語によりて知られたり。フィリクエなる語はフィリウス(Filius)即ち「子」なる語より出でたるものにして、精霊(Holy Spirit)は「子」より「From the Son」出でたりとのことを認む。こは宛かも猶基督が天の父(the Father)より出でたるものとして信仰せられたるが如き考へに基づけるものなり。精霊の神の子より出たりとの信仰は紀元五八九年トレド(Toledo)の宗教會議に於いて確認せられ尙後年西班牙の同會議に於ても認めらるゝに至れり。此の教義を普通に二重降誕の教義(Doctrine of Double Procession)と云ひ希臘教會の教へから出でたる教義中最も必要なるものゝ一つなり。然れども今日に於いては此の教義は敢へて新しきものと云ふ可からず、西部歐洲諸國は普通に此の教義を採用せり。ヒラリー(Hilary)アンブローズ(Ambrose)オーガスタン(Augustine)レオ大帝(Leo the Great)などの諸帝王が之を信せるを以つて見るも如何にその廣く行はれ居をりしかを知るに足

るべし。

二重降誕の教義(Doctrine of the Double Procession)は後日基督教派の分裂する主因の一つたりしこと殆んど争ふ可からざる事實なるも然れども東西兩派の論争に於いては吾人の想像する如くしかく樞要なるものなるや否やは疑問なりとす。嘗つてエルサレム(Jerusalem)に於ける宗徒僧侶輩が教義の上の感情よりして歐羅巴よりのビュルグロム巡禮者を襲ひ討ちたりし時には其れが爲めエイクス(Aix)の地に宗教會議は催されて紀元八〇九年其の二重教義は贊同せられたりき。然れども法王レオ三世(Pope Leo III)(紀元七九六—八一六)は此の教義に充分の信仰を表せるにも係はず基督教理のうち此の二重降誕教義(Philoque)を挿入することは何となく快しとせざるところなりき。さは云へ大勢の流るゝところは之を拒むこと能はず、フィリオクエ(Philoque)の教義は遂に西部歐羅巴一體の地に一般認むるものとはなれり。

以上の事實に聯關して吾人の注意す可きことはアサナシウスの教理(Athanasian Creed)のことなり。この教理は即ちかの二重降誕教義(Double Procession)を説きた

アサナシウスの教理

るものにして紀元六世紀の頃或はそれ以前に於いて既に現はれたり。然れどもその之を註釋せしものはヴェナンシウス、フォーチュナツス(Venantius Fortunatus)(紀元五七五)なりと稱せられたり。果して如何か未だ決定せられざるなり。或は云ふ、ハイラリ(Hilary)か又はヴィジリウス(Vigilius)ならんとされど又一方にヴィクトリシウス(Victorius)の書きしものならんとも云へり。甚だしきは之をシャールマン帝(Charlemagne)の時代に迄も引き下げてアクイレイア(Aquileia)の大僧正ポーリヌス(Paulinus)の手になりしものなりとも云へる説あり。然れども兎にかく種々の記録文書の證左に徴して考ふるに此の教理の現はれたるは六世紀の時代より早きことはあるもそれ以後にあらざることには信すべきに似たり

第七章 第七世紀に於ける基督教

七世紀に於ける基督教史の序幕は豫言者モハメッド(Mohammed)が宗教的大競争を世界の舞臺の上に現はせしに始まる。紀元六二二年モハメッド

モハメッド教と基督教との争

のメヂナ(Medina)逃亡の年代はヘジラ(Hijra)と稱して今も史上に其の名高く、モハメッド教國の歴史は實にこゝに其の始めての序幕を開くわけなり。

豫言者モハメッドの教義はイスラム(Islam)なる語のうちに悉く含まれたり。イスラム(Islam)とは神の心に従ふ(Submission of the will of God)の義なり。その神心に従ふとはつまり、茲には次ぎに示す四ヶ條の事をなすにあるなり。即ち、

- 一 巡禮をなすこと(Pilgrimage)
- 二 祈禱をさへぐること(Prayer)
- 三 断食を行ふこと(fasting)
- 四 施しをなすこと(Alms)

これなり。次ぎにモハメッドの經歷に就いて且つはかれが教理に就いて左に少しく述ぶるところあらん。

モハメッドの教理の第一とするところはイスラムの劍(Sword)に在り。イスラムの劍の向ふところ一として服せざるはなし。アラビア(Arabia)シリア(Syria)及び亞細亞その他ヘルシア(Persia)悉く之を従へたり。又亞非利加の北部地方

モノセリジムの
の争論

よりして西歐西班牙地方を迄も風靡せり。尙佛國のシャルルマーテル(Charlemagne)の爲めに大いに打ち敗られし外常に佛蘭西に於いても之が制服者たりき。モハメッド教の布教師は基督教徒の擾亂憤怒を以つて反つて有利なりとして之を教唆しモハメッド(Mohammed)自らネストリアン派(Nestorians)及びモノサイ特派(Monophysites)と互に氣脈を通せり。紀元六四四年アレキサンドリアの没落後モノサイ特派の僧正は尙殆んど百年間に近くもその地に布教に就事せり。

哲學的學問そのものは當時全く地を拂ひ或は寺院の奥にのみ限られて漸くその命脈を保てるの時代、宛かも基督教はその内部に於いて争鬪絶ゆることなく、争ひに繼ぐに争を以つてせり。

當時(紀元六一六——六八一)其の論争となりし點は耶穌基督の有するその多くの性質中その孰れのものにも獨立的意志の存するものなりや否や。又基督の人間としての意志は果して天なる神の意を受けて活く機械の如きものなりや否やの點に在りたりき。コンスタンチノーブルに於て大僧正ゼルジウス

(Serius)の如きは後者の方の説を是認せる一人なりき。後者の方の説は之をモノゼリヅム(Monothelism)と云ふなり。ヘラクリス帝(Heraclius)も亦紀元六二六年このモノゼリヅムを信仰してキストリアン及びモノファイライツの兩派をして基督教化せしめんことにつとめ居たり。シルス(Sylus)の如きもアレキサンドリアに至りて宗教會議の席上次ぎの如きことを明言して以つてモノゼリヅムに歩調をあはせり。即ち曰く基督はその神的行動によりて天帝のふるまひ及び人間としてのふるまひの兩方を兼ね得たるものなりと。以つて如何にモノゼリヅムの説の多く信せられしかを察し得べし。

然るにゼルサレム(Jerusalem)の大僧正ソフロニウス(Sophronius)はその教職に就きて未だ間もなく突然社會公衆に訴へて以つてモノゼリヅムをいたく攻撃せり。ホノリウス法王(Pope Honorius)はモノゼリヅムの説を信仰して之を認め、て批准を與へ其の好んで辯難攻撃をなすが如きものには飽くまで制裁を加へざるべからずと迄極言せり。

紀元六三九年ヘラクリウス(Heraclius)がエクセシス(Exechius)の反對論を公け

ヘラクリウス

にせしが如きもこれ亦ホノリウス(Honorius)の法策と同じ思想に基づけるものに似たり。エクセシスの反對論文はそのうちに基督の單純行爲(Single operation)と二様行爲(two operations)とのことを説き同時にモノゼリヅムを排斥せんとするものを反つて詰じれるものなり。コンスタンチノープル及びアレキサントリアは共に此のヘラクリウスの説を是認し居たりしもゼルサレム及びアンチオーク(Antioch)は他のモハメッドの羈絆の下に在りしかば唯ひとへに沈黙を守れるのみなりき。

次に時の羅馬の態度は如何と云ふに當時の羅馬はジョン四世(John IV)の御代にして極力ヘラクリウスの説を斥けたり。且つ同時に又モノゼリヅムの主義に對しても強硬に反對せり。マキシムス(Maximus)が大僧正ビルルス(Pyrrhus)を説きてモノゼリヅム派より改宗せしめしが如き又以つて情勢の如何を察知し得べし。

羅馬に於いて信仰を麻痺得る能はざりしエクセシスの説は紀元六四八年コンスタンヌ二世(Emperor Constans II)タイプヌ(Pyrrhus)の法令を發布して之により

タイプヌの令

てエクセシスは之を超然的のものとなし敬して遠ざく可きの由を知らしめたり。つまり是に於いてエクセシスは四面楚歌の聲の有様とはなりぬ。

抑も此のエクセシスの論は素と基督の行ひが天帝の意を受けて發動せしものなりとのモノセリズム(Monothelism)に對してその反對に現はれたるものなるは已に云へり。然れども苟も基督の信者たるものがかゝる反對説の起れるをも黙過して之に何等の替否を明かにせざるは反つて神に對して罪となるべしとの思想はやがて羅馬の教徒の間に行はるゝに至れり。紀元六四九年法王マルチン(Pope Martin)は百五人の僧正と共にラテラン(Latran)の地に第一回の宗教會議を開催し次ぎの件を認めたり。曰く、基督に於いて二つの結合したる意志(two united wills)と二様の行爲(two operations)即ちこれなり。而して此の會議に於いては基督の行爲が全然神的那のものとなし云ふ一様説は信せられず而してセオドール(Theodore)サイルス(Cyrus)セルジウス(Sergius)パイルス(Pyrrhus)ポール(Paul)エクセシス(Echesis)タイプス(Typus)などはすべて呪咀す可きものなりとのことを決議せり。かくの如きことを一決したるマルチンは紀元六五三年囚はれて

第六回宗教會議

クイニセキスト會議

コンスタンチノーブルの獄屋に送られ遂にかれは囹圄のうちに死に就きたり。僧侶マキシムス及びその他のモノセリズム反對者は孰れも無残にもコンスタンティウス帝(Constans)の爲めに虐待せられたり。

その後コンスタンチン四世の御代となり、事態は一層激烈となり紀元六八〇年百二十五人の僧正は一團となりて羅馬にモノセリズムを攻撃せり。其の翌年第六回の宗教大會議は開かれモノセリズムの撲滅を議決して、其の領袖マカリウス(Macarius of Antioch)を呪咀し其の應援者ホノリウス法王(Pope Honorius)を放逐せんことを誓へり。法王レオ(Pope Leo)は其の誓文に批准を與へ東西羅馬基督教國は爰に一體となりて同步調を取れり。

尙コンスタンチノーブルに於いては更らにその第六回の會議の不充分を満たさんが爲めに紀元六八六年所謂クイニセキストの會議(Quinixt Council)は催されたり。この會議は宗教上の修養並びに祭務に關する法典を定めたるものにして、その個條は二ヶ條より成りジャステニアン二世(Justinian II)によりて批准せられたり。而して此の會議によりて四人の教長(Patriarchs)は羅馬の都に派

遣せられたり、羅馬に於いては法王セルジウス(Pope Sergius)あり。四名の教長は法王の爲めに拒絶せられたり。是に於いて東西兩基督教國は漸く分裂の兆しを呈するに至れり。

東方コンスタンチノープルに定めたる教理が西方羅馬に於て容るゝ能はざりしがその主なる點は次ぎの六個の點なりとす。即ち、

- 一、既婚者の權力は教會に於いて定めらるゝこと。
 - 二、夫の權力は妻を制し得ること。
 - 三、救世主基督を現はすに人體の姿を以てして羊子の如きものにては現はさざること。
 - 四、血をすゝることを禁せざる可からざること。
 - 五、四十日間の記念断食のうち土曜日のみは断食をせざること。
 - 六、古代に行はれたる特別教理を守ること。
- これ等は孰れもコンスタンチノープルに於ける信者の認めたるところなるが羅馬に於いて認むるところのものとは全然別種のものなりき。

モノセリヅムの消滅

かくてその後三十年間はモノセリヅム(Monothelism)も或は現はれ或はかくれ居たり。紀元七一一年モノセリヅムを信せるフィリップクス(Philippicus)立ち帝は第六回宗教會議の決議をけなして反つて教長(Patriarch)どもに強ゆるにモノセリヅムを以てせり。羅馬は當時正教派(Orthodox)のもの多し。かくの如きモノセリヅムに關する争闘はこの當時を以つていよゝ其の終りとなすべく、其の後突然モノセリヅムそのものは勢を失ひ歴史の舞臺の上には最早やその影を失ふに至れり。マーカリツ(Marcarius)の寺院其のあとを受けてシリア(Syria)の地に其の一派を立つ。紀元一一八二年の頃まであやしなながらも漸くその命脈を保ち居たりと云ふ。

第八章 第八世紀に於ける基督教

八世紀に現はれたる主なる宗教的現象は紀元七一五年より同じく七八七年に至る間の偶像拜禮に關する大争論を以つて主なるものとなす。偶像拜禮に伴ふ種々の危険はエビフアニウス(Epiphanius)及びグレゴリー一世

偶像禮拜論

(Gregory I)に依りて既に心配せられ居たるところなりき。而してエピファニウス及びグレゴリの兩人はレオ三世に向つて非常に之を痛論し遂に紀元七二六年レオ三世をして、勅令によりて偶像及びその繪を破毀せしむるに至れり。これによりて激昂せられたるアーチペラゴ(Archipelago)の僧侶どもは復讐的にコスマス(Kosmas)を擁して帝位を篡奪せしめたり。暴徒は起りぬ。血は流された。而して教長ゲルマヌス(Patriarch Germanus)は職を去りぬ。而して茲にダマスカスのジョン(John of Damascus)は現はれてレオ三世の爲めに偶像禮拜の演説をかきぬ。伊太利に於いては先きの勅令を不當とし偶像禮拜の否認さるゝをいたく憤りぬ。ロンバルデー人はリウトブランド(Lombard Liutprand)の指揮の下にあまた羅馬に侵入し來たり、今や法王の位置は頗る危険に切迫しぬ。然れども帝グレゴリ二世(Gregory II)は反つてレオを目するに異教徒の名を以つてし、斷然これが教職を去らしむることに躊躇せざりき。

レオ去りて次ぎてコプロニムス(Copronymus)そのあとを繼承したり。されど偶像に関する争鬪は尙やまず法王ザツアリアス(Pope Zacharias)に對して議論又

第七回宗教會議

花を咲かしぬ。紀元七五四年帝は宗教會議をコンスタンチノーブル(Constantinople)に開きたり。されど一人の教長パトリアーク(Patriarch)の之に來會するものなく、集まるものは唯帝國の僧正ビショップ(Bishop)三百三十八名のみなりき。かれ等はすべて宗教上の議式に偶像及び繪を用ふることを全然否認すべきを決議せり。かくの如くして帝は之が反對僧侶に對して殘忍なる迫害を加ふるに至れり。而して果ては甚しくも新教長コンスタンチン(New Patriarch, Constantine)をば苦しめて斷頭臺の上に引致し、之にその首を刎ねたり。子のレオ四世は紀元七七五年に立ち尙又先帝が虐殺のあとをつけたり。

慘憺たる此の現象は紀元七八〇年アイリーン(Irene)の立つに及んでその終りを告げたりき。而して偶像禮拜は又舊の如く恢復することを得たり。やがて紀元七八七年第七回の宗教會議は開かれ法王はその議長の席に就き偶像又は繪の禮拜は認めらるゝに至れり。されどそは神の偶像とするに非ずして單に基督の像となすに過ぎざるなり。即ちその偶像(Image)のうちには神(Divinity)の思想を含み居らざることこれ茲に注意を要すべき點なりとす。

フランクフォ
ルトの會議

次ぎには翻つて西歐諸國方面を見るにフランク國に於いては紀元七九四年フランクフォルト(Frankfort)の地に於いて偶像禮拜に關する一會議は開かれたり。此の會議は國會にして且つ一部分又宗教上の意味を有せる會議なりき。出席者は英國の僧正、獨乙ロンバルデーの僧正などあり。而してアルヌイン(Aleuin)その議長席に就く。列席のものは諸外國のものも多かりし結果偶像の禮拜とあらゆるそのつとめとはかれ等の爲めに否認せらるゝに至れり。

かくの如くしてフランクフォルト(Frankfort)の會議は偶像の禮拜を否認し、西班牙僧正フレックス(Flex)などのいたく攻撃を受けたるもの少なからず。

八世紀の基督教史上尙注意すべきはシャールマン帝國(Charlemagne's Empire)の建立なり。シャールマン帝は基督教の保護者にして羅馬教會の勝利者(Champion of the Church)たり。つとめてかれは法王領の擴張をはかり爲めに國土と法王領との政治的關係が此の時に於いてやゝ曖昧となりし觀ありし程なりき。かくの如くシャールマンと法王とは兄弟の如き關係ありき。初めシャールマンはその帝位につくや、直ちに其の北方部族の衣服を脱して羅馬の法衣と着代へぬ。

シャールマン
帝

かれがレオ三世と互に愛の接吻をかはし羅馬の町を出で、漸くその姿のキャンパニア(Campagna)の小山にかくれんとせし其の頃は歐羅巴の局面は茲に一新舞臺を現するに至れり。

北方シャールマン帝國はあらゆる方法を以つて法王を擁護し、法王も亦能ふ限り其の精神的盡力を帝國の爲めにつくす。その志や美しく其のふるまひ又清しと雖も而かもこれには又恐るべき危険の伴ふものあるなり。即ち帝は法王に、法王は帝にと互に奴隸的關係を生じ來たりしこと即ちこれなり。否此の關係は單に一個人としてのシャールマンと法王との間にとどまらず。帝國と法王の教職との間は頗る愛ふ可きものとなれり。もしシャールマンが羅馬を見しこともなく、又法王が其の頭上にシーザー(Caesar)の王冠を戴きしこともなかりしならんには兩者の間は實に幸福なりしならんに、事實は之に反對せることこそ恐るべき限りなれ。

然れどもシャールマン帝は古代より羅馬諸帝の權勢が常に國の宗教の上に君臨せることを夙に知り居たれば、帝は殆んど常に法王に對して優制權を自覺

したり。さればかれが九世紀の第一日目に於いてセント・ピーター (St. Peter) の祭壇の前に跪きながら突然にも王冠を戴かしむべくレオ三世を教唆せしことあり。

かくてその後一千年間の久しきにわたれる神聖羅馬帝國 (Holy Roman Empire) は茲に形成せらるゝの端緒は開かれたり。

次ぎに學術の方面を見るに六世紀の頃より此の八世紀にかけての歐洲の學術は主として宗教に關するものなり。わけてシャールマン帝の時のものは其の範圍極めて廣く又社會上に深く其の根底を有せしものゝ如し。一つは國家の安寧に關し又基督教の發達にも至大の關係を有せしものなり。當時シャールマンに關連して知られたる學者を左に列擧すれば、

- 一、クレメント (Clement of Ireland)
- 二、ピーター (Peter of Pisa)
- 三、ポール (Paul the Deacon)
- 四、ポール (Paul of Aquileia)

當時の學者

五、エジンハート (Eginhard)

六、セオドルフ (Theodulph)

などその主なるものなり。かれ等は多く其の學派を形成し、各研究と辯論を重ね居たり。されどもその廣き宗教的範圍は漸次ちやめられ、遂には實際上の教育宗教問題に適合する能はざるに至り、茲に學派は命脈を失ひいつしか國家に學者の跡を見ざるに至れり。實際此の後七八年間は學術絶へてかの第十六世紀に宗教の改革起りしまでは何等の復興するものもあらざりしなり。

尙八世紀に就いて注意すべきは教會と國家との相互關係及び西方基督教國の社會的情勢の發展のこと即ちこれなり。左にその各について其の大要を述べん。

教會と國家

今宗教史上より見るに古代基督教の共和的民主的主義は此の八世紀に於いて著しく衰頹にかたむけり。而して争ひは常に帝王即ち國家の主權者と及び法王との間に醸されたり。フランス國に於いては僧正の選定を以つて單に僧侶のみの手にまかせず一般市民の手にもうつさしめんとせしが如き又西班牙

に於いて帝王が僧正の任命を以つて自己の権内に屬せしめんとせしが如き、皆一として政治的權勢が宗教以外に脱して古來の宗教的の民主主義は漸くその俤をかくさんとするに至れり。

此の時にあつて獨り英國は宗教的活動に於いて高潮に達し殊にセオドール (Theodore) の次ぎのベチヂクト、ピスコップ (Pendiel Hiscop) 及びウイルフリッド (Wilfrid) の時の如きは實に英國アングロサクソン教會 (Anglo-Saxon Church) の黄金時代とも云ふべき時代なりき。されどその最も偉大なる名の響きし時はアルヌイン (Aluin) の時にして、かれはシャールマン帝 (Charlemagne) の秘書官として且つは又歐洲に於けるあらゆる邦國の學者殊にツールヌ派 (Tours) の學者を誘致せしめ得たり。當時大陸方面にはウイグバート (Wigbert) の時の如きかのウトレヒト (Utrecht) の教會を確立して又丁抹の改宗を計劃せるあり。又ボニフエース (Boniface) の如き羅馬よりはなれて別に一大自由宗教團を形成せるものあり、要するに當時の宗教活動は其の氣運頗る注目すべきものあるに似たり。

巡禮旅行

八世紀の宗教舞臺に尙一つの新らしき現象は現はれたり。そは當時英國の

祈禱の言葉

婦人がその深き宗教上の信念よりして遠く羅馬に更に又パレスチン (Palastine) の地に旅行す。これを普通にピルグリメージ (Pilgrimage) 即ち巡禮旅行と云ふ。巡禮旅行は當時基督教一般の懺悔の心より出でし旅行なりとせられたり。然れども此の巡禮旅行は自然經濟上の問題と相關連せざるを得ず。罪惡を犯せるものもその若し富者なる場合には比較的行ひ易き道理なり。されどその本源が宗教に對する熱情より出づるものならざる可からざるは云ふまでもなし。巡禮の大意は以上の如し。次ぎに西歐諸國が禮拜をさぐる時の言葉は當時いづこの言語を使用し居たりしかと云ふに、ラテン語 (Latin) を以つてせしなり。英國に於けるケルト派の布教師 (Celtic Missionaries) すらもラテン語を用ひ而して、聖書の講義福音の傳道に於いては其の土語を用ひたり。然れども翻つて東方諸國を見るに普通のさまりとして希臘語を以つてせり。されど埃及のモノフェイスイト (Monophysite) はエプト語 (Coptic) を用ひ、ネストリアン (Nestorian) はシリア語 (Syriac) を以つてせり。又教會に用ふる神祭の器具は多く法王ヴイタリアン (Vitalian 757—672) によりて定められ又ビード (Beado) ボニフエース (Boniface) の名

日曜日の意義

と共に有名なる教會の鐘はこれ亦此の七八世紀の頃より用ひ始まりしものなるが如し。

基督教史上に現はれたる日曜日には種々の意味に於いて用ゐられたり。九世紀に於いては日没より翌日の日没に至る間を算して日曜と云ひ、十世紀の時はその意更らにひろめられて土曜日の午後三時より月曜日の黎明に至る間を云ふに至れり。尙當時騎士風精神より婦人を尊敬し、かのヴァージン、メアリー (Virgin Mary) の不死に關してもエビファヌス (Euphanns) などの如き人々は次ぎの如き傳説をつたへたり。即ちメアリーは死せしにあらず、囚はれて天國に至りしものなりと。されど紀元七八一年の頃には此の傳説が更にこり固まりて遂にかの『推定の祭』 (Festival of the Assumption) を成立せしむるに至れり。又後世かの羅馬カソリック (Roman Catholic) 又は英國教會に行はるゝ三斷食日 (three fast days = Ember weeks) の如きは紀元八一三年マイエニス (Mayence) の宗教會議に於いて定められたるものなり。

レオ五世の偶像禮拜者虐殺

第九章 第九世紀に於ける基督教

八世紀の宗教舞臺は西歐にシャールマン新帝國の勃興のことを以てその終りを結びしが、あけて九世紀となりては東方、ナインの地にてレオ五世に對する第二回の宗教會議が開かれたることを以つて始まる。蓋しレオ五世 (Leo V) はイノクラズム (Iconism) の張本人にして偶像禮拜に絶對に反對なる帝王なりき。されば偶像禮拜を好まざるものに迄敢へて之を強ゆるが如きことは固く禁じたり。時にコンスタンチノープルの教長ナイスフォラム (Nicephorus) は此の禮拜のことを司どり居たり。レオ五世は其の兵卒をして宮殿近く立てられたる立像をば悉く之を破壊せしめたり。且つナイスフォラムの教職は之を免じたり。新教長セオドツス (Theodosius) 立つ。茲に於いて第二のナイン會議はレオに對して開かるゝに至れり。時に紀元八一六年なり。尙其の後セオドル (Theodore) の如きもレオ帝王の詔に反して各偶像を擁せる僧侶の行列を舉行せり。セオドルは爲めに殘酷なる刑罰に處せられたり。然れどもかれはペーシャル法

王(Pope Paschal)にすゝめてレオ帝の使節を拒絶せしめ、コンスタンチノープルの民衆をして僧侶に反抗せしめ得たる點に於いて充分の成效を致せるものと云ふべし。レオはその餘りに偶像を非難して虐殺を肆にせしかば遂に攻撃の結果暗殺せられたり。紀元八二〇年ミカエル(Michael)かはりて王位につけり。

セオドール(Theodore)はかくの如くして其の主義の貫徹に於いて勝利を占め得たり。されど新帝ミカエル(Michael)の偶像禮拜の説教を嚴禁するに遇ひ其の意氣は大いにくちげ遂には再び處刑の災に遇ひたり。後セオフィルス帝(Theophilus)のミカエルに代りて立つに至り、帝は紀元八三三年ナイシーンの宗教會議に定めたる偶像禮拜の件をばいたく攻撃したり。單に攻撃せしのみならず恐る可き種々の慘虐を加へたり。然れども其の王妃セオドラ(Empress Theodora)は密かに偶像禮拜に心を倚せ居たりしかば、帝の死後は偶像は多く恢復の氣運にむかひ、紀元八四三年教職は多く此の派のものにて占めらるゝに至れり。されどその翌年ボリスヤン人(Paulicians)及びサラセン人(Saracens)との反抗あり。宗教上の争ひは遂は虐殺の慘狀を呈し信徒十萬の血を見るに至りぬ。

セオドール

フオーシウス
と法王
ン七世

紀元八六九年コンスタンチノープル(Constantinople)に第八回の宗教大會議は開かれたり。此の會議に於いて教長(Patriarch)にして希臘の學者フオーシウス(Photius)はいたくイグナシウス(Ignatius)に反對のかどを以て排斥を蒙りし。イグナシウス(Ignatius)は更らに一新教長を選定して而してラテンの僧侶は之を斥けたり。争鬪は此の問題より生じ來たつてイグナシウス(Ignatius)と法王ジョーン八世(Pope John VIII)との間は暗流絶へざりき。紀元八七七年イグナシウスは死しぬ。是に於いてフオーシウス(Photius)は舊職に復し傲然たり。遂には法王ジョーン八世の言明によりてフオーシウスは再び教長として活動するの地歩を得ることゝはなれり。

紀元八七九年コンスタンチノープルに又もや大會議は開かれ、今やフオーシウス(Photius)之に現はれて會議の議長の椅子を占めたり。法王ジョーン(Pope John)之をきゝ怒ること一方ならず、フオーシウスに對する宣告書を出し若し之を認めざるものはとて非常なる呪ひの言を放つて之を脅喝せし程なりき。後紀元八九八年法王ジョーン九世と教長ニコラス、ミスタクス(Patriarch Nicolaus)

西歐の基督教

Mystics)との間に仲裁の這入るに至る頃まで其の間の不穩は遂にやまざりき。蓋しこの争ひの根本はブルガリア (Bulgaria) に向つて希臘教會の習慣、教義を入るゝことに就いての羅馬との争ひによるものなり。遂に此の争ひは後紀元一〇五三年の最後の教會分裂の時までも繼續したり。吾人は次ぎに觀察の眼を基督教の大中心より少しく轉じて西歐諸國に於ける教會の概況を述べんとす。

九世紀に於いて佛蘭西及びフリースランド (Friesland) は如何なる情勢に在りしかと云ふに北人 (Northmen) によつて幾度となく侵入せられ又荒らされ居たり。其の北人が侵入の影響は遠く南の方伊太利の中原にまでも及びたり。紀元八五七年より同じく八六〇年にかけてルナ (Luna) ピザ (Pisa) その他の都市にして破壊せられたるものその幾何なるを知らず。爲めに基督教文化の發展は著しくその妨げを蒙りたり。

英國は紀元八三二年以來北人海賊によりて幾度となく荒されたり、實に由來ゆたかにしつらへられたる寺院宮殿は唯かれらが貪欲を充たするに打ちまか

され、何等の防備としてはあらざりしなり。當時略奪と破壊を蒙りしものゝうち最も有名なるものは次ぎの如きものなり。

- 一、クロイランド (Croyland)
- 二、イーリー (Ely)
- 三、ピーターボロー (Peterborough)
- 四、レプトーン (Repton)
- 五、リンデスファーン (Lindisfarne)

ノーザンブリア (Northumbria) に於ける各寺院、教會堂は七年間に於いて全く毀はされ了れり。僧正、僧侶は凡べて逃亡したり。文學と文化は全く地を拂ひぬ。而して基督教は今にもそのあとを滅せんとして風前の燈火の如き觀ありたり。嗚呼西歐基督教の命脈は今に絶えなんとするの氣運に至れり。

然るに危期は挽回せられぬ。紀元八七八年英國のアルフレッド大王 (Alfred the Great) 丁抹に打ち勝ちてウエドモア (Wedmore) の平和會議は開かれたり。實に此の年を以て基督教は英國は於いて復活の曙光を見るに至りたるなり。

アルフレッド大王

アルフレッド大王(Alfred the Great)の事業はシャーレマン(Charlemagne)帝のそれの如く實に偉大なり。されど基督教及び文化の保護者としては更に一層偉大なるところを發揮せり。英國教會の第一期に於ける基督教の建設及び發展は一つに全く此のアルフレッドによりて確立せられたるなり。かれは西部サクソン(West Saxon)の王にして紀元八四九年を以て生る。かれが丁抹に打ち勝つや丁抹の酋長豪族をして洗禮を受く可きことを條件の一つとして之を降したり。戦ひに於いて非凡の巧妙をあらはせしアルフレッドは又政治上に於いてもかれの生來の手腕をふるへり。教育上に於いて又文學上に於いて或は法律上に於いても特別の宗教的趣味を加へたり。其の特色は遂に永久的性質を帯ぶるに至れり。従來僧侶たちによりてのみ研究せられ居たる宗教文學を一般社會に通俗化せんとせしかれが計畫は實に十六世紀に於ける宗教改革を先見せしが如き觀あり。

アルフレッドは夙に民衆の間に良書の普及を必要なりとし自ら其の民の智的發達の爲めにとて種々のものを編みて之を發行せり。實にかれは又英國文

學の父としてあがむ可き帝王にして其の古書を土語に翻譯せしもの亦少なからず。即ち

一、ビード及びオロシウスの歴史(Historis of Bede & Orosius)

二、ヒンシウスの慰藉(Consolation of Boethius)

三、グレゴリ法王の教へ(Pastoral of Pope Gregory)

これなり。アルフレッドは又その民の無智をさぐりて自ら曰はく、當時テームス河(The Thames)以北に於いてラテン語の手紙を能く翻譯し得るもの又は教會の聖書をよく理解し得るもの一人もあらずと。又以つて當時學問の程度を知るに至らん。

アルフレッドは先づ第一に宗教教育を奨励し古刹寺院の再建をはかり。學校を起こし。出來得る限り各方面より書籍を集め來たり。又普くその領土内より學者を招聘し以つて教育上宗教上の發展普及を期待したり。

要するにアルフレッド大王が事業は大略かくの如きものにして後世英人が云ふところによりて見るにかれは理想的の統御者(Ideal ruler)たりと云ふべし。

即ち、アルフレッドは、

英國歴代の諸王中最も賢明にして最も善良且つ最も偉大なる王なりと。

Alfred the Great—"The wisest, best, and greatest king that ever reigned in England."

丁抹

當時丁抹方面は如何と云ふにハロルド(Harold)なる王カロリンジアン(Carolingian)の王ルイ、デボチール(Louis le Débonnaire)の爲めに助けられ王位につけり。ハロルド及びその王妃はメンツ(Mentz)の寺院にて洗禮をうけたり。後福音傳道を國中に普及することに於いて至誠をつくせり。時に王に伴ひて布教上に最も功ありしはコルベイ(Corbe)の僧侶アンヌカー(Anskar)なりとす。されど地方によりて、その布教に反抗するもの少なからず時としては一揆はハロルド(Harold)王に對してすら計劃せらるゝに至れり。王は遂に此の方面の布教を中止するの止むを得ざるに至り、眼を瑞典(Sweden)方面に轉じて此の地に傳道に従ふことゝはなしぬ。

瑞典

紀元八三一年アンヌカー(Anskar)は弟ウドマール(Witmar)と共に國幣を持って瑞典の地に向へり、渡航の途中海賊にかゝり所持品は全部掠奪せられ、聖書も法

衣の如きものまでもすべてなくなり。辛ふじて身を以つて裸體の姿にて免る。マラー湖畔ビルカ(Birka on the Malar Lake)に到着しこゝに嬉しくもあたゝかき歓迎を受けたり。王は二人をもてなし其の顧問のヘリジャー(Herigar)は即座に基督教に改宗したり。其の後同地に信者次第に増加せしもまた之を以て教會を組織すべき程までには至らざりき。

アンヌカー瑞典に滞在すること一年有半にしてルイテポチールの許に瑞典王の手紙を持ちて歸り種々自分の經驗談をなせり。ルイは是に於いて瑞典方面布教の目的にてハンブルグ(Hamburg)の土地に教會を設置せり。後アンヌカーは又羅馬に至り、北方布教の必要を痛論したり、僧正の位置を授けられたり。

當時ハンブルグは丁抹の軍隊の爲めに荒らされたるあととなりしかば教會の職はブレーメン(Bremen)の教會に聯合せられたり。而してアンヌカーはブレーメンの教會に居たり。紀元八五五年かれは再び瑞典の地に布教に出かけたり。其の熱心なる福音傳道は未だ十年を出でずしてスカンデナヴィアの半島(Scandinavia)は全く基督教化することを得たり。此の愉快満足を見たる後かれ

は此の世を去りぬ。實にアンスカーは基督教史中世紀に於ける最も美しき性格を有する布教師の一人なり。其の慈善に於いて人格に於いて、死を恐れざることに於いて。又その事業の莊嚴なることに於いて當時アンスカーの右に出ずるもの全くなしと云ふも過言に非ざるなり。紀元八六五年アンスカーの死後ハンブルグは其の弟子リンバート(Kimbert)によりてその後継者を得たり。

次に諾威の布教はセント、オーラフ(Saint Olaf)が同地に永久の計劃を以て教會堂を設立したるがその始めなり。諾威よりの福音傳道は更らに迥かにアイスランド(Iceland)及びグリーンランド(Greenland)に迄も普及せり。

當時尙基督教國として新たに現はれたるものには、ロシア(Russia)ブルガリア(Bulgaria)モラヴィア(Moravia)ポーランド(Poland)ウエンド(Wends)及びハンガリ(Hungary)フィン(Finn)などなりとす。

露西亞は紀元九五五年オルガ女王(Olga)コンスタンチノーブルの町に至りて基督教を體し得たり。女王は歸國して先づ之を天子スキアトスラブ(Sviatoslav)に説き試みしも遂に之を基督教化すること能はざりしも王統ウラジミール

諾威

露西亞

(Vladimir)に於いてはよくその教義の眞理をさとらしめ得たり。その後ウラジミール欧州諸地方に使節を派遣して種々の宗教を研究せしめ結果遂に此の基督教を以つて信念すべきものとなし國內に教會を組織し人民をして、スラブ語を以つてかゝれたる聖書を讀ましむるに至れり。

ブルガリア(Bulgaria)は初めシリル(Cyril)及びメンヂウス(Methodius)の二人が布教に入りしを始めとしてダニウプ下流域(Lower Danube)マセドニア(Macedonia)地方は基督教化せり。ブルガリアの王ボゴリス(Bogoris)は特に又此の方につとめ居たる王にして王は夙に羅馬と氣脈を通じ居たり。

モラヴィア(Moravia)は九世紀の頃有力な大國として露西亞方面に現はれたり。王ロスチスラブ(Rostislav)は紀元八六三年希臘の帝王ミカエル(Michael)に要求して、聖書の露西亞譯をなし得る學者を招かんとせり。尙モラヴィアにはその布教師をも缺乏し居たり。茲に於いてシリル(Cyril)及びメンヂウス(Methodius)の二人はそれに應ずることゝなりぬ。二人は乃ちスラブ語のアルファベットを組織して、福音章、使徒傳、讚美歌及びその他の聖書の多くの部分を翻譯したり。ブ

ブルガリア

モラヴィア

ルガリアに於ける此の基督教傳道の事業は端なくも獨逸宣教師の反抗を喚起せり。蓋し獨乙の宣教師はその國語にて書かれたる聖書の用ひられざるを以つて不満となせり。その後多年にわたりてモラヴィアは苦悶のうちに葬られたり。紀元九七三年ブラーグ(Brago)の大僧正は撰定せられぬ。されどモラヴィアの不幸は依然たり。殊にマジヤール人(Magians)によりて多大の攻撃を受けて國家の覆かへされたる時に於いてその不幸は絶頂に達せしものと云ふべし。かくて平和の時節は到來しぬ。されど其の時既にモラヴィアは國家の組織を失ひたり而していたましくも外國ボヘミア(Bohemia)の王國に併吞せられて僅かにその一州たるの運命となれり。

モラヴィア國滅亡離散の時に於いてその氓民は一部遁れてポーランド(Poland)の地に入り茲に布教師となりて福音を傳へたり。紀元九六六年ポーランドの公爵ミシヌラヌ(Mieszko)はボヘミア(Bohemia)の王族と婚を結びぬ。蓋しこは一面に於いてポーランドが偶像禮拜をやめてその代りに基督教を採用するとの事を示せし爲めの結婚なりしが如し。これによりてポーランドは又羅馬と

ポーランド

ウエント

の關係も確立しぬ。然れども片田舎地方に於ける田夫などの徒は尙舊來久しく慣れたる異教の夢にあこがれて新基督教の傳來を好まざりしが如し。

ウエント國(Wends)はオーデル河(The Oder)河の流域に在り熱心なる偶像禮拜國として著名なり。ウエント國は未だ國家をなすに非ず。多くの部族の集まりに過ぎず。オットー一世(Emperor Otto I)とに之を征服せしことあるも後紀元九八三年かれ等は再び獨逸を恢復しぬ。而してかれ等が一ヶの國家を形成するに至りしは紀元一〇四七年のことにしてゴットショルク(Gottschalk)の諸部族を統合せしによるものなり。ゴットショルクは百方力を盡して基督教を新國家に吹き込むことにつとめたり。然れども其の結果は反つて失敗に了り。國土は尙偶像禮拜の古風のまゝに残りたり。その始めて基督教化せし時代は紀元一一六八年のことなり。それまでは舊の如き有様なりき。蓋し紀元一一六八年はウエントの最後の偶像が僧正アブサロン(Absalon, Bishop of Reskilde)の爲めに火災にかゝりたる時にして此の火は衆民歡呼のうちに起りたるものなりと云ふ。

ハンガリ

ハンガリ(Hungary)は一つにウングリとも云ひ最初羅馬に旅行せし王族の爲に基督教を味ふ基をひらくに至れり。然るに獨乙の奴隸にしてかつて戦争の爲めに囚はれてウングリに在りしものその歸國と共に基督教を傳へ來れり。而してその囚人の大部分は再び此の新ハンガリ國の住民として配せられたり。公爵のゲイサ(Géza)は紀元九七二年—同じく九九七年の人なるがかれは一面に於いて土地の神々を信仰せると同時に又他方に於いては基督禮拜の教會堂を建てしこといくばくなるを知らず。其の子のステフエン帝(Stephen)帝の時代に至りて、基督教はその國教となれり。ステフエンは其の國の福利を發達せしむる點に於いて成功せし人なり。かれは國內到るところ隈なく福音傳道と洗禮とに就事し、又寺院會堂を起し學校を建設し、又施政の道を講せり。

ステフエンは又國の制度を變じて部族に統一を施し、又自ら努力して遂に全國を基督教化したり。かれがハンガリ(Hungary)に於けるセント、ステフエン(Saint Stephen)と稱せらるゝ亦偶然にあらざるなり。而してかれは使徒王の稱號を得て法王よりは黄金の冠を贈呈せられたり。又以て重大の名譽と云ふべし。

西方基督教の勢力が此のハンガリに於いて著しく現はれたる事實あり。蓋しそは此のステフエンの時代より遂に今日に至るまでも、教會の用語、宮廷の用語その他學校、政府の言語がすべてラテン語を以つて専ら話さるゝによりて之を察知し得べし。

ステフエンの死後一揆は起りぬ。かれ等は多く保守派のものにして舊來の偶像禮拜を恢復せんとするの徒なり。然れどもかれ等は孰れも成功を見ずして四散し去りぬ。

時代は九世紀よりも尙少しくおくるゝも、序でながら茲に、フィンランドに於ける基督教の大要を述べんと欲す。フィンランドは紀元一一五七年スエデンの王エリック(Eric the Saint)の爲めに征服せられたり。フィンランドの地たる、森林を以つて一面に蔽はれ、人口は稀薄にして歐洲の大勢よりもおくるゝこと甚しされば先祖ながらの偶像禮拜の古風が頑固に保存されてあること又察するに餘りありと云ふべし。エリック(Eric)の熱心なる基督教化後と雖も尙久しく頑迷なる百姓どもの魔術師が支配の下にありしは奇とするに足らざるなり。

フィンランド人

リボニア(Livonia)及びバルチック海(Baltic Sea)に沿ふ獨逸諸地方よりしてクリスト信者はあまたフィンランド(Finland)の地に走り熱心に同地の住民を説いて改宗せしめんことにつとめ居たり。バルチック海に沿ふて群居せるエソニア(Esonia)人の如きは基督教を信せざる可からざるものとして紀元一二一一年劍の同胞(Brethren of the Sword)によりて迫られたり。劍の同胞とは北方偶像信者なるものの必ず如何なることあらうとも是非基督教化せられざる可からざることを説くを以て目的とするものにして、平和の方法を以て之をすゝむるにあらず、むしろ劍を以つて之を強ゆるなり。

第十章 第十世紀及び第十一世紀に於ける

基督教(九〇〇—一〇五四)

宗教の衰運

十世紀に於ける基督教史は一言を以つて之を蔽へば、無秩序無宗教にして智的暗黒の時代なりと云ふことを得べし。法王は常に政治的活動の方面に於いて主導者たり。而して宗教上の實権は頗るあやしくなれり。かれ等の多くは

不測の死を以て終り又牢屋のうちに呻吟してその最後を遂ぐるもの少なしとなさず。當時神學上の議論は又極めて自由放任に流れて法王の廢立さへみだりがはしくなり。紀元九〇四年セルジウス三世(Sergius III)の立つとともに廢尼セオドラ(Iconodora)及其女の向上の氣運は現はれたり。而して教職はかれ等のいと子又は孫を以つて之に就かしめたり。然れども大僧正始め僧正その他教職にあるもの放肆にしてその名譽を重んずるもの少なし法王の如きも又頗る世の信用覺束なくなり正面攻撃を受けしもの多し。事態かくの如きにも係らず佛蘭西のロバート一世(Robert I)の如きは法王と親しみ互によく氣脈を通ずることを以つて必要なりとし。かつて退けられ居たるアーヌルン(Anselm)を復職せしめて以つてグレゴリ五世(Gregory V)の意に投せんとせしこともありき。時に紀元九九八年なり。

今や基督の降誕ありて以來殆ど一〇〇〇年の星霜を経たり。此の時間に或は教界の天地風雲暗澹たりしことも一度ならず打ち續きしも然れども其間又教理の頗る根底を深ふすることを得たるものあり。なかには生活の問題をさ

へ打ち忘れて信仰の爲に殆んど狂氣の如くにまで熱せしものあり。それに引きかへ又極端に宗教を無視し、單に無視せるのみならず、悖徳、大罪を犯して平然たるものをも生ずるに至れり。

かくても教會は世の信仰者より其の有がたみは認められ、施物、贈物はあまた恵まれぬ。然るに紀元一〇〇九年ゼルサレム(Jerusalem)が土耳其人の爲めに落されたる時に至り、又もや教會は種々の迫害を蒙り、突然の恐慌を來したり。これ即ち教會の存立に對して非常なる打撃にして、教會の衰微はこゝに前兆を表はしぬ。

法王の衰微

十一世紀に至り基督教會及法王の情境は愈益危期に迫りぬ。殊に紀元一〇三三年ベネデクト九世(Benedict IX)が法王となり、人間のなし得る罪惡のうち最も甚しき惡を極めたるかれはこの時に至りてその絶頂に達しぬ。セント、ジョン、ラテラン(Saint John Lateran)セント、ピーター(Saint Peter)及セント、メアリー(Saint Mary)の三教會より互に放言し居たる罵詈譏の如きも法王を攻撃せるものにして、其の基づくところ亦故ありと云ふべし。其譏謗の極は紀元一〇四六年ス

ツリの會議(Council of Sutri)と共に其の聲を收めたり。

紀元一〇四六年には又法王レオ九世(Leo IX)の任命あり。此の任命は端なくも羅馬と國民との間に大争闘を引起せり。されどこの擾亂は紀元一〇四九年まで續けり。此の年宗教會議は開かれぬ。而して此の會議に於いては次きの二箇の條件を定めたり。即ち(一)僧侶に非ざる俗人が教會の保護に向つて制肘することを禁ずること。(二)僧侶は獨身者に對して適宜の制肘を加ふべき責任を有することの二點即ちこれなり。

以上の如き個條を決定したるも其の後即ち獨身未婚者に對する制肘の規則はその結果頗る恐るべき現象を表し來たり。僧侶、牧師、尼などの間に種々の隱密なる且つ自然にそむける不徳を醸生するに至りしこと即ちこれなり。

ミランの教會(Milanese Church)はセント、アンブローズ(Saint Ambrose)の歴史的教へに従ひ獨身の女と僧侶との間に結婚の批准をなすべき説を致し居たり。當時この説はめでたくもてはやされ世の歡迎をうけたりき。されど當時布教師、牧師の獨身主義を主唱せし熱心なる人々にはいたく攻撃の相手たりしが如し。

獨身者の制肘

オード及びダ
ンスタイン

羅馬をはなれて次には英國の方面を見るに、英國に於いては大僧正オード(Odo)によりて宗教改革は企てられたり。されどこの成功は次の大僧正ダNSTAIN(Dunstan)の時にあり。ことは紀元九五九年にありしことなり。その改革の主なる目的は結婚の牧師をその妻より離れしめ、又俗人の牧師を其の寺院より放逐せしめんとするにあり。ダNSTAINは之により婚せる牧師僧侶に對して戦を挑み且首尾よく勝を制せり。尙此の十世紀より十一世紀にかけては僧ラセリウス(Ratherius)及び法王ベネデクト三世(Benedict III)などの間に此の僧侶婚姻のことに就いて議論は絶へざりしが、遂にヘンリ二世(Emperor Henry II)はベネデクトの説を採用して僧侶と俗人との姻を認めしむるに至れり。

平和安寧

茲に述べたるものは單に僧侶と婦女子とに關する規定なるが尙十一世紀の半葉は此外社會の無事安寧に關する保全の規定も亦あまた決せられたり。尙一週に於ける休息の如きもいたく社會に要求せられ、エレン(Ellen)の會議に於いては遂に土曜日の第九時間目より月曜日の第一時間目に至る間の時間を以つてそれと定めらるゝに至れり。然れども此の休息日の時間は後紀元一〇九

學術界

五年エドワード(Edward the Confessor)の法律によりて短かめられたり。

次に十世紀に於ける學術的方面は如何と云ふに、多くは議論證の組織になれるものと、及び宗教上の記録に關するものとの二つなり。當時學者の主なるものは次の如し。

- 一 ジャーバート(Gerber)
- 二 ロバート(Robert)
- 三 フルバート(Fulbert)

ジャーバート

ジャーバート(Gerber)は當時の碩學にして科學者(Scientist)の先覺者なり。ジャーバートは嘗つてサラセン人(Saracens)が西班牙の地に傳へ來りし數學(Mathematics)物理學(Physics)醫學などを研究し、又ライムス(Rheims)に於けるモナストの學校にアラビア數字(Arabian numerals)並びに小數點以下の數詞のことなどを傳へ、その他尙時計の構造、天文機械の仕掛の如きものより蒸氣機關に至るまでのものを紹介せし學者なり。次ぎのロバート(Robert)はジャーバートの弟子にして紀元一〇〇〇年の頃に現はれ、これ又學術及び藝術界の恩人として著名なり。

ノミナリズム派

十世紀の學術界に於いては尙哲學上の議論を生じたり。そはプラトニー(Plato)の宇宙説に就いての學説即ちこれなり。これ迄數世紀にわたりて此の問題は争はれたり、一つをノミナリズム(Nominalism)と云ひ他をリアリズム(Realism)と云ふ。

ノミナリスト派の説くところは、人馬その他かくかくの如きもの概念(General conceptions)は智識の抽象なり即ち智識の本體から抽象して考へられたるものにして、智識の範圍以外には何等の存在を有せざるものなりとなすもの、如く換言すれば、概念とは次ぎの如きものなり。

曰はく、單なる名稱、單なる音聲、音聲の呼氣、

Nomina mera, Voces nudae, flatus vocis.

即ち之を概念と云ふなり。

此の説は後世に於てもよく行はるゝ學説にして、左の如き學者をその著名なるものとなす。

一、ホッブズ(Hobbs)

二、バークレー(Berkeley)

三、ヒューム(Hume)

四、アダム・スミス(Adam Smith)

五、ステューワート(Stewart)

六、ハミルトン(Hamilton)

即ちこれなり。

リアリズム派

次にリアリズム派のもの云ふところによれば概念(General conception)とは單なる人間智識の範圍以外に別に一個の存在(One existence)を有するものとなすなり。例へば人とか馬とかの如き概括的一般の名稱の言葉は吾人の五官に映ずるところとは別にはなれて其の實在(A real existence)を有するものとなすなり。それ故に前者ノミナリストの位するところは例へば人を概念として考へて人類(Humanity)は單にソクラテス(Socrates)プラトニー(Plato)フェード(Phaedo)及び他の個人々々に於いてのみ存在するものとなすものにして即ちその「人」なる語はソクラテス(Socrates)プラトニー(Plato)フェード(Phaedo)などの共通に有する特質を示

す爲め造られたる智識的工夫に過ぎざるものなり而して「人」なる名稱はこれ等すべての人々に對する概括的の名稱にして打つて之を一まとめにして考へたるに依るものなるは云ふまでもなし。ノミナリストの説は實に以上の如し。次にレアリスの説について更に之を攻撃するに、かれ等の信するところは次ぎの如くにまとめて觀察することを得べし。

ソクラテス派

レアリスト派たるはソクラテス(Socrates)プラトーン(Plato)アエド(Plato)其他一個々々の存在せしより以前に於いて、既に「人」(ヒト)と云へる抽象的感念は根本的にして且つ永久不變的の實在を有し居たりしこと。而してソクラテス(Socrates)と云ひプラトーン(Plato)と云ふは皆唯此の人間(Mankind)と云へる感念に該當するその人たるに外ならざるなりとの見解なり。

當時歐洲の學術界には尙モナスチック派(Monastic)カソリック派(Catholic)その他神秘主義(Mysticism)など諸種の學術あり前二者はスコラスチックの學系(Scholastic System)に屬するものなるが、此のスコラスチックの全學系は以上のノミナリスト派(Nominalist)とレアリスタチック派(Realist)のうち孰れかに屬せざるものなき

程なりき。

フルバート

紀元一〇〇七年チャーターヌ(Charteris)の僧正フルバート(Fulbert)は當時ジャーバートと相並んで一流の碩學たり。其の弟子のヘレンジャー(Herengar of Tours)は基督の根本教義に對して反駁論をなせり。而して曰はく、物界の要素は變じ基督の肉體はパンと酒のうちのみ現在する由のことを主張せり。されど此の考は紀元一〇五〇年羅馬の教會より攻撃を受けたるランフランク(Lanfranc)によりて反對せられたり。

アンセルム

當時又アンセルム(Anselm)と云へる學者あり。基督の死を以つて人の犯せる罪業の爲めに罰せられたるものとなさずして、世界俗世界の犯せる罪の爲めに其犠牲となりしものなりとなせり。又アベラード(Abelard)はスコラスチック派(Scholasticism)に於いて懷疑論を指摘せり。然れども學派に就いてかれはレアリスト派に屬せりと云はんよりは、寧ろノミナリスト派なり。バーナード(Bernard)はアベラード(Abelard)に對していたく反對を試み大いに之を打ちこはせり。神秘主義(Mysticism)とスコラスチズム(Scholasticism)との間の争論は遂にピータ

東西基督教國
の分裂

1. ロンバード (Peter Lombard) によりて調定せられたれども、然れども其の争ひの根本は決して解かるゝこと能はざりき。
今本章を終るに當つて東方基督教及び西方基督教國との間に於ける最後の分裂のことについて少しく觀察するところあらん。

東西基督教國分裂の基は既にチャーレマン帝 (Charlemagne) の時にさざせり。而して最後の破裂はかの教長ミカエル、セルラリウス (Patriarch Michael cerularius) の爲めに導き出されたるなり。時は宛かも紀元一〇五三年なりき。そのさき既に紀元一〇二四年の頃東方基督教國よりして、西方國に向つて次の如き動議を出だせしことあり。曰はく、

世界僧正 (Universal Bishop) は教長 (Patriarch) にも法王 (Pope) にも同様に認められざる可からざる稱號なりと。

是に於いて西方基督教國はいづれも此の動議に對していたく嫉妬の眼を以て之を目せり。この動議及び當時ミカエル (Michael) が毒舌を放ちし手紙とは南伊太利にラテン基督教の傳播せるものありしを以つてその導火線に觸れて早

ミカエル

レオ九世

も風雲は暗澹として羅馬の空を蔽ふに至りぬ。かくてミカエルが名はいたく當時の注意を引けり。蓋しミカエル (Michael) の手紙は西方基督教國教會の缺點誤差を指摘せしもの多し。かれの指摘せるところによれば、宗教會食 (Mass) にかたきパン (Unleavened bread) を用ふる事。其の他かく引きしめたる食料を用ふる事。レント祭 (Lent) に土曜日の斷食をなす事。又イースター祭 (Easter) に大ハレルジャー (Great Halleljah) の讚美歌をうたふ事。此れ等四つのことを行ふを以てラテンの非行 (Latin Malpractices) なりとして之をいたく譏謗せり。尙ミカエルは此の時ラテンの教會を閉會せしめ、コンスタンチノーブル (Constantinople) に於けるラテンの僧侶 (Latin monasteries) を捕縛せり。

ミカエルの此の處作に對して羅馬レオ九世 (Leo IX) は如何なる方法をとりに之を鎮定したるか。レオは先づミカエルの説を排して、セント・ピーター (St. Peter) が昔し羅馬に與へたる特權を説き明かし、極力一般に對するミカエルの誤訓の謬れることを知らしめんことに勉めたり。レオの此の熱心伶俐なる方法は東方コンスタンチン、モノマクス (Constantine Monomachus) の援助と同盟を得て以

つて誹謗者を退くることを得たり。かつて一僧ニセタス、ベクトラッス(Nicetas Pectoratus)が西基督教國羅馬に對して、罵詈の檄文をかきし時の如きもレオ九世は直ちに命じて其の檄文を焼失せしめ且つベクトラッスの教理を根絶せしめたり。

レオ九世の態度かくの如きにも係らず東羅馬帝コンスタンチン(Constantine)は熱心に其の兩者の調和親睦をはからはんことをのみこれつとめ居たりしもの、如し。されど羅馬法王より派遣せられたる使節の要求の多大なる。又大僧正に對する教長フンバート(Carinal Humbert)の苦言の激烈なるは遂にギリキ人をして益激昂せしむるのみにして、爲めに調和親睦は望み得べからざるものとはなれり。フンバートは尙二名の法王の使ひと共に事件の落着をつける爲めビザンチン教長(Byzantine Patriarch)と談判を開始せり。されど到底其の望を果たすこと能はざりき。かれ等はセントソフィア(Sr. Sophia)の祭壇の前にミカエル(Michel)及其の宗徒を呪咀し、紀元一〇五四年國幣を齎らして無事羅馬に歸國したり。而してミカエル舊の如く宗教會議に於いて其の信仰を恢復しぬ。

東西の不和

アンテオークの教長(Patriarch of Antioch)ピーター(Peter)は事態を緩和せんことにつとめしもの、如しと雖も、然れども他の東方諸教會は熱心にコンスタンチンノーブル(Constantinople)の舉に應援を與へたり、而して東西兩基督教國の間は不和に了り事態頗る面白からざりき。

かくの如くして成りし分裂の状態は遂に今日に至るまで癒せられずして尙不和の間に在るが如し。

第十一章 第十一世紀に於ける基督教(一〇五四—一〇〇〇年)

カーデナル

中世紀時代(Middle Ages)に於ける法王組織(Papal System)の確立は紀元一〇五九年宗教大學(College of Cardinals)と密接の關係を有するに至れり。此の宗教大學とはカーデナル大僧正(Cardinal)の宗教研究所にしてそのカーデナルとは素と教會に一定したる職を有せしもの義なり。羅馬に於いてはこれが特別の義を有するに至れり。即ちカーデナル(Cardinal)とは、

教會の樞機を司ぐるものにして又其のかしらたるもの、

Cardo et Caput Ecclesiae

との義をとるに至れり。而してカーヂナルは僧正と僧侶との兩者あり。カーヂナルの僧正(Bishops)は即ち法王直轄地に布教せる。七僧正にして、次に擧ぐる七ヶ所の都市に居たりしものなり。

- 一、オスシア(Osina)
- 二、ポルトー(Porto)
- 三、アルバノ(Albano)
- 四、ルフィナ(S. Rufina)
- 五、フラスカチ(Frascati)
- 六、パレストーナ(Palestrina)
- 七、ラサピナ(La Sabina)

尙カーヂナルの僧侶は羅馬教會中主なる二十八ヶ所の會堂に在りて専ら傳道に熱心し居たり。紀元一〇五九年ラテランの會議に於いて法王の選舉は今後カーヂナルの大學よりなす可きことと決定したり。當時カーヂナルの實權

はあたる可からず。かのベネディクト十世(Benedict X)の如きはカーヂナルの候補者ゼラールト(Gerard)の膝下に跪くと云ふ有様なりき。時に七僧正はカーヂナルの選舉について第一回の會合を羅馬にひらきカーヂナルの功蹟に就いて論ずるところありたり。されどカーヂナルの僧侶だちはすべて其の選定に初めより同意を表して法王の名譽と尊敬とを十二分に讚美しあへり。十一世紀に於けるカーヂナルの名望は大略かくの如きものなりき。されど次ぎの十二世紀に至りアレキサンダー三世(Alexander III)がカーヂナル選定に關する干渉はやゝ注意すべきものに似たり。されど今茲にはそのことに就いて云はざるべし。

帝王と宗教

十一世紀の中葉は概して云へば基督教と羅馬の帝王の權力との拮抗軋轢時代とも云ふ可き時代にして、教會側のアレキサンダー二世(Alexander II)と帝王ヘンリー四世(Henry IV)との間の如き少なからぬ争を見たりき。されどアレキサンダー側の威信は帝王のそれを遙かに凌げるものあり。殊にアレキサンダーはコロン(Cologne)の僧正ハンノ(Hanno)の應援によりて大いに勝ちほこれり。ア

ウグヌブルグ(Augsburg)の會議の如きアレキサンダー(Alexander)を以つて法王(Pope)に承認したるあり。

又ピーター・ダミアニ(Peter Damiani)は此のウグヌブルグ(Augsburg)の會に於いて王權と羅馬教會との兩問題について痛快なる論説を試みたり。蓋しその演説は決して輕々に看過す可からざるものなるが如し。何となれば基督教界に於ける法王が羅馬帝國から離れて別に獨立するに至りし氣運はたしかにかれが言葉のうちに明示されて居たればなり。

次いで紀元一〇七〇年代の頃の獨逸方面を見るに此の地方は當時ヘンリー四世(Henry IV)の施政にかゝりヘンリーの非望野心罪惡亦擧ぐるに堪えざるものあり。否ヘンリーの幕下には宗教上破門さる可きもの少しとせざりき。殊にサクソニー(Saxony)方面に於いて少なからず之を見たり。法王アレキサンダー二世(Alexander II)之を決とせず王の幕下五人を破門し而してヘンリーをして基督教の爲めに之を忍ばしめ且つ満足すべきことを以つてしたり。ヘンリーの失政は此の外グレゴリ七世(Gregory VII)によりてもいたく攻撃を受けたり。

ヘンリーとグレゴリとの衝突

ヘンリーはサクソニー(Saxony)の擾亂に對して之を鎮撫すること能はずかれが與黨は頓みに減退の姿なるに引きかへグレゴリ(Gregory)はツリバー(Tribur)に會を開き法王よりの使節獨逸の王族貴族其の他の僧正などあまた之に臨席し孰れも皆ヘンリーを非難してその勢頗る激烈を極めたり。曰はく、教會と國家の上に大難を醸生せし原因はヘンリーその人にありヘンリーの如きは宜しく速かに退く可きのみ云々と。

やがてヘンリーはグレゴリより破門の宣告を受けたり。時に一ケ年間の慈悲の猶豫は許されぬ。

ヘンリーのアルプス越

ヘンリーは敵の慈悲を受け紀元一〇七七年の冬わづかの従者を従へてアルプス(Alps)の峻嶺を越え得たり。時に伊太利の貴族僧正のグレゴリに對して反撥を起す可く熱心せるものどもに遇ひたり。ヘンリーはかくと見るよりいたく仲裁の勞をかれ等に嘆願せり。時にグレゴリはカノッサ(Canossa)の近傍なるマチルダの城に居たりしかば、ヘンリーは嚴寒の日なるにも係らず跣足法衣をまとひたるまゝ三晝夜にわたり城砦の間になゝすみて偏へに破門宣告の取り

消しをのみ俟つ可き運命とはなりぬ。されど此のいたまじき光景は更らに他の紛擾の醸すものあつて益事態はむづかしくなりまさりぬ。

伊太利の僧正貴族は固よりグレゴリに對して面白からぬ間柄なるもされどヘンリーの帝王にも似ずあまりに屈辱を受け居たるを見て茲に嫉焉の情を生じたり。その上獨逸方面に於ける貴族僧正も時局が始めの豫定とちがひアウグスブルグ(Augsburg)に法王の裁斷鎮撫せらる可しとのことに符合し居らざるを以つてかれ等も亦不満憤怒の念を抱きけり、法王グレゴリはフォールケイム(Forchheim)の會議を召集しぬ。時に事態は其の最も惡の絶頂に達したり。即ち法王及貴族はヘンリーが伊太利王冠をただかんとするの要求を斥け、且つ貴族等も屈辱を蒙むれる帝王に従ふを屑しとせずサワビアの公爵ルドルフ(Rudolf, Duke of Swabia)をば選定して而かもヘンリーを斥けそのあとを繼がしめたりき。

然れどもヘンリーとても尙フランコニア(Franconia)及びバヴァリア(Bavaria)に多少其の味方を有し居たりしかば、ヘンリー及びグレゴリとの兩派の間には尙

効ヘンリーの成

少なからぬ擾亂と争闘とを生じ來たり、紀元一〇八〇年遂にヘンリーはルドルフ(Rudolf)の爲めに破門せられ放逐せられんとせり。然るに其時宛かもルドルフの戦没あり。大局はこれが爲め一變しぬ。ヘンリー此の機に乗じて軍を羅馬の城壁に派遣しグレゴリを攻め圍めり。グレゴリの包圍さるゝこと前後三年間の久しきにわたりしが、遂に紀元一〇八四年ギバート(Guibert)即ちクレメント三世(Clement III)の爲めにヘンリーが戴冠は漸くその目的を達しグレゴリは退きぬ。

此の歴史事實は羅馬の新帝國に對して宗教的專擅が如何に甚しかりしかを察知せしむるものなり。ヘンリーは其の後法王に對して飽くまで反對の態度をとり、佛蘭西(France)英吉利(England)及び丁抹(Denmark)の法王に檄を通じて法王の揚言を否認せしめ、大軍を其の下に召集せんことを公言したり。尙かれが在位五十年間は擾亂やむの時なかりしもヘンリーの死と共に遂にその終りを告げぬ。

西部歐洲方面にかくの如き争ひのありし際、エルサレム(Jerusalem)に關して十

第二十字軍

十字軍の發端は開かれぬ。十字軍 (Crusades) の起源はモハメット教徒 (Mohammedans) がパレスチン (Palestine) を占領せしによるものなり。歐羅巴の巡禮者 (Pilgrims) は孰れも聖地に對して燃ゆるが如き信仰の熱情を有せり。然るにモハメッド教徒 (Mohammedans) は單にこの聖地を占領し居たりしのみならず尙巡禮者を虐殺してやまず。尙それのみならず、寺院は潰され久しく尊敬を受け居たる教長 (Patriarchs) は牢屋に押し込められぬ。

聖地の方面かくの如き状態なりしに引きかへ、歐洲方面に於いてはビザンチン (Pisa) アマルフィ (Amalfi) ジェノヴァ (Genoa) 及び其の他の繁盛なる伊太利諸港より來たれる基督教徒、商人は漸く其の身を以つて免るゝことが即ち何よりの幸福と考へられたる程なりき。凶報は歐洲に傳へられて而して遠征隊は歐洲より派遣せられぬ。されどモハメッド教徒 (Mohammedans) の爲めにいたく敗られたること幾度なるかを知らず。世に之を十字軍即ちクルセード (Crusades) と云ふ蓋し十字軍 (Crusades) とは十字架 (Cross) の印をは遠征隊の銘々がすべて携帯して徽章となし居たりし故かく云ふなり。

モハメッド教徒

ピーター

第一回十字軍の使徒はピーター、ジ、ハーミッド (Peter the Hermit) なり。法王グレゴリ七世 (Pope Gregory VII) はその武装せる遠征隊を派遣してモハメッドの執政者を罰し其の國土を占領し、且つその住民をしてすべて基督教化し即ち、かれ等をすべて基督教國民となし化せんとの企計を有し居たり。グレゴリ七世の後ツイクトール三世 (Victor III) ウルバン二世 (Urban II) の如きも亦グレゴリと全然同じ希望を有し居たり。されど茲に最も必要なるは一般巡禮者の指揮者たるべきものを得ると云へることにしてその指揮者は歐洲基督教徒の信仰心を充分に鼓吹し得るものならざる可からず。而して現にその人はあらはれたり。ピーター、ジ、ハーミット (Peter the Hermit) は即ちこれなり。

ピーターは素とボローン (Boulogne) の町に一兵卒たりしものなるが、其の後身を軍隊より轉じ脱してパレスチン (Palestine) へ巡禮旅行を行ひたり。その旅行に於いてかれは數多の巡禮者が蒙むる悲惨の状態を目撃せり。かれは歐洲より來たれる同地の基督教徒を刺戟して其の勝利を得せしめんとて大いに信徒を激昂せしめ且つ尙本國より軍隊を得んがため彼れは歸國せしほとなりき。

當時東羅馬の帝王は未だ基督教徒の爲めに何等の救助をもなすこと能はざりしかば、ピーター(Peter)は孤城落日なるエルサレムの教長シメオン(Simeon, Patriarch of Jerusalem)に向つて次の如きことを云へり。

『西羅馬の國民は汝が味方となりて大いに武を勵まん』

と。やがて此のピーターの言は事實となりて現はるゝに至れり。

ピーターは乃ち歐洲に歸れり。而して獨逸地方の諸國を巡歴しモスレム(Moslem)の信仰に反對して極度の怒氣を吐き専ら住民の宗教的感情に訴へて極力之を激昂せしめんことにつとめたり。

抑もピーターが出演のいでたちは頗る奇異なるものあり。かれは軀幹矮少宛かも一寸坊の如く丈け低く、頭には帽子をいたゞかず、靴を穿たず、かれが行く常に必ず驢馬を用ひその中央亞細亞旅行の如きも單に驢馬のみによりたりと云ふ。而してかれが説くところ、訴ふるところ一として成らざるはなかりき。

その説をきくものすべて皆ピーターを以て實に聖地に向ふ神聖軍の代表者なりとまで呼びて之をあがめ尊ぶべり。紀元一〇九五年第一回の十字軍の組織

十字軍の表裡

せられたる如き一つに全く此のピータージハーミット(Peter the Hermit)の力によるものなりとす。

今世界歴史の上より見るも此の十字軍が運命の消長は史上最も著しく且つ最も美しき部分をなせるものなり。吾人は此の遠征隊に於いて光りの面と暗黒面との二方面を見出すものなり。ピータージハーミット(Peter the Hermit)及びウォルタージペンネス(Walter the Penniless)の二人は實に此の神聖軍の編成者にして多くの軍隊指揮官はかれ等が旗の下に集まり來たれり。全歐洲民族は今や聖地エルサレム(Jerusalem)の墓所に跪く可く、基督教徒の爲めに满腔の同情を以つて熱中せり。又そのかつて基督が降誕せし國を恢復して之を得んが爲めにとて百方力を振ひ居れり。その胸中實に察すべきものあり。

かくて六個の異なる軍隊は處々より集まり來たり以つて第一十字軍はいつしか編成せられぬ。その兵數六十萬に達せしが之が指揮者の任にあたりしものを擧ぐれば次ぎの五人なりとなす。

一ゴッドフロー(Godfrey of Bouillon)

指揮者

- 二、ロベール・ジダンノート (Hugh the Great)
- 三、タンクレッド (Tancred)
- 四、レイモンド (Raymond of Toulouse)
- 五、ロバート (Robert of Normandy)

即ちこれなり。第一十字軍は紀元一〇九六年に始まり、其の後二年を出でずしてかれ等はゼルサレムの町をば首尾よくも占領することを得てゴッドフレイ (Godfrey of Bouillon) はその聖地の王となることを得たり。

次ぎの第二十字軍は第一回の時のそれよりも更に一層の其の規模も大にして又花々しきものありたり。これに就いては全軍散々に大敗し歐洲に歸國せし歴史あり。されどこは少しくのちの時代に属することなるを以つてこゝには省くことゝなしぬ。

第十二章 第十二世紀に於ける基督教

第十一世紀に於いて激烈を極め居たる法王権と王権との争ひは十二世紀に

羅馬の王権と法王権

入りても尙繼續せられたりき。十二世紀に王権派に現はれたるものはヘンリー五世 (Henry V) なりしとす。かれが羅馬に於ける戴冠は紀元一一一一年なりしが其の戴冠に至る前種々の争闘戦争は羅馬人と獨逸人との間に激烈に行はれたり。而して法王及び王のカーヂナルは種々の束縛を受けて牢屋に投せられぬ僧正、僧侶などの法王派に属するもの口を極めて、法王パシヤル二世 (Paschal II) にすゝめて其の束縛を脱せしめ、帝王ヘンリーを呪咀せんことに一致せり。

ヘンリーは是に於いてアルプスの峻嶺を横きりマチルダ (Matilda) の地面を無暗みに唯押領せり。ヘンリーはかくの如き手段を取りしも世の衆望は法王側に歸しウイenna (Vienna) の大僧正グイ (Guy) が紀元一一一九年カリクツス二世 (Calixtus) として法王となりしとき、の如き法王の威信名望頗る揚がりたるものあり。新法王カリクツスはヘンリーをして充分自己の意志に服従せしむること能はざるを見、ライムス (Rheims) の宗教會議に於いていたくヘンリーの暴虐を非難し且つ其の部下をして離らしめたり。マイヤンス (Mayence) の大僧正アダルト (Adalbert) の如きはヘンリーに對して軍隊を起し自ら其の指揮の位

置に立ちぬ。是に於いて暗澹たる風雲は伊太利の空を蔽へり。
此の時局問題に始めより關係を有せざる佛蘭西(France)は茲に仲裁者の位置に立ちて天下の平和の爲めに大いにつくすところありたり。仲裁は先づ次ぎの二人によりて唱へられたり。

一、イヴォ(Ivo)……カルタールの僧正(Bishop of Chartres)

二、ゴッドフレイ(Godfrey)……ヴェンドームの僧侶(Abbot of Vendome)

即ちこれなり。帝王派及び法王派の外交は談判に談判を重ねて久しきにわた
りしが結局調定文(Concordat)は紀元一一二二年ウォームス(Worms)の町の近在一
牧場のうちにて大群集の前に朗讀せられぬ。その明文は兩派の主張條件を共
に譲與せしめたるものなりしが、これによりて、今後僧正の選定は帝王又はその
名代の前に於いて穩順に行はるべきこととなり。又帝王はその前代以來法王
領より奪ひ取りし地面をば再び法王に戻すべきこと及び法王の選定に關して
以後帝王より制肘することある可からざることとを規定し且つ法王側に於いて
は先づ僧正の選定は帝王の前にてなさるべきを認むること、且つ僧正は普通の

ウォームスの
會

ラテランの宗
教會議

封建的義務を有すべきこと又帝王に對して僧正は服心の臣下たることの以上
諸件を條件としたる調定文なり。

此の調定文が大體に於いて基督教側に利益あるものなることは云ふまでも
なし。而して帝王は大局の上に於いて法王の利權以上に出づることなし。而
して此の調定はいよいよ紀元一一二三年ラテラン(Latran)の宗教總會議に於い
て確認せられたり。紀元一一二五年ヘンリー遂に死し、アダルバート(Adalbert)
の應援によりてサクソニーの選帝候ローテル二世(Lothar II)選らばるゝに至り
茲に愈法王側の位置は益強固になれり。

後ローテア二世(Lothar II)はラテランの教會にてインノセント二世(Innocent
II)の爲めに王冠(Imperial Crown)を戴かされぬ。而して紀元一一三九年再びラテ
ランの宗教總會は開かれ千餘の僧正之に集まれり。此の總會議にて僧侶牧師
は法王の服心のものたるべきと、とはなれり。

ヘンリーと法王との間に久しく結ばれて解けざりし争鬭は端なくも伊太利
の天地に一新勢力の蟠るものあるを見るに至りぬ。而してそれが影響する範

伊太利の勃興

國は頗るあなどる可からざるものなるに似たり。法王は口を極めて有力なる人志に訴へて基督敎國全體の危期を醒覺せしめんとにつとめ、之に加ふるに伊太利半島の諸地方には羅馬より別に獨立せんとするの熱情侮る可からざるもの亦少なしとせず。氣運は漸次熟し熟して殊に伊太利の諸市に於いてはその様子頗る穩かならざるものありたり。教會の羈絆を脱して自ら立たんとする民あり。又其の束縛を免れんとて互に計劃をこらする都市の團體あり。教會牧師が單に羅馬に於いてのみならず、又伊太利に於いて其の大いなる權威を張らんとすればする程、反つて益世の排斥を招きて、教會を呪ふの聲は愈高まれり。然れども此の時代の聲がその愈具體的の行動として現はるゝに至る迄には尙多少の時日を要しぬ。當時固とより幾千の伊太利人は法王僧侶の特權を削りとりかれ等をしてその元始的の貧境に陥らしめんとし、僧侶の徒の如きは清貧に安んじて單に精神的生活を以つて満足す可きものなりとまで極言せり。かゝる極端論者のうちにありて當時最も代表的なるものをブレンシア(Brescia)のアーノールド(Arnold)となす、アーノールド(Arnold)は十一世紀の末葉伊太利の地

アーノールド

に生れ、その學校教育を終へたる後、かれは佛蘭西の都巴里に旅行しぬ。こゝにアーノールドは親しくアベラール(Abelard)の薰陶を受け、深くその感化を蒙りたり。かれが天才としての雄辯を指揮者たるの技倆とは大いに練磨せられて故國伊太利に歸れり。

アーノールドは故國に歸りて陰に教會の專横を罵倒し、陽には法王の無法なる要求を攻撃せり。かれは法王の要求を非難せしも神學上の問題に入ることは敢てせざりき。然れども牧師僧侶の世界的生涯に對しては因襲の久しき到底抜く能はざるその敵意を公言したり。アーノールドは僧侶の財産專有を否認して僧侶の生活は人民の自由贈惠物によりて以つて充分なりとのことの見を吐けり。當時の弊風を看破してかれが曝露せしその至言はまた、く間に天下の志士をして其の旗旂の下に叫合することを得たり。そのうちにはあまたの貴族あり、學者あり。皆以つてアーノールドを信頼して之を指揮官に仰げり。然れどもアーノールドの此の沈痛なる運動は羅馬の當路者が注意を引き、驚愕を喫せしめたり。

紀元一一三九年アーノールドの運動企劃は法王インノセント二世 (Innocent II) の爲めに強き反抗を受け遂に伊太利の地より追放せらるゝの身とはなりぬ。アーノールドは遁れて佛蘭西に至り更に又瑞西 (Switzerland) に走りぬ。然れどもかれは到るところに當時の宗教を改革す可き必要を論じ且つ説教して、つまり教會を舊に復して古への純朴 (Original Simplicity) を再現せしめざる可からずと主張してやまざりき。

アーノールドの歸國

アーノールドは羅馬に一大事業を完成せり。天下の大勢はかれの將來に向つて幸運を兆せり。かれが嘗つて唱へおきたる必然的改革はかれが佛蘭西、瑞西に在りし間に於いて漸次其の力を増加し來りぬ。今や人民はアーノールドに賛同して法王 (Pope) に對して謀反を斷行したり。

かくと見るよりアーノールドは伊太利に歸國し羅馬に入り自ら軍の總大將となつて之を指揮せり。單に羅馬の宗教的指揮官たりしのみならず、かれは又或る意味に於いては確に政治的指揮者なり。實にかれはその後四世紀を経てゼチツア (Zuingli) に現れたるカルヅイン (Calvin) が政治的並びに宗教上の指揮者

たりし係にさも似たり。かれが能辯は懸河の流るゝが如くその説くところ眞に又肯啓にあたる。されば熱情を以つてあまたの群勢はかれが周圍にあつまり來たる又故ありと云ふ可し。

かくてアーノールドは其の自己の立ち場が宗教問題に關係せることを忘れていつしか古代羅馬の偉觀を思ひ出で、今やかれは羅馬に對する政治的改革者とはなりぬ。而してかれは曰はく、

『羅馬は法王と帝王の兩者が羈伴を脱して、

元老院 (Senate) と人民とによつて支配せられざる可からず』

との言をなすに至れり。かくて元老は舊に復し市民は法王の政治に謀反し、法王を排斥して元老院を設立し、寄贈の收入を以つて満足する法王を認むるの法律を通過せしが如き、其の他獨逸の帝王を伊太利に迎へてチヘル (Tiber) の河畔に古代の帝政時代を復活せしめたるが如き、皆その始めは此のアーノールドの精神によれるものなり。

羅馬攻撃の軍には又ルシウス二世 (Lucius II) の指揮せるものあり。羅馬をか

こむこと久しきにわたりも中途ルシウスは敵の爲めに殺されユーゼニウス三世(Eugenius III)あとを次ぐ。されどユーゼニウスは佛蘭西に走り一時ベルナード(Bernard of Clairvaux)の下に據りしがノールマン(Normans)の王ロージヤール(Roger)の爲めに羅馬に呼びもどされたり。時にアーノールドの聲望は舊の如く羅馬の市民は多くかれに信頼するところありたり。

時に英人にして身を僧門に入れ一時アルバノー(Albano)の僧正たりしが後ユーゼニウス三世の死して紀元一一五四年法王となりしハドリアン五世(Hadrian V)なるものあり。此のハドリアンはアーノールドの改革に對して宛かも反對の方法を取りしものに似たり。かれは羅馬に於いてすべての公會禮拜を禁止せり。

かくて法王はやゝその氣運にむかへり。而してアーノールドは羅馬より再度逃亡を企てざるを得ざるに至れり。獨逸帝王フレデリック・バーバロサ(Frederic Barbarossa)はかれを囚へて之を羅馬の敵手に引渡せり。素とより何等の慈悲はアーノールドの眼に示されざりき。のみならずかれが昔日の活舞臺たり

ハドリアン四世

し羅馬の町に於いてかれは紀元一一五五年遂に斷頭臺の露と化したりぬ。遺屍は焼かれ灰はテベルの河水に放擲せられたり。

顧みるにアーノールドが經歷中の後半期はかれがクレイボー(Claivaux)のベルナード(Bernard)を敵として相争ひし歴史なり。ベルナードはアーノールドに對して單に宗教的教義に反對せしのみならず又政治的問題に關しても強いて反對の行動をとりたり。實にベルナードは法王にとりて無二の忠言者たり。殊にカソリック(Catholic)派に對しては餘程の重きをなせり。爲めに羅馬に於けるアーノールドの功蹟は反つてベルナードの影響によりて蔽はれたるかの觀あるに似たり。

アーノールドの歴史は悲惨の最後を以つて終りたり。然れども吾人は更らに眼を放つて彼れに就いて學ぶべき點を觀察せざる可からず。羅馬に於いて法王權に對する一般國民の信用を薄からしめたるものは全くかれの力に依らずんばある可からず。又彼れが生涯の活動は吾人をして次きの如きことを察せしむるものなり。即ち假令一個人の力にしても至誠をこめてあたる時は法

アーノールドの影響

王の権力さへ一時たりとも抑制することを能ふべきこと。又羅馬に於いて政治上一新生命を開き得ること。及び自己の確心を應援し得べき國民を誘致し得ることの三要點はたしかにかれアーノールドによりて始めて證明せられたりと云ふべし。

アーノールドの徳望と人格についてはかれが不倶戴天の敵にてすら一つの缺點をだも見出し能はざりしと云ふ實にかれが生涯の清けさはその説きし福音(Gospel)の美しさとよくも完全に調和し居たり。アーノールドの人格はかれが死に就きし以後とこしなへにみとめられぬ。後世の凡ての改革事業に於いて例へばかの獨逸の宗教改革(Reformation of Germany)の如きその他諸國の宗教改革に於いても此のブレンシアのアーノールド(Arnold of Brescia)なる名は單にその名を呼ぶのみにても頗る有力なる刺戟となりたり。さればすべて舊來の羈絆を打破せんとするの精神は全く此の名號の内に深く含蓄され居たるが如く聯想せらるゝに至りたり。最近に於いても新伊太利プロテスタント教(Protestantism of New Italy)が其國民の精神界を支配せんとするに當りてもその名稱の發音が無

ベルナード第
二十十字軍

限の愉快をその信徒に感せしめたりと云ふ亦之と同理の現象にあらざるなきか。

十二世紀に於ける基督教史は以上伊太利の羅馬に於ける謀反の事實の外に尙又第二十十字軍のことを述べざる可からず。

第二十十字軍紀元一一四四——一一四八年はベルナード(Bernard)によりて其の幕を開かる。ベルナードは遠征隊の慘狀を説き歐洲諸國の帝王をして自らその兵に將たらしめたり。即ち佛蘭西のルイ七世(Louis VII)の如き又獨逸のコンラッド三世(Conrad III)の如き親しく百二十萬の兵を將ひてサラセン人に向つて軍をすゝむ。その目的の主なるものはダマスカス(Damascus)の地を降してゼルサレム(Jerusalem)の王國の應援國たらしめんとするにありたり。ベルナードは始めよりかの第一回の時に於けるピーターの如く自ら好んで軍隊に參與することは固辭したり而して軍隊は戦地に達しぬ。然れどもその大部分は小亞細亞の地に於いて猶太人の爲めに虐殺を蒙りたり。全軍擧げて敗北。幸うじて僅かにその一部分のみ歐洲に北げ歸ることを得たり。されば始めの企劃な

るダマスカス(Damascus)も遂に之を陥落せしむることを得ざりき。パレスチンに於けるクリスト教徒之をきいて益憤慨に堪へざりしもさりとして亦如何ともする能はざりき。

紀元一一八七年埃及及びシリア(Syria)の王たるザラシン(Saladin)はデベリアス(Tiberias)の大戦役に於てグイ(Guy of Lusignan)を囚虜とし茲にエルサレム(Jerusalem)の町はかれが手に陥落しぬ。此の報歐洲に傳はるやウルバン三世(Urban III)の死は早められたり又聖地エルサレム及び其の國を救助せんとするの精神は反つて鼓吹せられて更らに又遠征隊は派遣せられんとするに至れり。蓋しウルバン三世の後継者は聖地の恢復に熱心にして爲めに歐洲全土は直ちに第三回の軍を準備せり。

第三回十字軍は紀元一一九〇年より一一九二年にわたる。而して之が軍隊を組織せし帝王は次ぎの諸帝なり。即ち、

- 一 佛蘭西……………フィリップ二世(Philip II)
- 二 英吉利……………リチャード一世(Richard I)

第三十字軍

三 獨逸……………フレデリック一世(Frederic I)

即ちこれなり。此の第三十字軍は戦地に至りてエーカー(Acre)の地を占領したり。されどこれ亦大なる成果をおさめず。内は諸將相互の間に軋轢たへず且つ悪疫の蔓延之に加はり遂に又失敗を以て終りぬ。

紀元一一九二年英王リチャード一世(Richard I)はサラジン(Saladin)と會して平和の條約を結びぬ。この條約にて以後基督教徒の聖地に巡禮し來たるものは迫害と課税を加へざることを定めたり。これを第三十字軍の成果となす。されどエルサレムは依然モハメッド教徒の掌中にありて残り。

次に學術上の方面より十二世紀を見るとこれ亦頗る見る可き活動あり。當時吾人の最も注意す可き現象は學生の協會としてユニヴァシテイ(Universities)即ち大學の設立せられしこと即ちこれなり。その最も著大なるものをパリ(Paris) オックスフォード(Oxford)及びケンブリッジ(Cambridge)の大學なりとす。

パリ(Paris)大學はシャンボアのウィリアム(William of Champanx)に其の起源を有す。

大學の建立

パリ

オクスフォード

ケンブリッジ

しオクスフォード大學は十二世紀の中葉の創立にかゝる前者は神學の一科を以つて其の最初の特徴となせしに反し後者は法律を専門とせしものなり。されど孰れも素と大學なるものは決してかの教會などには關係なく又國家とも何等の縁故なく全く獨立的に創立せられたるものなることは注意す可き點なりとす。ケンブリッジ(Cambridge)大學は次ぎの世紀の初めに創立せられたるもの學術の中心としてその名高し、次ぎにロンバルド(Lombard)方面にはボローニャ(Bologna)の大學あり法律専門を以つて聞こゆ。而して當時は尙未だ特に宗教大學とはあらざりしもボローニャの僧グライアン(Grignon)は大いに見るとこゝろあり教會の法律(Church Law)その他教義の法律即ち Canon Law などの特殊の研究を成立せしめ諸大學に於いて其の教授を見るに至れり。以上の外向サルノ(Salerno)に於いては醫學専門の大學を見るに至りたり。

要するに當時の大學は勿論一科特有の名はあれども其の實内部は分れて次の四つとなれり。

一 神學科(Faculty of Theology)

二 法律科(Faculty of Law)

三 醫科(Faculty of Medicine)

四 哲學科(Faculty of Philosophy)

此の分けかたは最初巴里の大學に行はれしものなり。其後世の進歩につれ又學生の増加するにつれて限りなく此の科(Faculty)の數は分業的になれり。その甚しきものに至りては一萬乃至二萬に小分せられたる大學もあり。學術の分業的進歩又驚く可し。

第十三章 第十三世紀に於ける基督教

インノセント三世

十三世紀の初めに於いて基督教史上最も著明なる現象はインノセント三世(Innocent III)がその法王權を絶頂の度まで高めしことこれなり。

紀元一二〇八年フィリップ王の暗殺せらるるや、オノー、ジ、サキソン (Otho the Saxon) (英王 Richard) の甥はフィリップの女と婚を通じて茲に平和を得たり。然れどもオノー (Otho) が王冠を戴くを得たるは全くインノセント三世(Innocent

III) の勞たらずんばあらず。即ちオソーが戴冠式は宗教的儀式により、インノセントによりて始めて始めて帝位につくことを得たるものなり。然るに其の後間もなくオソーはその恩を忘れ法王領をさへ押領せんとしたり。インノセント其の暴を怒り帝を斥けて其の臣を去らしめぬ。獨逸の諸侯等インノセントに賛同してホーヘンスタウヘン家のフンデリック二世 (Hohenstaufen Frederic II) を以つてそのあとに選定したり。オソー武を以つて反抗せしも遂に利あらず。フンデリックはインノセント法王を後見として茲に帝位につきぬ。時に帝は弱年漸く十六歳の青年なりき。

インノセント (Innocent) は以上二帝の位を左右したりしのみならず尙英佛兩國の主権者をして亦かれが意の如くに服従せしむることを得たり。即ち佛蘭西に於いてはフィリップ二世 (Philip II) を取り入れ英吉利に於いてはステラフェン、ラングトン (Stephen Langton) を選定せしことこれなり。然るに英國に於いてはジョーン (John) の反抗復讐少なからざりしがこれも結局平定せられたり。第四十字軍 (John) 及びフィリップ (Philip) は第四十字軍に於いて現はる。第四

第四十字軍

十字軍はジョーンの騎士によりてその序幕を開かれしも末は又失敗に終りぬ。インノセント (Innocent) は英國に對して佛蘭西のフィリップを招き、ソアソン (Soissons) の佛蘭西會議に於いて十字軍の遠征隊は可決せられたり。かくて紀元一二一二年第四十字軍は編成せられ三萬有餘の健兒の隊は牧者ステラフェン (Stephen of Vendôme) の下に指揮せられマルセール (Marseille) の港を發してパレスチナ (Palestine) にと向ひたり。途中その大部は破船の災にあひ、海底の藻と化せしもの多し。されど此の難を辛らくも免れたるものは埃及の海岸に打ちあげられ茲に遂に奴隸として賣買せらるゝ身とはなりぬ。かくて第四十字軍は全く効を奏せずしてやみたり。

インノセントが十字軍企劃は失敗に終りぬ。されどかれはこれより先き英國及びアイルランド (Ireland) 方面に於いて既に權勢を得、大僧正の任命權を握らんとす帝王及び僧正などいたく之に反抗せしも遂に之を斷行しぬ。又インノセントは羅馬と英國との關係を附けん爲め、英國及びアイルランドをして羅馬法王の直轄地として之に隸屬せしめ且つ年々一千万マルクの貢を法王に献納す

大憲章

可きことを以てせり。

法王インノセントよりかくの如き屈辱を蒙りたるジョン (John) は自由の憲章を標榜して立ちたる貴族の反抗を受けたり。紀元一二一五年マグナ・カルタ (Magna Charta) 大憲章の制定即ちこれなり。その大憲章の第一條に於いて教會の権能の侵害せられたるを大いに憤慨して強硬なる規定を立てたり。由來英國の教會は自由の歴史を有し羅馬の制肘を屑しとせず、然るに國民の自由と教會の特権とは、ハイデブランド派 (Hildebrand School) の法王の爲めに輕々視せらるゝに至りぬ。而して當時インノセント (Innocent) はジョン王の味方となり王の爲めに先づ大憲章の撤回に盡瘁したり。王に反抗して罵詈謗至らざるなきものは之を總べて破門しぬ。

かくて英國に盡瘁したるインノセントは尙スペイン (Spain) の基督教信徒を鼓吹して又もや十字軍を起さしめブルガリア (Bulgaria) 及びバルカン (Balkan) の諸王をして又之に應せしめぬ。インノセントの影響は尙ハンガリ (Hungary) アルメニア (Armenia) に及び居たり。

インノセントの活動

インノセント三世の晩年に於ける最後の出來事は第四回のラテラン會議 (Lateran Council) の開かれたることこれなり。時に紀元一二一五年。東方教長 (Oriental Patriarchates) の主なるものは此の宗教會議に列席しかの基督教を斥けて異端を持するレイモンド六世 (Raymond VI) を廢して適流せんことを議しぬ。インノセント自らその議を舛して會議は之に何等の抗議なくして通過せしめぬ。尙此の會議に於いてすべて基督教信徒は今後少なくとも毎年一度懺悔を行ふ可きこと及びイースターの祭りに信者同志互の交通をなすべきことを規定しぬ。

インノセント三世の時代の法王權はかくの如く振ひ居たるも、後グレゴリ九世 (Gregory IX) の如きはあまりに專横的にして、フレデリックを屬言し再度まで帝を破門し。新帝の擁立を要求したり。王軍法王領に侵入し、グレゴリは臨時宗教會議を開くに至り。紀元一二四一年フレデリックは外國僧正をあまた叫合して之にあたるに至れり。されど其の後いくばくもなくして、グレゴリは死しインノセント四世 (Innocent IV) そのあとを繼ぎぬ。

インノセント新法王は事態に迫まれ紀元一二四三年羅馬より遁亡するの止むなきに至れり。されど佛蘭西アラゴン(Aragon)及び英國の諸國は新法王の來たるを好まざりき。當時尙未だ佛領たらざりしリオン(Lyon)の町にインノセントは僅かに迎へられ茲に紀元一二四五年宗教會議を開きたり。インノセントはその會場に於いて『教會の五大痛傷』なる題の下に次ぎの件々を辯説せり。即ち、

- 一、露西亞及びポーランド(Poland)に於ける韃靼人(Tartar)の侵害
- 二、希臘教會の分裂
- 三、ロンバルデー(Lombardy)の異教徒
- 四、チャリスマミアン(Charismians)のエルサレム破壊
- 五、帝王の虐殺

かくてインノセント四世はかれの權勢を以つてフレデリックを破門し斥けぬ。帝亦之に反抗して教職を管理し巡禮者を虐殺して以て復讐せり。後紀元一二五〇年フレデリックの死に至るまで殘酷なる戦争はその間絶へまなく伊

太利の野を荒らし居たり。而してインノセント法王はフレデリックの後繼者コンラッド(Conrad)に對して尙角闘をつゞけ居たりしも紀元一二五四年法王の死と共に一段落を告げて茲に平和の序幕は開られたり。

その後紀元一二七四年リオン(Lyon)の宗教會議あり。同しく一二七六年にはグレコリの死あり。東方基督教國の威勢頓に衰へたり。アンドロニコス(Andronicus)は蔑視せられ法王の名は希臘教職のうちより除き去られんとせり。時に法王たりしものはかのセレスチン五世(Celestine V)なるがかれは隱士(Hermit)より身を起こしたるものとして名あり。されどいくばくもなくして傲慢なるかの大僧正ゲタニ(Cardinal Gaetani)即ちボニフェース八世(Boniface VIII)の爲めに職を退く可く説きすゝめられぬ。

紀元一二九七年英國並びに佛蘭西はボニフェースを得て法王の威勢頓に揚がり一三〇〇年ジュビレー(Jubilee)祭の頃には莫大の財寶の集め得て法王の權力亦頗る擴張せられたり。此の結果は單に法王の側のみに止まらずしてボニフェース(Boniface)の權威あたる可からず、今や自らシーザー(Caesar)の稱號を以て

ボニフェース
とフイリッブ

公言し身に帝王の服装をまよふに至れり。

ポニフェースはスコットランド(Scotland)が羅馬法王直轄地たらんことを主張し又フィリップ四世と法王僧正などのことについて大いに議論を戦はせり。フィリップは羅馬法王の權勢を以つて破壊剝奪再建を一手のうちに掌するものなりとなし而して敢へて佛蘭西僧正の羅馬會議に列席するを禁じ又宗教會議場(Ausonia Hill)を焼き拂へり。アルバート(Albert)等いたく之を罵倒しぬ。されどフィリップは伊太利に於けるポニフェースの反對黨の應援により佛蘭西の僧正を誹りて法王の不徳篡奪殘忍の罪狀をかぞへたり。

ポニフェースは宗教大會議を開きてフィリップ攻撃を企てたり。されどポニフェースは妨げられアナニ(Anagni)に於けるかれが宮殿は王軍の爲めに反つて逆撃せられたり。時にポニフェースは八十六歳の老軀。幸ふじてアナニの民にたすけられ羅馬オルシニ(Ostia)の保護の下に身を置くこととなりぬ。而して紀元一三〇三年かれは憐れなる最後を遂げて此の世を終りたりとはかれの味方のものどもの言ひ傳ふるところなり。

基督教の發展

十三世紀に於ける基督教の争闘の歴史は大略以上の如し。次ぎには此の世紀の間に基督教の發展が如何に擴張されたりしかについて其の概要を述べし。

ルブルケイス

紀元一二四〇年歐羅巴に侵入せしタタール(Tatars)即ち韃靼人種の間に入りて布教せし宣教師あまたあり。かれ等は宣教師と云はんよりは寧しる顧問の如く又虛無僧の如く活部落のうちに入り交りて以つて各その成效をなせり。そのうち最も有名なるはルブルケイス(Rubriguis)なりとなす。かれは大汗國(Great Khan)に入りて布教に就事し又細かに其のタタールの風俗なども觀察して之を記録に残せり。汗國に於いて最も有名なるはかのクビライ汗(Kublai Khan)即ち元朝忽必烈汗なりとす。忽必烈汗は東方韃靼の征服者にして紀元一二八〇年より同じく一二九四年に至る間北京に覇をとなへ居たるものなるがかれは一基督教師を招聘しぬ。其の名をマルコ・ポロ(Marco Polo)と云ひ東洋史上有名なる外國人なり。然れどもマルコ・ポロは忽必烈に仕へ居たりと雖も唯國民を文化に導きし功あるもそれ以上に教理を鼓吹するなどのとはあらざりき。

マルコ・ポロ

又十三世紀に於いてはアルメニア(Armenia)の基督信者と法王との間に教義上の不和あり、紀元一二九二年羅馬は遂にアルメニアの王朝をしてその教會を調定せしめられたり。

プロシア

プロシア(Prussia)に於いてはテュートン族(Teutonic)が紀元一二三〇年以來神聖軍に就事せり。然れどもその騎士のあまりに酷薄なる爲め新宗教は信仰者を得ず、紀元一二八三年までその基礎を確立すること能はざりき。

露西亞は當時韃靼人の爲めに荒らされ居たりしもインノセント四世(Innocent IV)の爲めにその教理に接することを得て、ラテンの教會と相聯絡せんとするに至れり。然れども未だその實際上の結果を見ることは能はざりき。

レイモンド
ジュリー

次に阿非利加方面を見るに此の地方に於いてはマジョルカ(Majorca)の土人レイモンド、ジュリー(Raymond Jullie)の熱心なる布教によりて民を化することを得たり。ジュリーは老年に及んで基督信者となり紀元一三一四年信者として且つ王冠を戴きし人なり。ジュリーが名は又マジョルカに建てられたる福音傳道學校の名と共に久しく傳へられたり。

以上を以つて十三世紀に於ける基督教發展の大要となす。尙當時に於いては基督教教材の上に多少の發達を見ざるに非ざるも今茲には省略に従ふこととなせり。

第十四章 第十四世紀に於ける基督教

ボニフェース
とクレメント

十二世紀末葉の基督教の舞臺はボニフェース(Boniface)の活動舞臺なりき。されど法王權はかれの時よりやゝ減せし傾向あるが如し。かのベネデクト十一世(Benedict XI)の如きは佛王フィリップ四世に求めて和親仲直りを敢へてするの氣運に至れるが如き又其の次ぎの法王クレメント五世(Clement V)の如きフィリップ王の傀儡としてボルド(Bordeaux)の僧正より擧げられたり。クレメントは王の専恣に就いてはボニフェースの覆轍を踏まず反つて知つて知らざる風をよそおひ敢へて苦言を呈するが如きことあらざりき。先きに佛蘭西に對してなせしボニフェースの處置はすべて今やクレメント一派のものによりて掻き消され、フィリップ自身をば何等の罪業なきものとして公言せしめたり。

紀元一三一一年宗教大會議は維納(Vienna)に開かれたり。此の會議に於いて當時法王の威氣揚がらざるを以つて茲に教會改革(Church reform)の議事をなしぬ。その結果はさしたることをも生ぜざりしもメンド(Mende)の僧正ヅランヅス(Durandus)が勸議は稍注意するの價ありたり。即ちかれは教會の現狀を論じてその自覺的改革の必要を説き休職後三ヶ月を経たる僧正には選舉權を失はしむること。爾後十年毎に宗教大會議を開くこと等のことを議し而して一般僧侶には婚姻に關して東羅馬帝國のそれと同様の自由を認むること但しその不倫の所行あるものに對しては充分嚴重なる刑罰を加ふることを決定しぬ。紀元一三一四年フィリップ王死し次いで同年クレメント法王死しぬ。やがて新法王ジョーン二十二世(John XXII)はアヴニオン(Avignon)の地に現れたり。ジョーンは教會の改良を斷行し又巴里、トゥールーズ(Toulouse)オーリアンヌ(Orleans)の大學の刷新につとめたり。而してかれは異端猶太教徒に對して非常なる虐殺を行いたり。

法王ジョーンとルイ四世の争

かくの如く法王ジョーン二十二世獨りその權を専らにせる際王位は宛かも

争闘に繼ぐに争闘を以つてし爲めに、その間に反つて法王ジョーンをして獨逸内部及び伊太利内部の政治に嘴を容るゝの機を與ふることとなれり。否そのうちに法王は實に法王以上の權を有せんとするに至れり。而してかれは唯その王位を占むるの人を伺ひ其の争ひの成り行きをねらひ居たりき。かくて紀元一三二三年ムルドルン(Muldorf)の決議に於いてバヴァリア(Bavaria)のルイ四世(Louis)が埃太利の諸侯に打ち勝ちし時ジョーン(John)公言して曰はく天下の大勢已にきまされり事はわが掌中にありと而してジョーンはルイに命じて其の帝王權の實權を握ることを禁じたり。されどルイはジョーンの傲然たるに屑しとせず自ら宗教大會議を開きて之を訴へたり。法王乃ち怒てり之を囚へ破門しぬ。

ジョーン四世の權幕かくの如し。されどジョーンは前のポニフェースと同じくや、自己の權勢を過重視せし嫌ひなきに非ざるが如し。獨逸に於ける選舉侯僧正など多く反つてルイ四世の方に加擔し、ジョーンに向つては宣告文さへ發せしものありたり。當時尙又法王攻撃の論文演説あまた公けにせられ又

總べての教職は其の高位と下位との別なく教長も僧正も何等の差等なきものとして平等なりとの主義は大に力を入れられて主張せられぬ。而して例の宗教大會議は教會の最高會議となり、その開始召集は帝王の意志によりて左右せらるゝに至れり。つまり教會は帝王に隸屬し特別に其の法王らしきものを要せざるに至りたるが如し。これこの第十四紀に於いて最も注目すべき現象なりとす。

ニコラスとルイ四世は又セント、ピーターの大會議に於いていたくジョーンの處置を暴露しその法王たり得るの價值なきことを明言しぬ、かくてルイ側の勢力一時は非常なる有様なりしが、紀元一三二八年フランシスコ人ニコラス五世 (Nicholas V) の現はるゝに至り法王とルイとの關係は全く反對の現象を見るに至れりルイはジョーンの爲めに迫害せられんとするに至りぬ。ルイ王の恐怖一方ならず。百方其の赦宥を得んことにつとめしが紀元一三四六年遂に位を去るに決定し、ルクセンブルグ (Luxemburg) のチャールス (Charles) 其のあとを継ぎたり。チャールス四世即ちこれなり。帝の登位はクレメントの功によるものなり。され

ニコラスとルイ

ばクレメントは總べて撰擧權を自己の掌中に握り、新帝の執政に關涉せり。帝も又つとめてクレメントの意を受けて平和の統治を事としたり。然るに不思議にも紀元一三五六年一つの光威ある勅令は發布せられたり。世に Golden Bull と云ふ。蓋しこれによりて帝王選定の規定は定められ又その選定に關して法王は絶對に之に容喙する能はざることと定められぬ。

法王權不振

ジョーンは落ち、クレメント又侵害されたり。茲に法王權を恢復せんとして現はれたるはかのインノセント六世 (Innocent VI) なり。インノセントは紀元一三六八年「七十年の疑獄」 (Seventy years' Captivity) の進行を妨げ、又ボニファース (Boniface) の死以來法王權の完からざるを憤慨して大いにつとむるところありたり。かれの活動舞臺は羅馬にありたり。されど其の後かれはアヴィニオン (Avignon) の地に退き紀元一三七〇年回天の事業功を見ずして死しぬ。次いでグレゴリ十一世 (Gregory XI) 新法王として現れしもかれは疎腕なく法王領の侵害に對しても何等の功を奏するなく、末は煩悶にかき亂されて紀元一三七八年死したり。

ウルバン六世

グレゴリ十一世の死したる後は羅馬は非常なる擾亂を見るに至りたり。人民の輿論は云ふ、法王僧正の位置は最早や佛蘭西王の支配を蒙むる可きに非ずと。或るものは絶叫して曰はく、吾人は伊太利の地に覇を稱することを得べしとて、やがて、ネオポリタン(Neopolitan)の大僧正が選定を見るに至れり。かれは自分法王を以つて任じ、急激なる改革を欲し、其の處置意氣頗る傲然たるものあり。世にウルバン六世(Urban VI)と云ふはかれなり。

當時佛蘭西はクレメント(Clement)に味方しスコットランド(Scotland)亦かれを認めたり。スペイン(Spain)はベネディクト十三世(Benedict XIII)以來僧正ルナ(Luna)の爲めに羅馬系統の法王を拒ばめり。獨逸ボヘミア(Bohemia)ポーランド(Poland)その他伊太利のすべての地方は皆ウルバン六世(Urban VI)の正統を認めて佛蘭西の優柔について倦厭の情を表はせり。

かくて當時の歐洲諸國は眞の主權者としていかゞはしき暴王の爲めに支配せらるゝに至れり。今そのうち主なるものを列擧すれば次ぎの如し。

- 一 英國……………リチャード二世(Richard II)

歐洲諸王

- 二 佛蘭西……………チャールヌス六世(Charles VI)

- 三 獨逸……………ウエンチエル(Wenzel)

歐洲の政治界かくの如く亂れ居たる際宗教方面も亦一致を欠き、佛蘭西はアヴィニオン(Avignon)の法王とボニファース九世(Boniface IX)との間に反目あり。巴里の大學は新法王選定の動議を出し佛王及び教會之に賛同するの狀態なり。時に英國には教義上の大改革となさんとするもの現れたり、その人をウイクリフ(Wyclif)となす。

ウイクリフ(Wyclif)は第十四世紀の後半英王ジョン(John)が政策に反対したる有名なる學者なり。かれが宗教改革についての主張は宛かもかの第十六世紀に於けるルーテル(Luther)の宗教改革の時のそれに似たり。ウイクリフの見るところを以つてすれば法王なるものは最早や基督に代はれるの牧師にあらざるなり。宗教の點より云つて帝王が宗教的ならざることば明かなるが法王は尙それ以上沙汰の限りのものなりと信せらるゝに至れり。抑も宗教に關係せるものの眞の絶對價値は自ら過去の罪を悔ひ神に對して其の宥しを乞ふに

ウイクリフ

在り。されどその祈禱の如きはかれの見るところを以つてすれば心を捧げて良心よりなさざる可からず。さなくして捧ぐる祈禱は全く甲斐なきものなりとなすものなり。ウイクリフはかくの如き見解を有したり。されど此の十四世紀に於いて基督教改革の起りし直接原因は寧ろ他に在り。即ち虚無僧の徒 (Lollards) が貧民への施物を私し、富者の罪惡に諛り。或は教會の權利を侵害し、又改宗教の要求を侵害したるなど蓋しその主なる原因なりとす。

ウイクリフ (Wyclif) は即ちオクスフォード (Oxford) に於ける虚無僧が無謀に就いて大いに憤るところありたり。蓋し虚無僧等は強ひて其の子弟を屈服せしめんとせしも有爲の青年之に従はず、多くの學生又之に反対したり。ウイクリフ此れ等の青年學生の徒黨を得以つて虚無僧の徒にあたり。ウイクリフがかくの如く虚無僧に對して反撥を試みたるは全くそのウイクリフの社會的主義に反せるに基づけるものにして、彼れが社會保全の上に最も必要と認めたるものは財産の保安に在り。他人により財産權の侵害せられざるに在るなり。此の社會的主義が當時の社會一般より高尚視せられ此の主義を標榜する改革

ウイクリフ感
化

者ウイクリフはジョン・ガント (John of Gaunt) の如き教會反對派のもの爲めに頗る親密の度を加ふるに至れり。而して遂には同盟を結ぶに至れり。此の同盟及びかれが社會に對する言明は未だ以つて教會に於ける實際的變化を見るには至らざりき。然れども英國の内部に於いて又外部に於いてウイクリフ (Wyclif) が感化影響は頗る見るべきものを残せり。

ウイクリフが宗教上に於ける大功蹟の一つとして先づ擧ぐ可きは紀元一三八〇年より同じく八三年に至る間に聖書 (Scriptures) の英譯を普及することにとめたることこれなり。尙舊來の教義に就いても過去四百年間に於けるユークリスト (Eucharist) の俗習に對し誤まれる點を公言したり。ウイクリフは又形式上の禮拜堂その他虚禮にわたる建築に腐心することを非として専ら精神的方面に入り敬神の念を以つて基督の眞の存在を認めしめんことにとめたり。されどウイクリフが基督教の布教はかれの生存中に於いては上流社會の感情を害し農民の一揆を喚起し、果てはジョン・ボール (John Ball) の激烈なる會議を見るに至れり。オクスフォード (Oxford) はかれを排斥し大僧正コートナー

功蹟

(Courtenay) 又かれを罵倒せり。ランカスター(Lancaster) はかれを破門せんとまでしたり。されどウイクリフは依然として其の位置にありてかれが主張を固守せり。且つウルバン六世(Urban VI) 之が後援たりしもの如し。

要するにウイクリフが宗教改革に關する意見は紀元一三八二年より同じく八四年に至る間に公刊されし冊子によりて之を窺ふことを得べし。其の冊子の主なるものは次ぎの如し。

- 1 "On the Schism."
- 2 "Against the Pope's Crusade."
- 3 "The Trilogue."

即ちこれなり。殊に最後のものは教義に關する論文として最も重要なものなりとす。

第十六世紀の宗教改革の時と同じく、此の十四世紀のそれに於いても非常なる反對の運動起り來りて極力ウイクリフが改革を妨げたるものあり之をロラード(Lollards)と云ふ。ロラードとは當時ウイクリフの教理を継ぎしもの概稱

ロラードの徒

なるも尙更らに一層激烈に宗教改革を唱へ叫びて英國の社會は爲めに頗る混亂の模様とはなれり。ウイクリフなどが嘗て僧侶の所有を嫌ひ居たりし精神は此の時更らに盛に唱へられぬ。騎士及び貴族の一部分は僧侶と共に自己の地歩の危ふせられざるや否やと疑ひ居たり。又ウイクリフは嘗て社會の階級を打破せんとの新改革を有し居たるも之に反對する上流社會の團體あり。帝王の如きもその權勢の微弱なるが爲め上流社會の後援を頗る必要とせし觀ありたり。紀元一四〇〇年にはロラード(Lollard) 鎮定の布令は出でたり。折しもサー・ジョン・オールドカースル(Sir John Oldcastle) が宗教改革に加擔の運動は現はれたり。かくと見るよりヘンリ五世(Henry V) は以前の布令を更らに嚴重に改め以つて宗教の改革的運動を未發に防ぎたり。しかのみならずウイクリフ(Wiclif) のバイブルの如きは紀元一四〇八年僧正アルンデル(Archbishop Arundel) によりて嚴しく禁せられたり。尙一般の説教に於いても僧正より認められざる説教はすべて之を禁するに至れり。

かくの如くにしてウイクリフ(Wiclif) の宗教改革に關する企圖は非常なる妨

ホヒミア人の
運動

害を加へられたり。されどウイクリンが精神とその記録とは獨逸のプラーク大學(University of Prague)に傳はりぬ。而して茲にボヘミア人(Bohemia)の精神界を動かして頗る觀るべきものありたり。蓋しボヘミヤ、プラーク地方の宗徒は多くウイクリン(Viclif)と同じく宗教上の形式を脱破せんとするものなりしを以つてなり。ワルドハウゼムのコンラド(Conrad of Waldhausen)の如き又ミリン(Milita)の如きも口を極めて教會僧侶の悖德無謀を唱へたり。此れ等の徒は未だ宗教改革を斷行する迄に至らざりしも其の眞にボヘミアに於ける宗教改革者の先驅をなせしものはジョーン・フス(John Hus)(紀元一三六九年生)なりとす。

ジョーン・フス(John Hus)はプラーク大學(Prague University)に在學中かのウイクリンが著述を讀みて宗教の形式墨守の非をさと窮屈なる宗教典例を脱せんことにつとめ居たり。紀元一四〇二年フスは大學監(Rector of the University)となり又教會の牧師となり。殊に牧師としては過激なる宗教形式の反對者として自から打つて出でたり。されどかれは破門の規定を行ふことのみは殆んど何等の躊躇なく之を贊し居たり。此のジョーン・フス(John Hus)の經歷及びかれの

ボヘミアの宗教改革

神秘派の運動

後援者たるジェローム(Jerome)なるものとの二人は兎もかく今後の宗教史上注意すべき人物なるが如し。

獨逸方面に於いて尙注意すべき宗教上の現象は當時獨逸に神秘派の運動(Mystic movement)の現はれたること即ちこれなり。サクソニー(Saxony)に於けるヘンリ・エカルト(Henry Eckart)をその有名なるものとなす。エカルトはチオプラトン(Neo-Platonist)派に屬して法王に反對してこれを擁護せしものなり。されど此の派に於いても更らに最も有名なるものはドミニカン派(Dominican)の一人ジョーン・トラー(John Tauler)なりとす。Illuminated doctor と云へる綽名を有せり、トラーが説く神秘主義は基督教徒の生涯に宗教的神秘を結び付けたるものにして、紀元一三四八年の如き法王の令旨に反對してストラスブルグ(Strasbourg)の苦民に多大の福音を與へたることありたり。

トラーが派の説教福音傳道は其の後二世紀を経てルーテル(Luther)の非常に賞讃するところとなりたり、尙當時神秘主義にて知られたるものはヘルグのヘンリ(Henry von Berg)及び白耳義のルイス・ブレンツ(Ruysbroek)なりとす。次いで

ゲルソン(Gerson)は現はれてリュクスブレックの過激なる議論を調定し且つ神秘説(Quietist devotion)とスコラ派(Scholasticism)とを連合することにつとめたり。紀元一三九五年にはゲルソン(Gerson)は巴里の大審院長(Chancellor of Paris)となり其の後十年間は終始その位置にありて以つて法王分派(Papal Schism)に解釋を下さんことにこれつとめ居たり。かれが希望とするところは宗教大會議(General Councils)召集の権能を以つて教會に屬せしめ法王の承認を要せざることゝなすにありたり。畢竟するに必要の場合に於いて教會は座長の席に必しも座長そのものを要せずとの意を主張せり。此の主張はやがてコンスタンスの宗教會議(Council of Constance)に於いて事實行はるべきものとして批准せられたり。

リスマニアの改宗

基督教界かくの如き有様なりし際にも係らず從來未だ基督教化せざりし地方はその間漸次教化に沾ふに至れり。否歐洲國民の異教者にして基督教に改宗するの現象は蓋し此の十四世紀を以て最後の世紀となすも差支なき程なり。ポーランド(Poland)のヘドヴィグ女(Hedwig, Heilwig)がリスマニア(Lithuania)の王ジャゲロ(Jagello)に婚せし時の如きも其の條件としてジャゲロの領土をしてポー

ランドの地と聯合せしめ且つその住民をして洗禮せしむべきことを以つてせしが如き如何に基督教の重んぜられ居たりしかを知るに足る。時に紀元一三八二年なり。又ジャゲロは洗禮後にラヂスラウス(Ladislau)の名を冒し専ら福音傳道につとめて教化を事とし自ら各地を旅行してクリストの訓とモーゼスの十誡(Decalogue)を普及せりかくの如く銳意布教はつとめられたりと雖もしかも尙火の禮拜、蛇の禮拜はさすがに此ポーランド地方一體に十五世紀の末つかたまで行はれたりしものゝ如し。

土耳其

當時基督教が東方地方に於いて如何と云ふに先づ第一に擧ぐ可きは土耳其人の反對なり。かれ等はアンゴラ(Angora)の戦にチムール(Timur)にいたく打破られたれども基督教に對しては又強抗に反對し久しく續き來たりしかのビザンチン帝國(Byzantine Empire)に最後の大打撃を與へたるものゝ如し。

支那

更らに東洋方面を見るに蒙古帝國地方に於いては基督教はモハメッド教國(Mohammedanism)の爲めに少なからぬ排斥を蒙りしものゝ如し。紀元一三六九年支那に於いて蒙古の勃興はすべての外人を嫉妬的排斥することとなり又布教

を衰微せしむることとなれり。而してチムール(Timur)即ち鐵木真はモハメツト教イスラム(Islam)の經典を奉ずるに至れり。亞細亞東方に於いてキリストリテア教發展の萌芽ニシテ現れたり。

要するに十四世紀に於ける宗教の氣運は漸く暗澹として改革の聲諸方に起り基督教内部に於いて、又學者派に於いて之を唱ふるもの多きを致せり。今本章を終るにのぞみ改革を主張せし當時の人々の名を左にかゝるべし。

- 1 ゲルソン(Gerson)
- 2 デリー(D'Ailly)
- 3 クレマンツのニコラス(Nicholas of Clemanges)
- 4 ダンテ(Dante)
- 5 ペトラールカ(Petrarch)
- 6 ヘルジエール(Vergiers)
- 7 ボカチオ(Boccaccio)
- 8 ピエール(Piers)

- 9 チョーサ(Chaucer)
- 10 ウイクリフ(Wyclif)
- 11 フス(Hus)

これ等の人々は或は布教に於いて、或は詩歌に於いて、或は論文に於いて種々の方法によりて孰れも改革に就いての希望を洩らせるものなり。

第十五章 第十五世紀に於ける基督教の現象

十五世紀に入りて先づ云ふ可きは法王グレゴリ十二世(Gregory XII)とベネチクト十三世(Benedict XIII)との間の争ひなり。兩黨はフロレンス(Florence)ボロニア(Bologna)パリス(Paris)等の諸大學の後援をたのみ宗教會議の召集を布告せり。

紀元一四〇九年二十二人の大僧正を始めとし數多の僧正、牧師、監其の他王黨のものなどすべてピザの伽藍(Pisa Cathedral)に會し其の議長に英國はサリスベリ(Salisbury)の僧正ハラルト(Hallam)を擁立したり。かくて此の會議は教會の

ピザの會議

無謀を打ち消さんことにつとめ又法王をして軽々しくその恩恵を賣りつくることを否認したり。法王も亦自ら會に臨席することを拒み別にベチダクトはパーピナン(Perpignan)にグレゴリはシビデル(Civitate)に互に相反目して宗教會議を召集せり。されどその結果は徒らに虚欺を増長せしめ分裂を盛ならしむるのみにして毫も人士の同情を得るものはなかりき。

かくて伊太利方面に於いては新法王ジョン十三世(John XIII)立ちぬ。而して其の無謀は殆んど言語に絶せり。かれが經歷亦言ふに忍びざるものあり。チーブルの王ラヂスラウス(Ladislans)の如きは法王の兄弟をふたり迄その海賊の名を以つて虐殺したることあり。かれは又グレゴリ十二世(Gregory XII)を擁護してビザアの會議をなみせり。ジョンはその兄弟の弑せられたるを憤りチーブルの王を破門し且つ之を位より斥けしめんとせしも遂にならず。是に於いて南部伊太利に遠征隊を派し自らその指揮者となれり。初めの程はジョンの軍連戦連勝頗る好況なりしも最後の成効は遂にラヂスラウス(Ladislans)に歸着し紀元一四二〇年ラヂスラウスは羅馬に凱旋したり。法王ジョン(Pope

ラヂスラウスの凱旋

John XII) はボローニャ(Bologna)に遁れジョンにフレデリック二世(Federico II)以来の有力なる王シギスムンド(Sigismund)の保護の下にその身を寄することゝはなれり。

シギスムンド(Sigismund)の後援を得て法王ジョンはコンスタンス(Constance)に宗教大會議をひらさぬ。されどかれが將來にとりてこは反つて開催せざりしを可とせしものゝ如かりき。

此の宗教大會議は明かに次ぎに示す如き主意によりて召集せられたるものなり。即ち、

- 一、西部基督教國を完全ならしむること。
- 二、宗教改革の運動に資する爲めなること。
- 三、異端邪教を抑壓せんが爲めなること。

これなり。紀元一四一四年九月五日會議は開かれぬ。出席者非常に多く四人の教長二十九人の大僧正七百の僧正その他多くの學者僧侶あり。そのうち佛蘭西派の代表者中にはデリー(D'Ailly)及びゲルソン(Gerson)などあり。英國僧正

コンスタンスの會議

ジョーン法王
排斥

中にはハルラト(Hallam)の如き有名なるものあり。かくて法王反対派よりも代表者を列席せしむることを許されたり。而してジョーンは此のコンスタンスの會議に於いて主宰者となれり。此の會議に就いて吾人の注意すべき點はその議するところがボヘミア(Bohemia)に於ける異端邪教の徒を抑壓せんとするにありしもの如し。この會議の結果は今後頗る注目すべきものなりとす。されど時代の思潮は又如何ともする能はず、宗教の改革と統一とを保つ爲めには基督教國の腐敗せる主宰者は之を廢するに若かず。やがて法王に對する暗闘非難の聲は囂々として四方に起れり。獨逸、佛蘭西、英國の三國民等は頻りにジョーン十三世(John XIII)の退かんことを主張してやまず。法王驚愕快々として樂しまざるに引きかへ會衆は法王の辭職の意を約せしめて快を買ひ喜ぶと云へるが如き有様なりき。而してジョーンは結局宗教會議を解散せしむるの方策に出するより外道なかりき。されど法王は身をやつしてシャーフハウゼン(Scharfhausen)に通れ、茲にコンスタンスの會議に對してひそかに自衛の道を講じ居たり。つまりジョーンが氣をもみたる點は帝王の暴虐、英獨の隆興、俗人

の僧侶侵害等の點にありしもの、如し。會議の進むところはいかで法王に顧みるの違あらんや。會議は法王の批准を俟つまでもなく、進行し教會の改革を斷行せんとし、果ては法王の排斥までも命せんとするに至れり。而して爾後會議は教會の主腦となり一定の時期に開かるべきものとなれり。かくてジョーン十三世(John XIII)に對する過激なる攻撃は益々度を高め來りて、遂にはかれに迫りて法王の位置より退かしむるべく公言せり。而して紀元一四一七年遂にジョーンは法王たる位置を退きぬ。

次いで紀元一四一七年十一月コロナ(Colonia)新法王となれり、マルチン五世(Martin V)即ちこれなり。マルチンは地歩を宗教會議に置き、マルチンが言は即ち會議そのもの、言なるが如き信用とオーソリチートを有せり。而して宗教大會議は五年毎に必ず一度開くべきこととなし、先づ紀元一四二三年には其の會議をピザ(Pisa)に開き、これに宗教改革の幾分なりとも決行せんと企劃したれども成らざりき。

これより先き、ブラーグ(Brague)に於けるフス(Hus)の改革的運動は効を見ずし

フスの末路

て、やみ、フスは羅馬宗教會議の爲めに破門されたり。單に破門せられたるのみならず、牢屋につながれ、ジギスムンド(Digismund)の面前に於いて異端を以つて目せられ、紀元一四一五年七月コンスタンスの市外一牧場のなかに於いて炮烙の刑に處せられたり。フスと共に運命を同うせしものはかのゼローム(Jerome)なりとす。かれも亦改革を唱へてヒルシャウ(Hirsau)の町に逮捕せられ獄にながれ残酷なる取扱ひにあひ、紀元一四一五年九月宗教會議の前に引き出されたり。ウイクリフ及びフスの罪状は尙此のゼロームの身にも亦敷へられぬ。かれが晩年に於ける新教義の許容及び學説は頗る見るべきものありしが遂に紀元一四一六年五月處刑臺に於いて美しき最後を遂げたり。

茲にマルチン五世(Martin V)が現れたるは羅馬人にとりて至大の幸福と云はざる可からず。否マルチンによりて羅馬の一黄金時代は發現せられたるものなり。實にマルチンは宗教分争の爲めに生じたる無政府黨を斥けて市街の保安を助け、教會の秩序を恢復し、街衢を整へ、公共の建物を建設したり。其の統御の精力と正義とに充ちたるはマルチンをして羅馬第三の建設者の名を冠せし

マルチン五世

め得て餘りあるが如し。マルチンは又外國の方面に於いても或は英國より或は佛國より少なからぬ尊敬を得たりき。

紀元一四二三年パヴィア(Pavia)に會議は開かれたり。されど改革の聲高き爲め共に此の會はマルチン自ら解散せしめたり。蓋しマルチンは此の會議を以つて時事問題を議するにはあまりに小さしとなしたればなり。かくてその後七年バーセル(Basel)に會議の開かるゝまでは延期せられたり。

紀元一四三一年一四七年バーセルの會議は召集せられたり。マルチンの後繼者ユーージーン四世(Eugene IV)の召集せしものなり。この會議は一方ならぬ改革的性質を帯びたり。法王はその改革的情神の執拗とその深きに驚き會議を解散せしめぬ。されど別に會議は開かれ、一つはフェララ(Ferrara)に開かれ次いでフロレンス(Florence)に開かれたり。法王怒り之が會議の列席者をすべて破門せしかば會衆は反つて法王を斥けその代りに新たに新法王フェリックス五世(Felix V)を立てたり。されど會衆相互の間にはかくてのみあることの自ら不利益を生ずるものあり、かくて一人二人と會衆は滅じ來りいつしか會議の理

想企圖は水泡に歸せざる可からざるに至れり。一度ならず開きに開きたる會議は全く功を奏せず今や會議の價値は認められずむしろ一個人の偉人なる力を俟つべきの時とはなれり。

今吾人は歐洲中世紀に於ける基督教史の大體を通覽したへたり。此の中世紀に於ける末期の状態はその初期に於けるそれと全く反對の觀あり。即ち從來基督教なるものが果してよく世界的に吾人の精神界を支配し得るものなるや否やの問題は今や全く解決の緒につけり。而して東部基督教と西部基督教とは全くそのところを異にし、東部に於いては昔日の觀を失ひ内部の分裂とサラセン人(Saracens)の蹂躪あり、僅かにロシア、希臘教(Russo Greek Church)の勃興ありし外全く世間よりわすれらるゝに至れり、爾來近世に至るもかはるところなし。若しかりに東方基督教會が終始正教派(Orthodox)に執して精神的統一を保守し居たりしならばその東方基督教國が有する廣漠たる領地はすべて、サラセン人(Saracens)によりて荒されたりしや必せり。

今日印度支那日本その他東洋諸國は總べて西方基督教國の布教に浴せるも

歐洲の教會狀

基督教發達

コンスタンチノーブル(Constatinople)セルサレム(Jerusalem)アンチオク(Antioch)及びアレキサンドリア(Alexandria)等を中心として之より東洋諸地方に福音傳道を數世紀にわたりてなし居たりしと云ふことは信すべきに近し。されど東方基督教國は衰へて中世紀の末葉(At the close of the Middle Ages)基督教の中心は全く西羅馬に歸着しぬ。而してかの有名なる宗教改革(Reformation)が獨逸の國に現はるゝまでは羅馬は其の勢力を依然その掌中に握り居たり。

いま基督教が此の中世紀に至りて改革の氣運の熟するに至りしまでの經路を概言せんに、八世紀より十一世紀の中葉に至る間に於いて獨逸の國民は福音に接せり。而してかれ等は基督教が世界的思想と世界的生命とを以つて將來大地歩を得べきものなることの大希望を有し居たり。

十一世紀の中葉より十三世紀の間にかけては實に法王の全盛時代とも云ふべき時代なりき。殊にグレゴリ七世(Gregory VII)及びその他十二三世紀頃の法王の時に於いて最となす。

中世紀の末葉即ち十四五世紀に於いてはサクソン(Saxon)の基督教徒とラテ